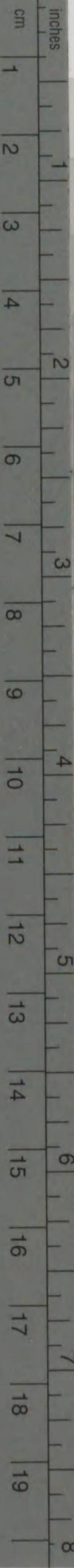
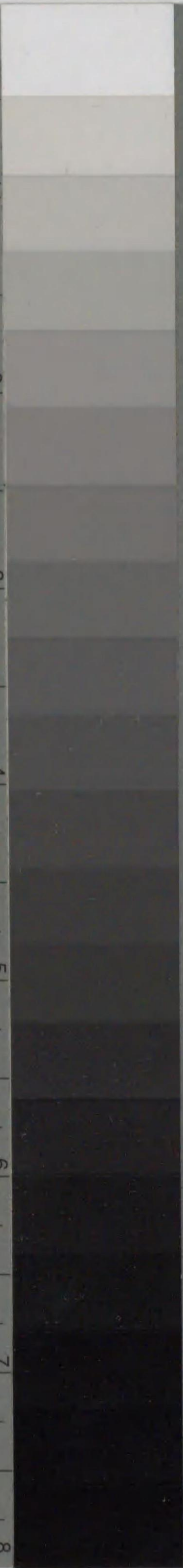


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



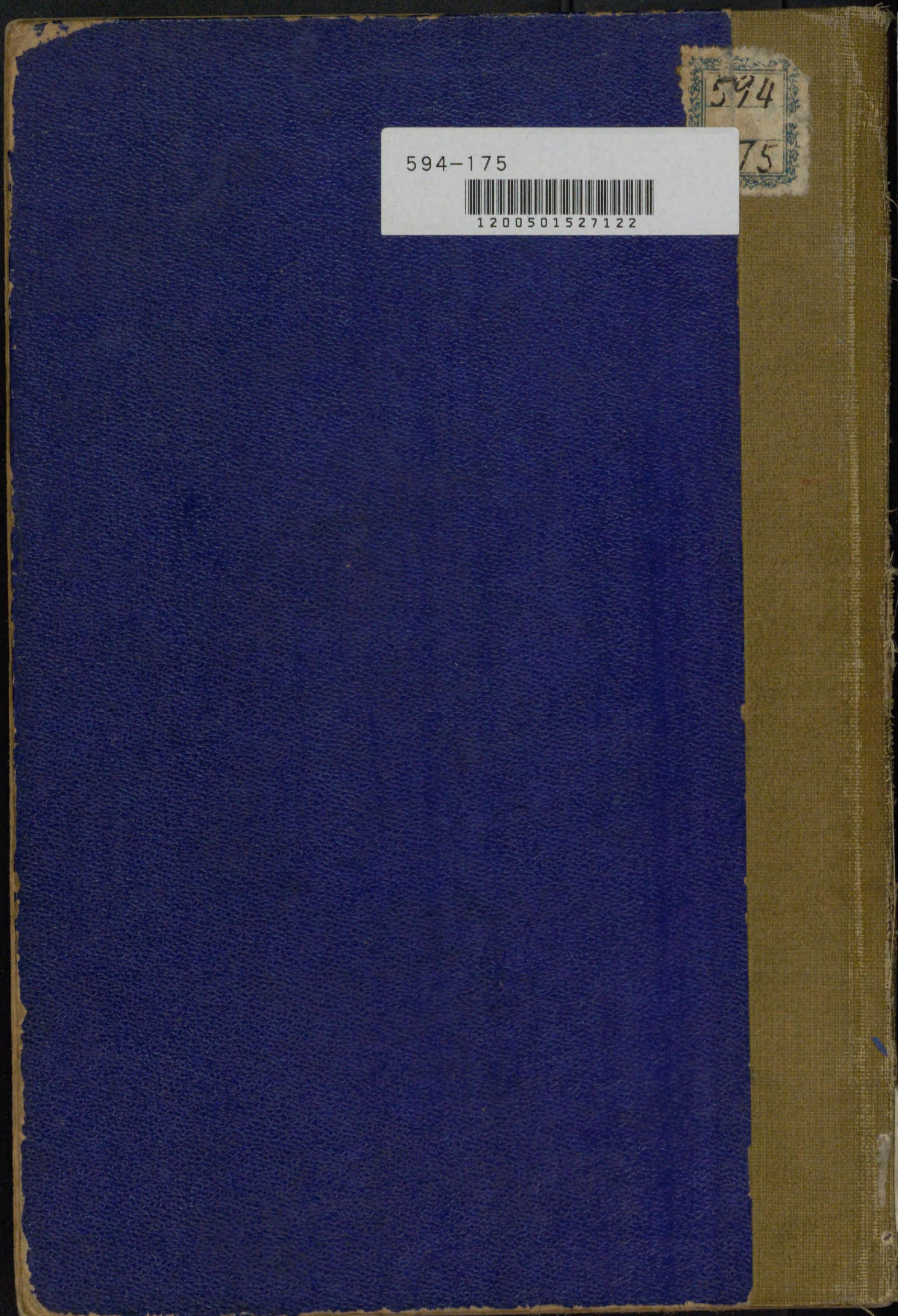
# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

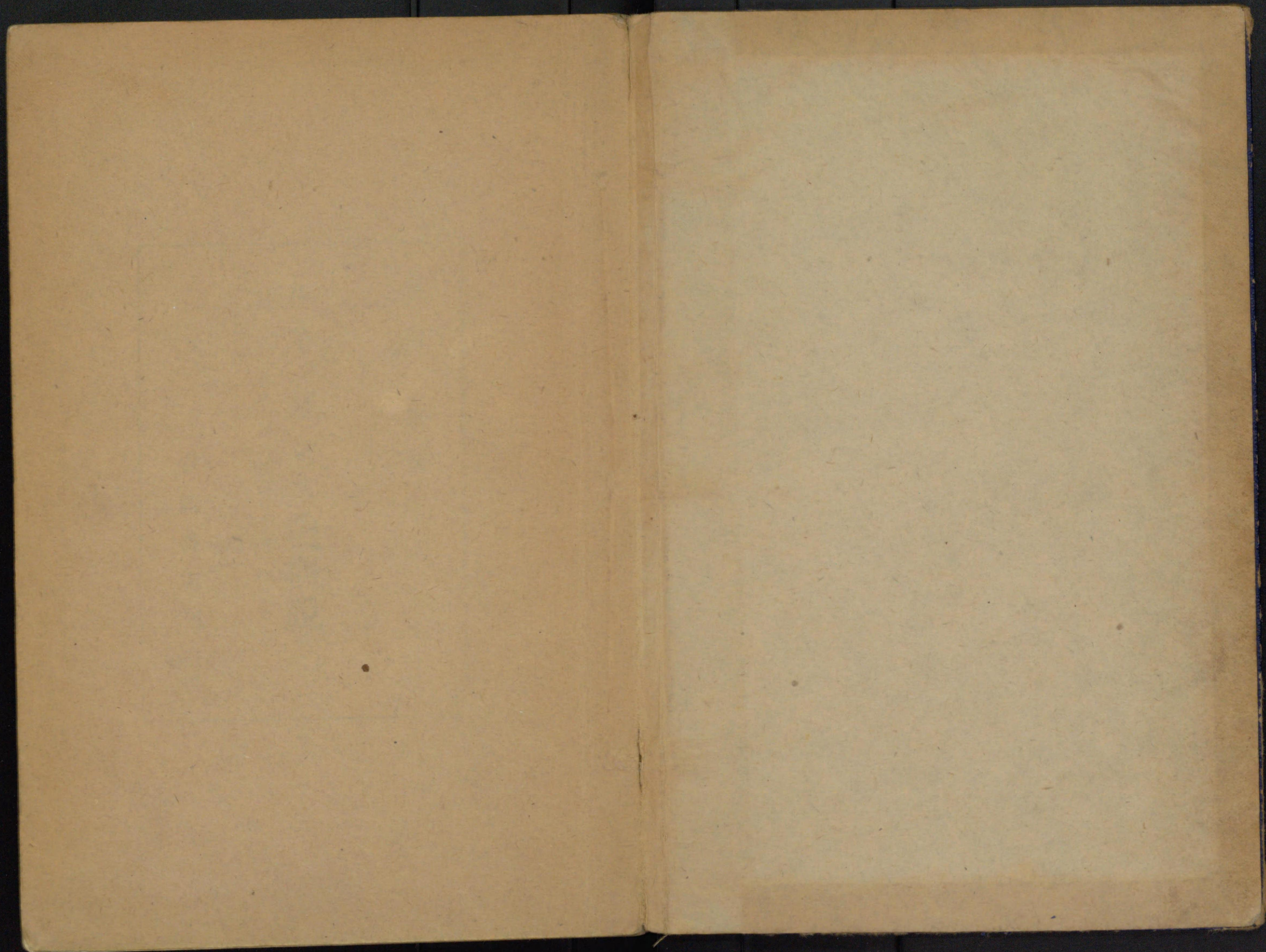


594  
75

594-175  
1200501527122









69



坂口 昂 著

ル  
ネツサンス史概説

フロレンス及びローマを中心として

岩波書店刊行





594-175

## 序

文學博士坂口昂先生が逝かれてからこゝに二年、その遺稿ルネッサンス史は旬日を出でず上梓されんとする。我等門下一同は再び先生の温容警咳に接する面持で、心からの喜びを以て本書を迎ふるものである。ルネッサンスの眞意義は十九世紀の中葉ブルクハルト、フォイグトにより闡明されてから絶えず進展しつゝあつた。博士はこれ等碩學の諸説を研究し、更に博士独自の史觀に基き、單なる藝術的批判觀照に偏せず、汎く國家、社會の諸事象と關聯せしめてルネッサンス時代を把握せんと試みられた。ルネッサンス研究の熾なる今日、本書が學界に裨益するところ頗る大なる事は疑を容れない。本篇は博士がその逝去の前年、昭和二年京都帝國大學の夏期講演會で説述せられた博士最後の研究發表で、講筵に列した猪谷文學士



序  
二  
が筆記し、博士自ら手を加へられたものである。挿入の寫眞の採擇、本文の校正等に就いては、原弘二郎文學士、猪谷文學士の兩門弟があたりられた事は博士も地下で莞爾としてほゝゑまるゝ事であらうと思ふ。

昭和五年二月

森の都にて

中村善太郎

# 目次

第一章	中古のイタリア	一
第一節	ルネッサンスの意義	一
第二節	中古イタリアの諸民族	四
第三節	第十二、三世紀に於ける都市　デルフ派及びギベリン派	九
第二章	千三百年代のルネッサンス	一七
第四節	フロレンス	一七
第五節	黄金の羅馬、一三〇〇年の祝典、コラ・デイ・リエンチ	二八

目次

一



第六節 ラテン文學の復活、國民文學の擡頭……………四一

第三章 ルネッサンス中期(千四百年代)……………六三

第七節 千四百年代の到來、希臘古典の復興……………六三

第八節 個人主義の發現 專制主時代……………七六

第九節 啓蒙的專制主としてのメデイチ家……………八三

第四章 千四百年代の隆盛 デイメデイチ

の時代……………一〇三

第十節 フロレンスの生活と詩人ロレンツォ……………一〇三

第十一節 プラトニズム……………一二六

第十二節 藝術……………一三八

第十三節 ウォーモウニヴェルザーレ……………一五九

第五章 歐洲政争の中心舞臺としての

イタリア……………一六九

第十四節 登場者の入換……………一六九

第十五節 フロレンスの政變 サヴォナローラ……………一七五

第十六節 法皇の政治運動……………一八一

第六章 羅馬の人生運動 千五百年代の

隆盛……………二〇三

第十七節 羅馬のヒューマニズムの初期……………二〇三

第十八節 ウルビノ、フェラーラ及びマンントワ……………二〇八

第十九節 ジュリオ二世の熱心 ミケランジェロ……………二一四

第二十節 レオ十世の時代 ラファエロ……………二三二



### 挿繪目次

1	十六世紀に於けるフロレンス全景(アリンズ・オア・オレンザが 攻圍中の圖).....	一八一—一九
2	パラッツォ・ウエツキオとサンタ・マリア寺院の遠望(フロ レンス)。パラッツォ・ウエツキオ(フロレンス).....	二〇—二一
3	十六世紀のローマ全景.....	二八—二九
4	庭園の側より見たるピツタイ館(フロレンス)。花のサンタ・ マリア殿堂の鐘樓(フロレンス).....	八六—八七
5	ダンテ像。コシモ・デイ・メデイチ像。フロレンツォイル・ マグニフィコ像.....	九〇—九一
6	ブルネレスコ像。マキアヴェリ像。マルシリオ・ファイチ ノ像(アリチシ・ミュージウム).....	一三〇—一三一

7	ヴィナスの誕生 ボツタイチエリ作(フロレンス)。春 ボ ツタイチエリ作(フロレンス).....	一四六—一四七
8	サン・デオヴァンニの洗禮堂の東門扉 ギベルタイ作(フ ロレンス).....	一四八—一四九
9	ロッギア・デイランチイ館(フロレンス)。サン・デオヴァンニ の洗禮堂(フロレンス).....	一四八—一四九
10	最後の晚餐 レオナルド・ダ・ヴィンチ作(ミラノ)。ダヴィ デ ドナテロ作(フロレンス).....	一五六—一五七
11	唱歌壇の浮彫 ドナテロ作(フロレンス)。唱歌壇の浮彫 カントリア	一五六—一五七
12	ルカ・デラ・ロビア作(フロレンス).....	一五六—一五七
12	ピエタ ミケランジェロ作(ローマ)。ダヴィデ ミケラン ジェロ作(フロレンス).....	二二〇—二二二
13	システイン・チャペル正面圖(ローマ)。システイン・チャペル	



14 正面壁畫、最後の審判 ミケランジェロ作(ローマ)……………二二六—二二七

14 システイン・チャペル天井畫(ヴァティカノ) ミケランジェロ作(ローマ)……………二二六—二二七

15 システイン・チャペル天井畫の一、アダムの誕生 ミケランジェロ作(ローマ)。システイン・チャペル天井畫の一、原罪と樂園追放 ミケランジェロ作(ローマ)……………二二八—二二九

16 モーゼ ミケランジェロ作(ローマ)。聖ロレンツォ寺院のロレンツォ・ディ・メデイチの墓 ミケランジェロ作(フロレンス)……………二三〇—二三一

17 バルナツソス ラファエロ作(ローマ、ヴァティカノ)。アテネの大學殿 ラファエロ作(ローマ、ヴァティカノ)……………二三四—二三五

18 法皇レオ十世 ラファエロ作(フロレンス)。法皇ジュリオ二世 ラファエロ作(フロレンス)……………二三四—二三五

19 「トランスワイグユレエシヨ」  
「基督變容」 ラファエロ作(ローマ、ヴァティカノ)。聖母像  
ラファエロ作……………二三六—二三七

20 白鳥と共に在るレダ アレグリ・コレツチオ作(パリ、ルーヴル)。合奏 チョルチオ・バルバレリ作(フロレンス、ピッツァイ寺院)……………二三八—二三九

21 マリアの昇天 テイチアノ作(ヴェネチア)。天の愛、地の愛  
テイチアノ作(ローマ)……………二三八—二三九

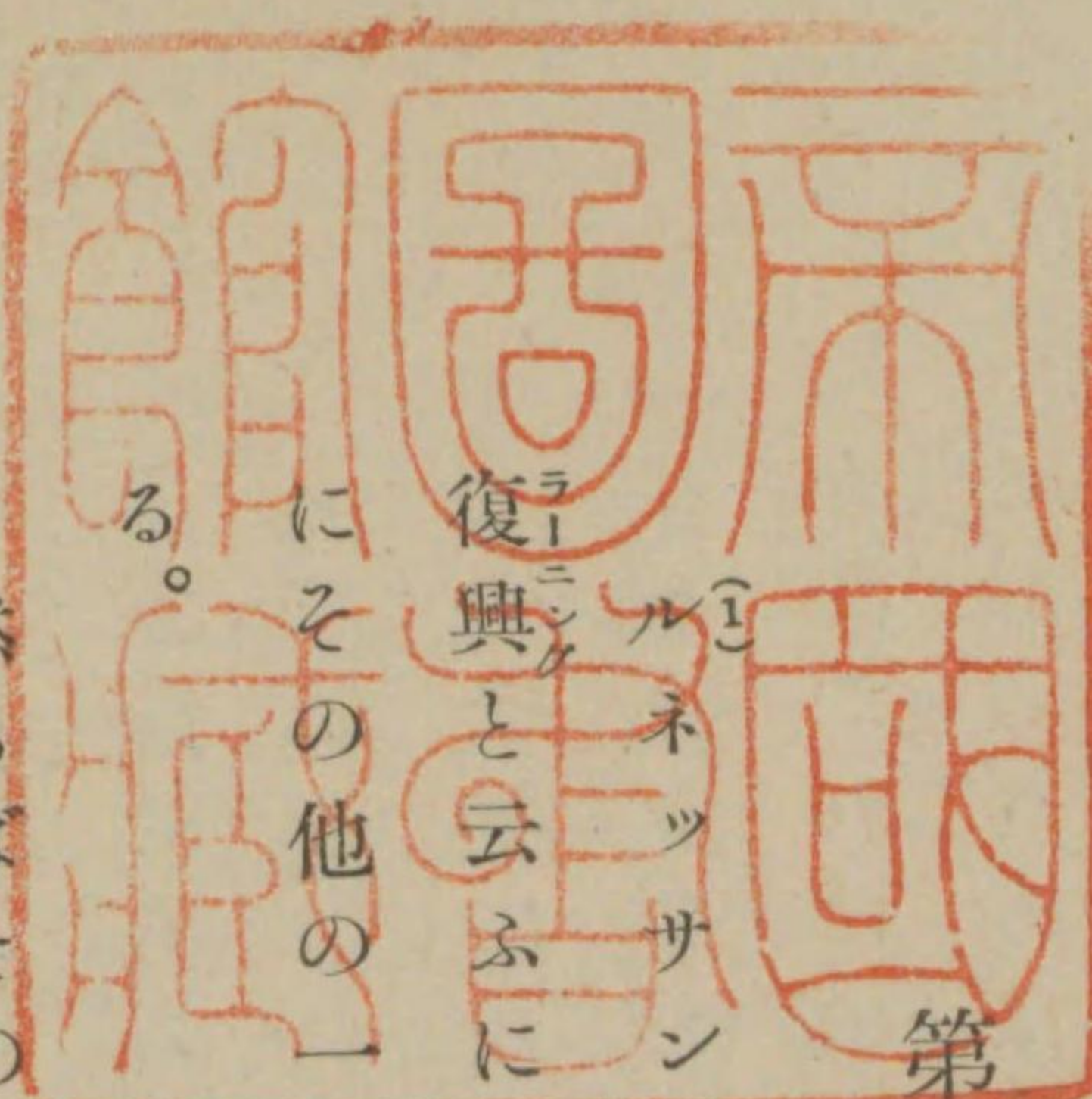


# ルネッサンス史概説

## 第一章 中古のイタリア

### 第一節 ルネッサンスの意義

ルネッサンスと云ふ言葉は單に再生リバイバルといふことであつて、最初は學問リワイバル・オブの復興リバイバルと云ふにある。しかしそれがやがて藝術の復興の意味にも移され、更にその他の一切の現代生活の勃興と云ふ事にも用ひられるに至つたのである。然らばその復興するのは抑も何の學藝であるのか、これは勿論クラシカル・アンティキティ古典古代のそれに外ならない。即ち羅馬帝國衰亡と共に隠滅して現はれる事のなかつたのが、このルネッサンスの時代に至つて始めて蘇生、勃興したことに



第一節 ルネッサンスの意義

(1) Renaissance.



なる。して見れば、古典學藝の盛時とその蘇生勃興の時代との間に吾人は一箇の長い中間の時代を考へる事が出来る。これ即ち中間時代 *Medium aevum* 或は *Medii aevi*, *Mediaeval Age* と呼ばれ、古代及び近代と對照するための中古と意譯せらるべき時代なのである。この中古の存在と云ふ事は、ルネッサンスの終、十七世紀の頃から學者の構想に上つた事であつて、それによると一千年に亙る中古期は全く野蠻暗黒な時代であり、然る後にダンテ以後にルネッサンスの三百年があつて初めて文明の光が復興したものである、と説かれたのである。成程、大體はそれに違ひない。しかしよく考へると、この考へ方は恰も無から有が生じた如くに古代文化がルネッサンスに於て突然に再現したやうに説く傾向を有するものであつて、中古期に於てのそれに固有なる文化發展の貢獻を正當に評價しないものである。それ故に十九世紀に入り浪漫主義ロマンチズムが起るに及んでこの從來の考は漸次修正される事となつて遂に同世紀の半ばにブルクハルトブルクハルト、フォイクト等のルネッサンスに

(1) Jacob Burckhardt. (1818—97)

(2) Georg Voigt. (1827—91)

ついでの研究が發表されて、大體正しい姿で引き直されて來た。しかし是等進歩した研究家と雖も尙且つ舊套に囚へられざるを得なかつた。而して漸く最近の研究に於て、ルネッサンスは決して一時に發生したものでなく、長い中古の間に徐々に勃興し來つたもので、たゞ上に暗示したが如き十四世紀頃十四世紀頃から加速度に進歩したに過ぎない事を説くやうになつて之に決定した。苟くも、よしや徐々になりとはいへ、榮栄え栄ゆく栄人生人生が精神及び藝術の生活に於て、いや高く高まり、いや廣く廣まり行く傾向を有する限り、それが凡てルネッサンスの發生であり得るわけではないか。かく考へれば、ルネッサンスなるものは冒頭に指摘したが如き單なる古代文化の復興のみではない事が歴史的に推定され得るであらう。何となればこの復興を準備し、促進したものは中古生活の發展であつた、そしてこの復興を自分固有のものにしたのがこの發展を成しとげた近代民族であつたからである。私はこの意味に於て本講演の序論として中古のイタリヤを説かねばなら

(1) *Humaniora*.



ぬと思ふ。尙ほ全體の計畫についても斷つておきたい。即ち限られた時間  
 に於てあるから、私はイタリアだけの講述するのであつて、それ以外  
 のルネッサンスに及ぶ事ができず、そのイタリアに於ても特に重要なフロ  
 レンス及び羅馬を説くのみで満足しなければならぬ。この事も豫め諒解  
 しておいて戴きたい。

### 第二節 中古イタリアの諸民族

諸 中古のイタリアを形造つた民族及び文化要素は何々であつたらうか。  
 古代に於ける侵入者を省けば、まづ第一に指を屈すべきは中古の始、民族  
 大移動の潮流に乗つてアペニン半島に入つたゲルマニである。その中に  
 はゴート、ロンバルド、フランク、ドイツ等を數ふべく、彼等はつぎ  
 に現はれて來ていづれも古き久遠の都羅馬を何よりの目標とした。就中  
 後の者はオットー大帝以來、中古に於ける羅馬の主人公である法皇と結托

(1) Germani. (4) Frank.  
 (2) Goth. (5) German.  
 (3) Lombard. (6) Otto. I. (912—973)

してドイツ國民の神聖羅馬帝國を創り、之を、その餘波は別として活躍期  
 だけでは十、十一、十二、十三の四世紀にわたる約三百年間維持したので  
 ある。ともかく概括していつて、これらのゲルマニ民族の要素は北方から  
 中央へかけて半島に強い印象を刻みつけ且つは大きな影響を残して居る。  
 次いで擧ぐべきは新しい羅馬であるコンスタンチノープルから希臘的要素  
 を齎らしたビザンツ人である。彼等は中古の初二百年間古代が残したアド  
 リヤの海口ラヴェンナに總督府を置き、その地と南イタリアとを支配し、  
 殊にこの南伊の支配はノルマンの來侵まで續いた。更に次にはアフリカか  
 ら海を渡りシチリア及び南伊に侵入割據したサラセンがあつた。十一世紀  
 には前記のノルマンがフランスからやつて來て先住者たるビザンツ人やサ  
 ラセン人から南伊を割き取つてナポリ・シチリア王國を創めた。このノルマ  
 ンはフランス化したゲルマニ族である。そしてかの神聖羅馬帝國の活動期  
 の晩年、その帝位の保持者スタウフェン家と通婚合體した。この帝國が衰

(1) Byzantine. (4) Sicilia.  
 (2) Ravenna. (5) Saracen.  
 (3) Norman. (6) Napoli-Sicilia.



へるや、佛蘭西のアンジュー人は法皇の招に應じて南下し、スタウフェン・ノルマンから南伊を奪ひ、最後にはイスパニアからアラゴン人も海を渡つてシチリアを占めると云ふ有様であつた。かくて中古のイタリアの民族的要素は頗る複雑混殺し、殊に南イタリアの如きは以上列擧した要素の凡てを含み幾多の異民族及びそれらの文化の交叉集中する焦點とさへなつた。

この諸民族の要素の混合はスタウフェン・ノルマンの結婚から生れた皇帝フリードリッヒ二世(一二五〇年崩す)によつてよく代表されて居る。彼は神聖羅馬帝國の政治上元首の最後の有力者であつて、羅馬法皇と争ふて有名である。彼はその父系に於てドイツ人で母系に於てノルマン人であり、しかもイタリアで生れイタリアで死んで居り、その人となりドイツ人であるより以上にイタリア的であつた。しかのみならず彼の朝廷では當時南佛に盛であつた吟遊詩人等(1)のプロヴァンサル文學が榮えて居た。殊に彼自らはその幼年時代をシチリアの都パレルモ(2)に過し、その教師の中にはサラセン

(1) French-Anjou. (4) Friedrich II. (7) Palermo.  
(2) Staufeu-Norman. (5) Troubadour.  
(3) Aragonese. (6) Provençal.

人もあつたから、教育に於ても思想に於ても、當時南イタリアに卓越したビザンツ及びサラセンの文化要素をも多分に攝取し、みづから東方文化に關する著書も書いて居て、かゝる意味に於ては寧ろ東洋人であつた。されば當時イタリアの環境が提供する一切の要素はこの君主の一身に結合して現はれ、その結果ブルクハルトの所謂「君主の位に登りたる最初の現代人」となつたのである。しかし彼はそれのみには止まらなかつた。ブルクハルトの後にこの君主の建築彫刻の方面の研究が行はれ、彼がこの方面に於ても近代的である事が明かにされた。即ち彼は當時流行のゴシック(3)以上にいで甚だ進歩した様式、エミール・ベルト(4)氏の所謂皇帝式美術(5)を作らしめて居たのである。彼がイタリア本土に残した數多い宮城(6)の中、彼が好んで住んだカステロ・デル・モンテはその代表的のものである。これは南イタリアの東海岸に向いたところ、カンネーの古戰場附近の山地にある。しかしよく考察してみると、以上フリードリッヒ二世の一身に結合され

(1) "Der erste moderne Mensch auf dem Thron."  
(2) Gothic. (4) Art impèrial.  
(3) Emile Bertaux. (5) Castella. (6) Castello del Monte.



たものは異國の要素が多い。即ち、これらは、當該民族が概して侵入者、征服者、支配者として入り來つた結果、イタリア社會の只だ一部を形づくつたに過ぎない。そしてイタリア人口全體の主要部分は何かと見るに、彼等は依然として古の羅馬帝國時代以來傳來した要素を保有して居た。唯この傳來は大なり小なり、異國、殊にゲルマニ要素の影響を受けて純粹性を失ひ、言語風俗に於て古典の性質から中古の性質へと轉化して來た。吾はこれを學術上羅馬風(1)と云ふ廣い名稱の中に網羅し、以て一方シセロ(2)、アウグストゥス等の古のイタリア人の羅馬的(4)なものから區別すると共に、他方、同時代人たる北方のゲルマニのゲルマニ風(5)からも區別するのである。かくて當時のイタリア社會の重要な要素を構成するものは實にこの羅馬風(1)であつた。然してこの要素の集中點は北部及び中部イタリアで、就中市及びその周圍であつた。

(1) Romanic. (2) Cicero. (3) Augustus. (4) Roman. (5) Germanic.

第三節 第十二、三世紀に於ける都市

ゲルフ派及びギベリン派

古代帝國が中古へ傳へ残した都市は概して民族大移動の破壊を受けて到るところ衰微を免かれなかつたが、しかし、アルプスの南北によつて比較するに、イタリアに於けるものは嶺北ほど甚だしくは零落しなかつた。彼等にして羅馬時代から殘存して、依然として古の自治市(3)の面影を留めて居るものも少なくなかつた。

是等の都市は帝國の知事たる伯爵(4)と教會の司教(5)の兩者の支配を受けて居た。知事は多く市外に堅固な城(6)を築いてこゝに居り、宛然封建の大名の如くなつた。尙ほまたブルグスといふものも建てられた。このものは概して固有の都市の外郭に民衆が町の形をなして密集住居する所を云ふもので、やはり都市の支配下にあるが、しかし本市の如く堅固な防禦を未だ施して

(1) Guelfs. (2) Ghibellines. (3) Municipia. (4) Comes. (Comnts) (5) Bishops. (6) Burgus. (Borgo)



居ないのが普通であつた。市の自治の役人としては古羅馬を偲ばせる名にしおふ<sup>(1)</sup>コンスレスとか或はユデイ<sup>(2)</sup>チェスとかいふ名稱の公吏が選出され主として財政建築の事に當つたが、是等の人々の中には時として知事即ち豪族と同等或はそれ以上の權力を有する者さへ現はれた。これは古代羅馬固有の法律及び制度が、民衆の實力の増加と共に復活して效力を生じ、中古帝國の封建の法を壓倒するに至つた事を意味するものである。一體イタリアでは概して封建制度はアルプス以北に於ける程盛にはならなかつた。それはイタリア市民の個人主義が強烈であつたが爲に、彼等は各、その都市に據り羅馬傳來の自治の權利を固守したからである。都市は封建の豪族に對して自己即ち民衆<sup>(3)</sup>の權利を主張して譲らず、その爲、市外の城塞に立てこもつた封建豪族は漸次衰微し、残つた者も自然と市中に入り市の上流社會<sup>(4)</sup>に加はり、市内又はその附近に館<sup>(5)</sup>を築くやうになつたのである。フロレンスではかゝる豪族を「塔と廊の族」と呼び慣はした。それは館の建築に於て

(1) Consules.  
(2) Judices.  
(3) Popolo.

(4) Grandi.  
(5) Famille de torre e loggia.

これに高い塔が聳へ綺麗な廊が附いて人目を惹くからである。そして彼等は互に黨を結んで相争ひ、各、その館を根據として市中に於て對抗するに至つた。

時は恰も十二世紀、神聖羅馬帝國に於て法皇と皇帝、皇帝と諸侯が鎬を削つて相争ふた時代に、當時の帝位を占めてゐたフランコニア家がハインリッヒ五世で死絶えた後、誰が跡目相續するかといふ皇帝選立の事に就き、サクソン及びバヴァリアのウエルフ家とフランコニア家の姻戚であるシューーベン<sup>(1)</sup>のスタウフェン家とが争ひ、前者はウエルフ黨をつくり、後者はワイブリンゲン<sup>(2)</sup>(スタウフェン家の居城の一つ)黨を成して相抗争した。この黨争はやがてイタリアにも移された。そしてこゝではウエルフはゲルフと訛り、實質上大體法皇派といふことになり、ワイブリンゲンはギベリンと名乗られ、概して皇帝黨といふことになり、都市と都市ばかりでなく、各都市の内部に於てすらこの二つの名目によつて兩黨の對立が起つた。これ

(1) Franconia, Heinrich V. (4) Schwaben.  
(2) Saxony. (Sachsen) (5) Welfen (the Welfs.).....Guelfs.  
(3) Baviarii. (6) Waiblingen (the Stanfen).....Ghibellines.



らの抗争の一つ々々を見れば決して法皇主義と皇帝主義、又は教會理想と帝國思想といふやうな大思想の抗争を主要問題として争つたのではなく、實は主として各自固有の個人的敵對や地方的利害に關しての死物狂ひの争であつた。この争に於て、上流社會は概してギベリン派を形成して皇帝側に立ち、一般民衆は多くゲルフ派に屬して法皇及び教會と協同提携した。そして相争ひ抜いた揚句、勝敗が決すれば勝者は敗者の首領を殺し、その館を壊し、文字通りに「地均し」をし徒黨全部を放逐してその財産を沒收した。一方放逐された者は近隣の都市に逃れ、機會を窺つて復活を計つた。かくて兩派互に限なく復仇と亂暴を繰返した。

しかしこの黨争の弊が極まるや、市民の間にかゝる不安の状態から脱れて市の繁榮を講じようとする者が起り、遂にまづボロニア市ではコンスレスを廢し、その代りにポデスタといふ役人を置く事となつた。この制度はやがて他の市にも及ぼされるに至つた。これは當該市の市民でない市外か

(1) Bologna.  
(2) Podesta.

らの有力者を呼び迎へて皇帝の權力を委任し、政治及び裁判を行はしめるのである。この役人を權力といふ名を取つてきてこそポデスタと呼むたのである。この他に別に民長(2)カピタノ・デル・ポポロと云ふ役を置く事もあつた。是等の新らしい役人は黨争政治の行き詰りの結果、局外中立の外國人を招聘して市の裁判、行政を委すの止むなきに至つたもので、しかもその方が却つて公平でもあり、實際に適したものであつたからなのである。

かゝる政治上難局に立ちながらも、イタリアの諸市が經濟上の能力に於ける發達を妨げられなかつたのは當時の特徴であつた。それは主として十字軍時代及びこれにつゞく時代に於て通商貿易の世界的飛躍があつて、その内に於てイタリア市民が最も活動したものであつた。この經濟的發展の爲め都市の權力はやゝもすれば富豪の手で壟斷されがちであつたから、一般の人民は職業上の組合(3)アルティを作り、この組合を通ほして市の權力への仲間入を要求し、遂には一切組合の合同會議(4)バルラメントを起して自治體(5)コンムニテを完

(1) Potestas imperatoris. (4) Parlamento.  
(2) Capitano del popolo. (5) Comune.  
(3) Arti.



成するに至つた。かくして以前は上流社會對民衆の抗争であつたものが今は移つて富<sup>(1)</sup>豪對貧<sup>(2)</sup>民の争となり、有力者にして野心を抱く者は貧民に與し、之を利用して權力を壟斷する事がしばしばあつた。

自治體は單に一つの市の内部だけではなく、市外の地方にまでその支配をひろげて居るのが、その常であつた。そして苟くも自己の市の繁榮に係ある土地、河川、港灣、通路等の利害問題に就いては戦を賭してまでも他の自治體と争つた。就中尤も著しい抗争を續けたのはフロレンス對ピザ<sup>(3)</sup>、ピザ對ジェノヴァ<sup>(4)</sup>、ジェノヴァ對ヴェネチア<sup>(5)</sup>、ヴェネチア對ミラノ<sup>(6)</sup>、ミラノ對パヴィア<sup>(7)</sup>等であつた。

かくの如き對外的抗争は市内の黨争と結合して屢、市内に於ける政變を惹起した。而してその際に於ての發展は次の如き一般的徑路を取つた。即ち、從來民主的都市共和國であつたものが、一種變態の中央集權的都市君主國と化したのである。前者は十二、三世紀に盛であり、後者は十四、五世紀

(1) Popolo grasso.  
(2) Popolo minuto.  
(3) Pisa.

(4) Genova.  
(5) Venezia.  
(6) Milano.

(7) Pavia.

の傾向である。かくて十四、五世紀には所在に専制主<sup>プスボット</sup>或は僭君<sup>タイラント</sup>が起りつゝ、あり、かくの如くなるには、その先例は乏しくなかつた。現に、既に述べたかの十三世紀の半ばまで支配した皇帝フリードリッヒ二世の如きは勿論一都市のでなく大國の君主であるが、その政治の専制であるといふ點に於て、當に隨一の模範を示したと云ふべきであらう。又た近くは十四世紀の始、ダンテの亡命時代に北イタリアのヴェローナ市に於てスカローラ家からカンといふ人傑が起つて市並に北伊に於ける他の多數の市を支配して専制政治を建てた。彼は<sup>グランデ</sup>大君と稱せられ、皇帝ヘンリ七世が南下して來るや、之を歓迎援助して帝國代官の稱號を賜はつた。彼はその朝廷には多數の有名なる亡命客を集めて優遇し親しく交はり宛ら全イタリアと膝を交へて談論するの概があつた。ダンテはその一人であつた。かくの如きが當時の流行であつた。それでイタリアの到るところ風を望んで小規模ながら幾多の専制君主が勃興して近代的な國家を樹立したのである。



## 第二章

### 千三百年代のルネッサンス

#### 第四節 フロレンス

イタリア諸都市の獨立發展は各都市それづゝに、多かれ少なかれ獨得固有の姿を與へる事となつた。たとへば、ロンバルディア大平野に於て盟主の位置を占めて居るミラノでは概して皇帝派が勝を占め、早くより專制政治の模範を立て、これに反してアドリア海の都ヴェネチアは夙に東方へ乗り出してビザンツと往來し、海外で獲得した領土と擴大した通商とを基とした鞏固な富豪共和政治の典型となつた。これら北伊の二強國と對立して中伊の西北、トスカナの地方に起つて、一種の民主的市民政治を發展させ、イタリアの共和國の龜鑑となるべきものはフロレンスであつた。この市の發展はイタリアのルネッサンスに最も關係を有することであるから、吾々



はこゝに幾分か詳しくその政治と社會とについて概瞥しておかなければならない。

「<sup>(1)</sup>ラ・ベラ・ファイレンツェよ！ 一たび美しいフロレンスを訪ねた事ある人はこの近代的な呼びかけを懐しみ、いつまでもその真なるを忘れ得まい。なだらかなトスカナの山々に取巻かれ、西々北へ開いた小ぢんまりとした平和な野を、同じ方向に流るゝアルノーの豁間、その河岸にひらいた可愛らしい「<sup>フロレンタイア</sup>花の都」！ 名詮自稱げに市の額を飾る紋所も白百合の花である、市の心を護りたまふ大伽藍の主も「<sup>ド・モ</sup>花の聖マリア」と唱へられた。この地、アルノーが海に注ぐピザの沖から直徑約七十五吉米の正東の内地にあつて海拔五十五米突、こゝでは河幅一二〇—一六〇米突、瘠せがちな水を挟みて兩岸はアルノー<sup>ルンガリ</sup>河岸通り、これを有名な古<sup>ボシテウエツキオ</sup>橋を始め、今は六條の橋が結びつけて居る。市の大部も主部も多くの記念物も右岸の平<sup>ピテ</sup>にある。左岸の市は傾斜地であつて岡<sup>ボツジオ</sup>といふ、こゝにもさすがに見るべきものが少くはない。

(1) "la bella Firenze." (Florence)



景全スツェロフるげに紀世六十



ピツタイ館に收められた畫廊の如きである。試みに左岸の高地にあるミカ  
エルアンゼロ公園ピアツツァーレに登つて眼を放てば、人のよくいふやうに、成程一種の  
京都の面影を一瞬に收め得るであらう。近くには對岸パラツツォオウエツキオに古館の高塔や、  
大伽藍ドイモの圓塔やが聳え立つ。稍遠くしては西北の方約五吉米の小高き山上  
(海拔二九五米突)に別莊地として將た修道院の所在地として名高きフイエヅ  
レを見出すであらう。すべてこれ一幅の好パノラマ、宛ら圓山の半腹に上  
つて、鴨川を隔て、京洛十萬の藁ごしに西北の方金閣寺畔衣笠山あたりを  
眺めるやうな感じがする。只だ京都よりも平野が狭く市のひろがりがが小さ  
いのは勿論であるが、いづれの西洋都市にも見られるやうに立體的に高く  
とり／＼に建てられてゐるから、今日は頗る現代化してゐるも、尙ほ幾多  
の古建築を存し、遠近に散在する林巒亭榭と相俟ち、満目の光景は裕に由  
緒ある一古都の觀を呈して居る。げに美はしのフイレンツェよ。

この市は羅馬時代にはフロレンティア(1)と呼ばれファエスレート市(2)今のフイ

(1) Florentia.  
(2) Faesulae. (Fiesole)





望遠の院寺アリマ・タンサとオキッェウ・オツツラバ



オキッェウ・オツツラバ

エゾレからアルノー河畔に接して設けられた植民地であつたが中古生活の進むに随ひて漸次勢を加へ、かのタスカナ伯爵夫人マテイルダの支配の時代、即ち、十一世紀から十二世紀への移り目のころから盛となり、第二周壁(チェルキア)を作つて従來の周壁外の市街を收容し、また母市であつたフイエゾレと争ひて遂に之を下し、地方(コンタドー)に編入して居る(一一二五年)。これフロレンスが強く盛んになつた何よりの證據である。その三年後に従來からの唯だ一つの橋である古橋<sup>ボナ・ウエツキオ</sup>だけでは事足りないので新橋(ボナ・アラ・カライア)を架し、更に同世紀の半ば、ダンテの生れるまでには第三、第四の橋が出来て居る。而してフロレンスの信用と權力との印となるべき金貨フロレン(フィオリノ)の鑄造もその頃に始つた(一二五三年)。ついで更に市街取圍の必要が起つて第三即ち最後の周壁が出来た(一二八四年)。ダンテの齡三十年代、この十三世紀の終までに既に大伽藍<sup>ドモ</sup>も市役所<sup>パラツツオ・ウエツキオ</sup>も起工されてゐる。以てフロレンスの富強に赴きつゝあるを察すべきである。

(1) Matilda, Countess of Tuscany.



吾々はまづ政治上の發展を説かう。十三世紀にはかの法皇派對皇帝派の黨争はイタリア半島を通じて盛んに行はれた。この渦中にあつてフロレンスは概して法皇派側に立つて居た。しかし市内に黨争の騷擾絶えず、十三世紀の移り目には黑黨對白黨(1)ネリ・エ・ビアンキといふ新しい名目での争が勃發して、從來からの黨争に結びついて波瀾が一しほ大くなつた。ダンテが國を追はれたのも、彼が丁度この黨争の年(一三〇〇年)の市參事員の一人であつたから、その卷添を喰つたのである。爾來フロレンスに於ける黨争尙ほ未だやまず、しかもそれはとかく政權を握つた法皇派(2)ゲルツに對する皇帝派(3)ギベリンの恢復運動により一層劇烈になつた。そればかりでない、時には突發的にアルプスの北方から皇帝の位を要求する者が山を下つて、半島諸國の均勢を破る事が一再ならずくり返された。現にダンテの亡命中にはル(2)ュクサンブルグ家のヘンリ一七世、次にペトラルカの中年頃にはバ(3)ヴァリアのルイ等がつぎ／＼に遠征して來たが如きことである。かゝる黨争と外患とに悩まされがちであつ

- (1) Neri e Bianchi.  
(2) Henry VII. of Luxemburg.  
(3) Louis of Bavaria.



たから、フロレンスはその治安と繁榮とを維持するため、或は雇兵を呼び入れ又は外國君主から援兵を乞はねばならなかつた。最も重要なのは半島に於ける法皇派の重鎮として、フレンチ・アンジェー家が新に建て、居るところ、即ちナポリ王國からの入援であつた。それで、かゝる動搖の中にありながらも、法皇派は大體に於てこの市でその地位を維持する事が出来た。しかしその政治は市民の勢力の勃興の爲め、必然的にその内容を封建的貴族政治から商工組合(アルテイ)の支配する資本家的市民政治へと變へなければならなかつた。即ち最初は富豪は下層人民を指導して古來の閥族と抗争し、概して勝利を得て居たが、やがては、下層人民が自己の生活向上の爲め市民権を求めるに至つたから、政治の趨勢は大組合(アルテイ・マジヨリ)に對する小組合(アルテイ・ミノリ)の擡頭、富んで市民権を有する者に對する貧にして市民権なき者の抗争へと移つたのである。而してその争の一大破裂は遂に一三七八年に勃發した。チオンピ(民衆の叛亂として有名なる民衆の富

(1) Ciompi.

豪に反抗する一揆は即ち是れである。この時フロレンスの豪族たるメディチ家のサルヴェストロは自分は富豪なるにも拘らず、貧民に同情して隠然そのチャンピオンとなつて盡力した。爾來メディチ家は民権の有力なる保護者の一人として仰がれる事となつた。法皇派はこの時の叛亂に懲り、その後は益々人民に讓歩する様になつた。かゝる内部の動搖に加ふるにボツカチオの十日物語で知られてゐるが如き疫病の流行、外國との戦、當時歐洲ではかの百年戦役の時代として外國君主へ貸金してその倒れ等の不幸が續いたにも拘らず、尙ほフロレンスは繁榮への路を進んで居た。この繁榮の原因は何か、曰く海外貿易の發展である。しかしこの方面にも最初は一大困難が横たはつて居た。それは既にふれておいた、かのフロレンス年來の仇敵たるピザの執拗な妨害である。ピザは皇帝派である、そしてそのアルノー河の出口にあるといふ地勢を利用し、關稅を高めて、動もすれば港を塞がうとし、フロレンスは金力と外交とを以て之に當つた。外交は主とし

(1) Suvestro di Medici.



て上述のナポリ王國及びフランス本國との提携によつたのである。然るにビザは他方ジェノヴァと猛烈に海上權力を争ふて敗北した、め漸く衰へたから、之に乗じてフロレンスは一四〇六年を以て遂にビザを陥れて永久に之を合併し、こゝに始めて海上に於ける有力な強國となることが出来た。

以上は主として十四世紀に於けるフロレンス發展の政治的方面を概観したのである。私は尙ほ同時代のフロレンスの社會状態を一瞥しようと思ふ當時のフロレンスは、之を類推法によつて描出せば既に宛も古代希臘のアテネ、十七世紀のアムステルダム、十八世紀の倫敦に匹敵する位置に達して居たのである。市の重なる商人は歐洲及び東方、即ち當時の開化世界の到る處に於て根據地を構へ、隨てフロレンスの製造品の或物は世界無比無競争の聲價さへ博すると云ふ盛な有様であつた。製造品では數多有名なものがある中で加工染色した反物類は最も世界に知られ居た。又たこの市の銀行家で外國の君主又は政府に金を貸す者も少くなかつた。イングラ

- (1) Athene.  
(2) Amsterdam.  
(3) Cambio.

ンドのエドワード三世の如きは百年戰役に際して、フロレンスのバルヂ家から九十萬リラ、ベルツチ家から六十萬リラの借金をしたといはれる。その他、この市の資本家は屢、外國の貨幣鑄造を請け負ひ、或は重要な國際上の交渉を委任されたりした。學藝に於ては、この世紀の劈頭早くもダンテ、チオットーを出し、中頃にはペトラルカ、ボツカチオを出した。これらについては後に述べる積りである。かくして市が漸く繁榮に赴くと共に市民の生活も、衣服、飲食等に於て豊かに且つ華美となり、貴重なる金銀珠玉の裝飾、高價なる外國酒の飲用等虚飾贅澤の風が著しくなつた。吾々はここに、この時代のフロレンスの社會を知るのに興味ある一つの統計を有して居る。それは一三三八年の調査にかゝるものであつて、ヴィラーニの年代記中に載せられたものが即ちそれである。當時のフロレンスの富強を察すべく、以下之を箇條書にして見よう。

市、人口、合計九〇、〇〇〇人

- (1) Edward III. (4) Giotto. (7) Villani, chronicle of.  
(2) Bardi. (5) Petrarca.  
(3) Peruzzi. (6) Poccaccio.



内 二五、〇〇〇人(兵役に耐ゆる者即男  
子一五歳—七〇歳)  
一、五〇〇人(上流社會)  
一、五〇〇人(外國人)

但し宗教上の造營物に住む人口は算入せず

地方人口合計 八〇、〇〇〇人(兵役に耐  
え得る者)

聖ジョヴァンニにて洗禮を受ける者、合計毎年 五、五〇〇—六、〇〇〇人

讀書を學ぶ兒童 八、〇〇〇—一〇、〇〇〇人(内男兒は女兒より多し)

算術を教へる學校 六個所

その生徒 一、〇〇〇—一、二〇〇人

文法、修辭を教へる學校 四個所

その生徒 五五〇—六〇〇人

國の通常歳入 三〇〇、〇〇〇金フロリン

國の通常歳出 僅かに四〇、〇〇〇金フロリン

市の内外に於ける教會、及び宗教的建造物

合計一一〇個所

市内に於ける館及び宏壯なる邸宅の數は、市外六哩の半徑内に於けるそれらの二倍以上。

又た興味ある事は政治上の法皇派對皇帝派の争が社會の種々なる方面の流行にも影響した事である。法皇派が帽子の右方に飾の羽毛を附ければ皇帝派は左に附し、食卓に於て果物を切るに前者が一文字に切れば後者は十文字に切り、酒杯も一が滑かなるを喜べば、他は刻み目のある者を用ひる等した。遂にはこの風は口の開け方、道の歩き方、話や誓約の身振にまで及び、兩者の對抗を示して居た。これは更に建築にも影響した。例へば建築のバトルメントを見るに法皇派のものが一直線の頂で終つて居るに對して皇帝派のは燕尾式の頂を用ひると云ふが如き有様であつた。之を古館の建築に見よ、どの頂線もすべてゲルフ式に水平線に終つて居るのは如何

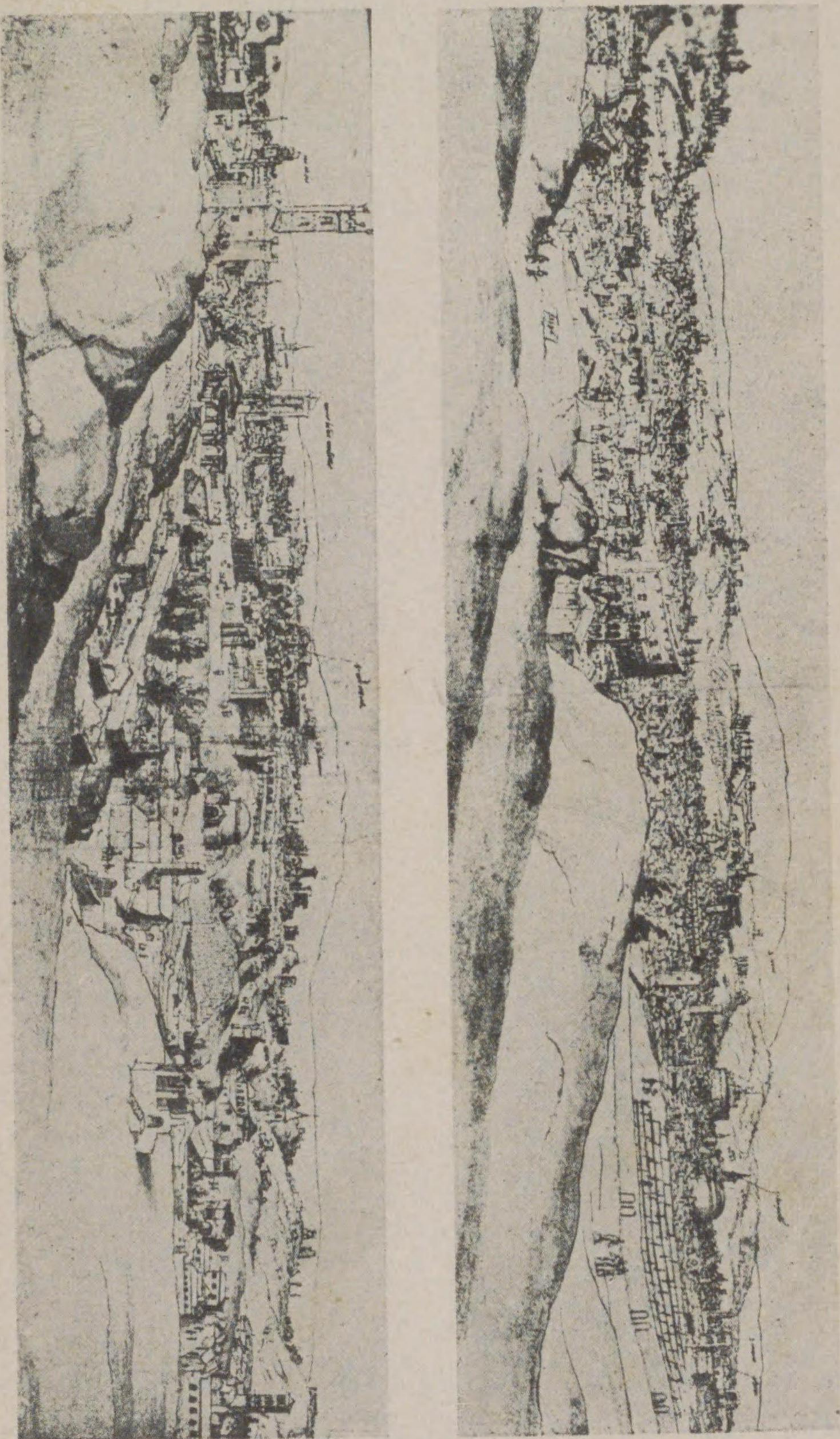


にもゲルフ市として尤もである、只だ一部の頂線が燕尾線であるのは當時例外にもギベリン派が政権を取つて居たからである。

第五節 <sup>アウレオ・ローマ</sup>黄金の羅馬、一三〇〇年の<sup>ジュベリ</sup>祝典、  
コラ・デイ・リエンチ

偕、前節で花咲くルネッサンスの搖籃地としてのフロレンスを見た吾々は、次いで、やがてルネッサンスの實を結ぶべき羅馬に眼を轉じ、同じ十四世紀に如何なる光景を呈して居たか、若しくはこれについて如何なる思想又は運動が行はれて居たかを一瞥しておかなければならぬ。

羅馬はすべての西洋の文化民族にとつて一種の大きな、強い、耐えがたき魅力であつた。昔は天下に平和を與へた儼めしいシーザやアウグストゥスの、今は神階制度を以て世界に君臨する法皇の在しますところである。殊に法統の太祖である聖ペテロの殉難の地として、羅馬は西洋基督教徒に



景全ローマの紀世六十



取りて最も尊き靈場であつた。それにはグテイカノ山やラテラノを始めとして、七つの大教堂があつて、これを巡禮するとて、諸國からの參詣者は絶える時なく、その案内記の如きものさへ出來て居た程であつた。

然るに十三世紀の中頃、三世紀間に跨る久しい神聖羅馬帝國の政治上元首との抗爭も、かの前代未聞の現代的専制君主であつて、教會の目からみればこの世に現はれた大いなる反キリストであるフリードリッヒ二世の死後は、いよゝゝその斷末魔に近づくや、時の法皇がドイツの皇帝權絶滅のために呼び入れたのが、即ち等しく外國人たるフランスの大名アンジュー侯であつた。その結果、法皇の目的は一時達せられたが、その後、半世紀ならずして羅馬はこのアンジュー家の本國たるフランス王國に勃興した強大な政治上君主權の爲めに眞向微塵に大打撃を受けなければならなかつた。傲慢な法皇ボニファチウス八世がフランス人及び反法皇黨の手から蒙つたアナーニの屈辱(一三〇三)はそれである。老法皇はやがて憤死した。その結

- (1) Charles, Duke of Anjou.
- (2) Bonifacius VIII.
- (3) Anagni.



果は知るべきであつた。フランス王は法皇の位を自分の國人の手で占めてフランス本國に留らしめ、やがて南佛<sup>(1)</sup>アヴィニョンに居らしめた。法皇の「バビロニア幽囚」の憂目とは即ちこれである。かくてこれより法皇は歴代フランスの王権の下に囚はれの身となり名にしおふ黄金<sup>(2)</sup>の羅馬も久しい間、現世に於ける讚仰の中心を失ふことになつてしまつた。こゝに於てイタリアの人々の間には痛切に現代羅馬の零落を悲しみ古羅馬の隆盛を偲ぶ心が頻りに起る様になつた。

之より先きボニファチウス八世は、その屈辱をうける三年前、一三〇〇年に此世をいはふ「祝典<sup>(3)</sup>」を華やかに擧げて居る。その盛大さは、一日三萬の人が羅馬に出入し、二十萬人が羅馬に客となつたことがあつて、その年内に訪れた巡禮者の總数が二百萬に上つたと報道されて居るのでも察せられる。而してこの祝典は文學史上二箇の重要な事項を惹き起す因縁となつて居る。即ち一はダンテがこの時を以てその「神曲」の序幕のシーンとして

(1) Avignon.  
(2) Aurea Roma.  
(3) Jubilee; Saeculum.

居り、他はヴィラーニがこの機會にその年代記編纂を思ひ附かせられたことである。抑もこの祝典參列國中にはフロレンスが最も重要な位置を占めて居た。かの十字軍の影響により既に早く富強に達して居たフロレンスは、この祝典にあたり、自國の代表者の出席は勿論であるが、その他に十三の諸外國から代理を託されて、それらの代表者をも出したと云ふ程に盛大な勢力を占めて居つた。法皇もこの盛大なるフロレンスの參列は祝典に缺くべからざるものと考へ、その市民を世界の四大につぐといふ意味で「第五の元素」に數へて之を稱へた。年代記の作者ジョヴァンニ・ヴィラーニは實にその參列者中の一人であつた。彼は偉大な、しかも零落した羅馬の古都に於けるこの世の祝典といふ悲壯な光景を眼のあたりに見、之を自分の國フロレンスの昇りゆく勢に思ひくらべて大いに感激し、今はテベロ河上の代りに、アルノ河上に第二の羅馬が再生するのだと信じ、因てフロレンスの出來事を記録しようと志ざし、歸郷後直ちに筆を取つたと云ふ。そ



の結果は即ち、彼が書き始め、その一族が書きついで有名なる年代記<sup>クロニック</sup>となつたのである。彼はその中に自分の志のある所を語つて居る。曰く「羅馬は沈衰した。しかし吾等が祖市はまさに隆々として興りつゝあり、以て大事業を行ふに足る。故に余はフロレンスの全き歴史を書き綴つて今日にまでに及ぼし、尙も將來余の體驗する限り之を繼續しようと思ふ」と。以て當時のフロレンス市民の力量とその自負とを想見すべきである。彼等の偲ぶ所は古羅馬の偉大にあり、自ら之に私淑せんと望んだのである。

ダンテがその「神曲」に於て故國フロレンスを稱へて、「羅馬の最も美しく最も名高き娘」と呼んで第二の羅馬と呼んで居ることは勿論である。而して彼の政治思想については「モナルキア論」があつて、この内に於てもまた彼の胸に燃ゆる古羅馬へのあつい憧憬がよく現はれて居る。抑もダンテが「モナルキア論」に於て、政治の理想として描いて居るのは羅馬帝國であつた。就中シーザルの世界的國家の復興にあつた。しかも彼のこの帝國を把

(1) La bellissima e famosissima figlia di Roma.

捉した見方は彼固有の加特力的、神學的見地に立つて居るものであつた。彼は先づアウグストゥスの天下<sup>モナルキア</sup>一統の御世が、その時に神の御子イエスキリストの生れたことによつて、正しいものであると、神によつて證明されて居るものなることを主張した。而してこの帝國を法皇及び教會と密接な關係に置き兩者の間の調和を期待し、結局は唯一最高なる神の政治が皇帝の統一政治の上に立つべきものなる事を認めて居る。それ故にダンテの理想とする所のモナルキアは淨化された姿に於ける中古帝國、即ち神聖羅馬帝國であつた。この帝國はダンテの時名のみ存して實は亡んで居る。それで或る歴史家はダンテのモナルキア論は帝國の墓表<sup>エピタフ</sup>であると評して居る。しかし詩人その人の心ではモナルキアは彼の理想であつて、遠くとも未來に對する望であつたのである。彼は之に世界の永久平和をかけて居た。何はともあれ、所詮、このダンテの理想を導く主義は、加特力的帝國主義とでも云ふべきであつたのである。然るに彼の次の世代に出たペトラル



カはその思を純粹なる羅馬の共和政治に寄せて居た。彼は若い時外國を飄泊したが、中年になつて始めて羅馬の廢墟を見て感激し(一三三七年)、益々、古典文學の復興を志し、後、名聲遠近に聞えるに及び、パリ大學と羅馬の元老院とから同時に月桂冠を贈られんとした時、彼の愛國の至情の向ふ所バリのを謝し羅馬のを受諾し、自らカピトルの廢墟に登り、こゝで羅馬市民からの冠を受けたのであつた(一三四一)。かくてペトラルカは羅馬市民が護民<sup>トリブニス</sup>職の統率の下に全世界の主人公となるべき榮光の日に返るべきを夢見つゝあつたのである。かのダンテの想ふ所は一個の加特力神學者の抱いて居る羅馬崇拜の理想であり、このペトラルカのそれは古典文學者の空想、即ちより一層浪漫的なるものであつた。而してこのペトラルカの空想が當時羅馬市民の間から現はれ出た一浪漫的政治運動家を激勵したのは、有名な事である。コラ・デイ・リエンチ即ちこれである。

彼はその生れは微賤な市民であつたが、若くして一種の學才を抱き、夙

に古典を讀み、早くより古羅馬への憧憬を有して居た。かのペトラルカ加冠の翌年アヴィニヨンの法皇クレメント六世の即位に當り、羅馬市民は使節を送つて、法皇の歸都を請ひ且つ祝典を從來の百年毎から五十年毎に改められん事を願ひ、更に翌年又この願を重ねたが、この第二回遣使に於ける委員長とも云ふべき役目を勤めたのは、實にコラ・デイ・リエンチであつた。時に歳甫めて三十、法皇にその雄辯を認められて羅馬に於ける法皇の祕書<sup>タ</sup>役となつたのである。ペトラルカと相知つたのも亦この機會であつたらしく爾來兩者は肝膽相照して消息を通じ合つた。その後コラは常に雄辯を以て市民に訴へて自覺を促がし、或時はその古典の知識を以て古き金石文を解釋し、或時は寓意的繪畫を描かしめ之を然るべき場所に立て、公衆の展覽に供しなどして、ひたすら市民の古羅馬への憧憬を唆り立てるに努めた。それ等の中で有名なのは彼がラテラノで發見した「レギア法」の青銅表を羅馬人に縦覽せしめた事件である。この青銅表は羅馬元老院がヴェスパシア

(1) Tribuni plebis. (Tribune)  
(2) Cola di Rienzi. (1313 or 14-15)

(1) Clement VI.  
(2) Laterans.  
(3) Lex Regia.  
(4) Vespasianus.



ヌス皇帝に皇帝權を委任した決議文を刻みつけられ居たその殘片であつた。勿論、この決議は實は元老院が實權を掌握して居てからの決議でなく、内亂の鎮定者にして征服者たる將軍ヴェスパシアヌスに對して全く無力であつて、他に致し方がなかつたからの決議であつた。コラの捉へたのはこの内實ではなく、決議に現はれた文章の表現にあつた。コラはこれをラテラノの壁中に嵌め込み、その周圍に元老院が皇帝權をヴェスパシアヌスに授けて居る繪を陳列して貴族及び人民を招きて看せしめた。この時彼は古羅馬の制服に則りてみづから白帽に長衣を着けて演壇に登り熱辯をふるつた。曰く「かくの如く昔は自ら皇帝を作り、次には法皇を出した古羅馬は實に偉大であつた。皇帝と法皇とは羅馬の兩眼である。然るに今や兩者共にここに居ない。汝等、盲目なる市民よ、汝等が血を流して争つて居るのは唯私闘のためのみではないか。今や祝典も近づいた。而してこの地に巡禮してくる信徒の見出すものはたゞ荒廢と衰微、壓制と害惡の外に何者があらう」と。この「レギア法」展觀の事件は大成功で彼は巧みに民心を握る事ができた。當時南方のナポリ王國は内争の爲めその力北方に及び難く、ドイツではバヴァリアのルードウイツヒとルクサンプブルグ・ボヘミアのカールトとの對立の爲め、ドイツの勢はイタリアにとゞかず、國際關係上半島は全く自由であつた。これはリエンチにとつて最も好機會である。時は一三四七年五月豪族コロナが事あつて部兵を率ゐてカンパニアに出て居るその不在に乗じて事をあげ、法皇の代理を擁してカピトールに進み市民に向つて熱辯を振ひ大喝采を博し美事にクーデターに成功し、やがてグラックス兄弟の先例により護民職となり、法皇の名に於て民主政治を布いた。この時彼のとつた職名は「至仁至慈なる我が主イエスキリストの命による、自由・平和・公正の保權者にして神聖羅馬共和國の救ひ主なる、嚴武寛仁なるニコラス」といつた、以てコラの抱負と目的とを察すべきである。ニコラスはコラのラテン名である。(Anchore clementissimo D. N. J. Christo Nicolans,

(1) Imperium.  
(2) Toga.

う」と。この「レギア法」展觀の事件は大成功で彼は巧みに民心を握る事ができた。當時南方のナポリ王國は内争の爲めその力北方に及び難く、ドイツではバヴァリアのルードウイツヒとルクサンプブルグ・ボヘミアのカールトとの對立の爲め、ドイツの勢はイタリアにとゞかず、國際關係上半島は全く自由であつた。これはリエンチにとつて最も好機會である。時は一三四七年五月豪族コロナが事あつて部兵を率ゐてカンパニアに出て居るその不在に乗じて事をあげ、法皇の代理を擁してカピトールに進み市民に向つて熱辯を振ひ大喝采を博し美事にクーデターに成功し、やがてグラックス兄弟の先例により護民職となり、法皇の名に於て民主政治を布いた。この時彼のとつた職名は「至仁至慈なる我が主イエスキリストの命による、自由・平和・公正の保權者にして神聖羅馬共和國の救ひ主なる、嚴武寛仁なるニコラス」といつた、以てコラの抱負と目的とを察すべきである。ニコラスはコラのラテン名である。(Anchore clementissimo D. N. J. Christo Nicolans,

(1) Ludwig of Bavaria.  
(2) Karl of Luxemburg-Böhmen.  
(3) Colonna.  
(4) Gracchus.  
(5) Tribune.



*Severus et Clemens, Libertatis, Pacis, Justitiaeque Tribunus, et Sacrae Romanae Reipublicae Liberator.*")

この企は最初非常な成功であつた。その内的理由を考へれば、これは羅馬市民及びイタリア、西方歐羅巴に於けるキリスト教徒が當時なほ古羅馬に對して抱いて居た精神的道徳的感情によるものであると言ふ事ができる。リエンチのクーデターの報が一度アヴィニヨンの法皇廷に達するや、舉朝半ば喜び半ば憂へた。しかも獨りペトラルカのみは歡喜禁する能はず、長い書簡を與へて護民職リエンチの事業を賞讃激勵し、リエンチも亦この名聲高き羅馬月桂詩人の詞を得て大いに感奮したのであつた。ついでリエンチはラテラノ宮殿で、かのコンスタンチヌス大帝が洗禮を受けたと云ふ泉堂に於て、自らキリスト教騎士となるの嚴肅なる式をあげ、同時に全イタリア人に羅馬市民權を與へ、又全世界の宗俗一切の職務、爵位を有する者は總て護民職の法廷に來つて當該の職務又は爵位の審査を受けて後之を賜

(1) Constantinus.

はるべきものであると布告した。中にも、かのダニエーブ河畔で帝位を争つて居たカール及びブルードウィツヒをも召喚した事は大いに天下の耳目を敬だゝしめた。彼は更に伊太利全國民の同胞式を行ひ、同年八月十五日マリア昇天祭日には自らの戴冠式を舉行した。冠は傳説によつて六重から成り、六人の高僧によつて順次に加冠せられた。この式の時こそ、まさしくリエンチの得意の最頂點であつたであらう。かくして彼の計畫はその初期に於ては順調に成功して行つた。然し彼は革命を收拾して共和國を確立すべき實際的技倆と實力とに缺けて理想のみ徒らに高かつた。それ故、惜むべし、最初の成功を持続する能はず、貴族及び人民の反對を蒙り、傲慢な護民職の僅か七ヶ月目、年の暮には羅馬を没落するの止むなきに至つた。羅馬は舊に依てコロナ等の豪族たちの黨同伐異の紛亂の巷に歸し、市民の願ひの一つであつた祝典のみは形ばかり五十年に擧げられたけれども、他の一つ而も重要なものである法皇の御歸都は許されなかつた。而して



コラは數年飄零流謫の後、再び故都に還つて回天の事業を試みたけれども早くもまた失敗し、遂には非業の最後をとげる事となつた。

之を要するに、コラ・デイ・リエンチが個人として精神上果して尋常であつたか否やは別として、彼の公人としての出現は、即ち時代の潮流の發現である。換言せばダンテ等殊にペトラルカの代表する古羅馬への憧憬がこゝに政治上に發して即ちリエンチとなつたのである。彼は中古イタリアに於ける古羅馬の理想に反する事物を破壊改革せんとする者であり、この點に於て彼はイタリア最初の愛國者といひ得られる。詩人ペトラルカの羅馬共和國に對する憧憬は實際界ではリエンチ以外に何等永續的な効果を齎らすことなくやんだが、しかもこのペトラルカ及びリエンチの思想の流は尙ほ斷續して存在し時々發して居るのを見る。十五世紀の中葉、法皇ニコラス五世が<sup>(1)</sup>人生派的專制主義を行つて居た時、羅馬に出現した<sup>(2)</sup>ステファノ・ポルチャリの如き即ちこれである。

(1) Nicholas V.  
(2) Stephano Porcari.

### 第六節 ラテン文學の復活、國民文學の擡頭

ラテン文學の復興は既に千三百年代以前から起りつゝあつた。その初は羅馬法の斷簡零墨が發見されて、その註釋が試みられた事にある。即ちボローニア大學に於て最も早く羅馬法の研究が起り、新進の學徒多く之に従事した。ダンテ、ペトラルカも亦これを習つた人々である。かくて法律の研究を始めた人々は更に進んで他のラテンの學問即ち詩歌文學に向ふ様になつた。その上既に十三世紀の初にはかの<sup>(1)</sup>アッシシの聖フランチェスコが出でイタリア人民の導者たる姿を以て慈悲を説き感情を柔らげ自然の美を高唱した。かくの如くしてやがて今はダンテがフロレンスに現はれ、ついで同じ市からペトラルカ、ボツカチオの三大詩人が相並びて生れる事となり、こゝにフロレンスはラテン文學復興の搖籃の地となるに至つた。これ即ち中古の人心を支配して來た羅馬加特力教會の考へ方たるスコラチズム

(1) St. Francesco of Assisi.



ムから脱し、より人生<sup>ヒューマニズム</sup>的なるものを求める心、即ち人生主義<sup>ヒューマニズム</sup>に向はんとする進歩の最初の歷程であつた。即ち従来は人生の唯だ一部分のみが生活されて居たのであつたが、今後はその未だ発見せられざるものを発見して人生を、その全部に於て解放して之を生活されるべきであつた。この人生をより完全に高めようとする運動はブルックハルトの言を借れば實に『人間及び世界の発見』となるべきであつた。

ダンテに就いては、それが餘りに有名であり且つは固有のルネッサンス人でないが故に私は多くを語るを欲しない。しかし尙ほ簡単な評語を省く事は出来ない。ダンテは何故に偉大であるか。吾々は答へる、それは彼が彼の優しき感情と至純なる愛とを披瀝したものととして「新<sup>ヌーヴォ</sup>生<sup>ヴィタ</sup>」を、彼の宗教的世界史觀を詠つたものとして「神曲<sup>ディヴィナ・コメディア</sup>」を、彼の政治上の理想を示したものととして「デ・モナルキア論<sup>デ・モノルキア・ディ・ラ・レガ</sup>」を、われわれに書き遺してくれた故であると。彼は本質的に現代人であるのではない、尙ほ半ば中古人であつてかのスコ

- (1) Humaniora.  
(2) Vita Nuova.  
(3) Divina Comedia.

- (4) de Monarchia.

ラチシズムの考へ方を保持して居た。しかもその一方、彼はその著作の示す如く、文化の未だ充分進歩しなかつた十三世紀末、十四世紀始に於て、夙に新らしき感情を抱き、廣い世界的見地に立ち、世界的視察を下して居るのである。彼は従來の思想家の如くたゞ聖書や教會やが重んずる人々のみを思索の対象とせず、古典古代に於ける異教の學徒や、教會に楯ついた異端の人々やをも考察した。しかのみならず更に進んではサラセン人の思想家をも拉して來てゐる。彼はこれ等の人々に對して「神曲」の中でいはゞ裁判を下してそれら相當の位置を與へてゐる。例へば黄泉<sup>インフェルノ</sup>への下り口には古典古代の詩人、哲學者、學者、政治學者が居らしめられる、ホメロス、ホラーチウス、オヴィド、シーザル、プラトーン、デモクリタス、ディオゲネス、ヘラクリトス、エンペドクレス、アナクサゴラス、ターレス、ゼーノ、シセロ、セネカ、ユークリッド等である。尙ほそこにサラセンの哲學者アヴィセナもアヴェルロイズも居る。アレクザンデル大王やビルルスや



は暴力を振ひたる者として貶されて黄泉の第七圏におかれてある。シーザルの暗殺者ブルトウスとカッシウスとはイエズスの裏切者であるユーダスと三人一緒にこの常闇の世界のどん底である第九圏に落ちて苦んで居る。之に反して共和國の道德のために殉じたカートーは浄めブルガトリオの山への上り口におかれてある。して見れば、「神曲」の詩人の見地が従來の考へ方よりも遙かに世界的に廣く見わたしたるものであつて、既に半ば、人生主義ヒューマンイズムの眼界に入つて居る事を語るものである。ダンテが或はルネッサンスの先登第一をなすと稱せられる所以は一はこゝに在るのである。殊にその「モナルキア論」を除いては、「新生」も「神曲」も共にトスカナ人民の言葉を以て書かれ、その中の思想、感情、描寫と相まつてイタリア國語の詩歌の模範となり、たゞにイタリア文學の始であるばかりでなく、否、實に歐洲近代の國民文學の魁をもなした事は最も現代的本質を具備する所以であつた。亦た以て偉とすべきである。ダンテ以後のルネッサンス時代のイタリアの詩人、美

(1) Toscana.

術家等はその題材の思付をダンテの著作殊に神曲の詩中に求めない者はない、尙ほその内に求めて得られない題材はないほどに含蓄暗示に富んで居る。さればこの詩は當時の人生派人士に取りては、恰も基督教徒に取りての聖書の如く、最も尊ぶべき寶典となつた。一三二一年、追放の詩人ダンテがラヴェンナにて客死したとの報到るや、かの彼の故郷の年代記者ヴィラーニは誌して曰く、「ラヴェンナのポレンタ朝廷に於てフロレンス人、ダンテは年五十六歳を以て死し、非常なる名譽をもつて葬むられた。彼は曾て白黨員ビヤンキとして何等罪なきに追放された人である。ボローニア、パリ、その他の地に遊學した。俗人ではあるが學問に達した。詩人として思想家として又文筆家として名を知られた。彼は、彼以前の何人よりも美はしい創作を人民語で著はした。愛の書「新生」はその一つである。又數多い歌、書簡を氣高い文體と強い文章とで書いて居る。その「神曲」に於ては百の歌を以て、黄泉、淨山、天堂とを何人も及び得ざる氣高きで描き、その中には

(1) Ravenna.  
(2) Polenta.



道徳、博物、星占、哲學、神學に就いての最も大きな最も繊細な問題が提供されて居る。彼はまた「モナルキア」を非常に結構なラテン文で書き法皇と皇帝との職務に就いて論じた。彼はまた彼の歌の十四(饗宴)に就いての一の註釋を始め、また人民語に關する著作をも起したが共に未完である。このダンテは知識充滿し、非常に剛慢な閑居に隠れたが、しかしその高尚な諸徳の爲に、この人につき吾々の年代記中にその永遠なる紀念を建て、置く事が當然な事と思はれる。何故ならば彼が書いたものは即ちこの市の榮光と名譽とになるに違ひないからである。』と。以てダンテが既に當時に於ても非常に重んぜられた事を知り得るのである。

フランチェスコ・ペトラルカの父はダンテと共にフロレンスを追はれた白黨員の一人で、法皇がアヴィニョンに移されるや、従つて此處に住む事となつた。それ故フランチェスコは幼時からこのプロヴァンスの町、法皇の新らしき都に育ち、南佛及び北伊の各地において教育を受けた。長じては

(1) Francesco Petrarca. (1304—1375)  
(2) Province.

廣く諸國を旅行し、その足跡は南はナポリ、北はケルン、パリに及んで居る。彼は常に自然と人生とを靜觀するのを樂しみとした。アルデンヌの森の旅行、ヴァントウの山への登攀等は各彼の詩心を喜ばせ且つ豊かにしたものであつた。彼が始めて羅馬を訪れたのは既述の如く一三三七年の事である。この時彼はコロナ家の故老ステファノによつてこの故都の遺跡を限なく案内され、古羅馬への思慕憧憬は愈々高まつたのであつた。彼がその生涯を通じて最も長く住んだのはアヴィニョン、ミラノ、パドヴァの三市で、之を地方別にすれば、南佛北伊である。就中アヴィニョンに居つた時には彼は法皇の宮廷に出仕し、權勢あるコロナ家と親しみ、才學を以て自然に交際社會では相當重きを成して居た。しかし平素はかくの如き社交界の煩をさけて、附近のソルグ河上流の山紫水明なる「閉ざれたる谿」に入つてそこの庵に閑居し、獨り靜思に耽けるを常とした。彼の靜思の目的は魂の教養にある。彼は自らの住む現代の觀照、即ちスコラチズムをその

(1) Köln.  
(2) Ardenne.  
(3) Ventoux.  
(4) Colonna, Ste. hano.  
(5) Sorgue.  
(6) Vaucluse.



全部に於て排斥し、その代りに古代文化をその全部に於て把握する事によつてこの魂の教養を達成せんとしたのである。(この場合の古代文化とは即ち羅馬古典であつた。)されば彼はこの目的を以て自ら進んで「閉ざられたる」に隠れ住み、身を静寂の境に置いたのである。しかしその一方に於て彼はやさしい勝れた詩歌を歌つて自らの感情を述べて居る。それ等抒情的な詩歌の中心はローラ・デ・ノーヴェスなる一人の婦人であつた。ペトラルカの一生涯の感情はこの愛人への愛によつて貫かれて居り、而もこの現世の愛から永遠への愛へ到達せうと努力苦心した。彼がとかく隠棲と旅行とに傾いたのはこの悶えのためであつたと思はれる。彼はこのローラに關する抒情詩の外に純粹な古典的ラテン語でアフリカと題する史詩、及びその他論文或は書簡によつて早く一世に認められて居た。それ故に既述の如く榮譽ある月桂冠が羅馬元老院の手によつてカピトールの墟に於て彼の頭に加へられたのである(一三四年の復活祭日曜)。史詩アフリカはかのスキピオ・

(1) Laura de Noves (1343).

アフリカヌスのカルタゴ征伐を題目とし、ヴァーギルのエネアードと同様のものたらん事を期した。彼はこれによつて、曾てダンテが『神曲』によつてイタリア國民に優れた國民的文學を與へた如く、彼等に一大古典的史詩を與へんと欲したのである。是等の事を見てもペトラルカの熱心なる羅馬憧憬の念がうかゞはれ、又コラ・デイ・リエンチの羅馬共和國復興運動を激勵した彼の心も測り知られるのである。しかし彼の感情はこの「護民職」その人の如くに粗笨奔放なものではなく、極めて繊細複雑なものであつた。これと同時に又頗る多様でありその中に矛盾を藏して居たのも争へない事實である。彼は心の奥深く現世に對する厭世觀を抱き、それを忘れそれから逃れそれを慰めんが爲に思索と知識、殊に古代文化の探究に沈潛した。彼は宛ら古代人との對話を唯一の楽しみとした。後に、前述の如く、羅馬の遺跡を目のあたり見るに及んで、生きながら古代羅馬に住みて當時の古人と語り得ざるを悲しみ、益、心を古代の典籍に馳せ、その探訪、蒐集、瞻



寫に熱心に従事する様になつた。彼が瞑想を愛しつゝ、しかも時には敢てアヴィニヨンの交際社會へ出て周旋したのも之がためである。即ち當時のアヴィニヨンは世界の都とも云ふべく、諸國の人此處に來り、隨つて彼が典籍を得んとするには極めて好都合であつたからである。加之彼の性來の美點たる厚き友情は多くの人の心を惹き、彼の交際範圍を廣くし、愈々彼に便宜を與へた。彼が旅行する時、常に遠近の修道院に立寄つたのも目的は矢張り古典の採訪、蒐集にあつたのである。或時北方に行きリエージュでシセロの演説の未だ世に知られない書二部を發見し、大いに喜び苦心の結果その一はこれを自ら寫し、他は止むなく友人に頼んで寫し辛うじて手に入れたと云ふ事さへあつた。そして是等の古典に對する彼の讀書は熱心にして着實、しかも全く根本的なものであつた。或は註釋を施し或は圖畫を畫き、興に乗すれば寢食を忘れる事も珍らしくなかつた。或る友人が彼の健康を案じ筆墨を取りあげて十日間休養せしめた事があつた。がペトラ

(1) Liège (Lüttich)

ルカはその二日目に頭痛を訴へ、發熱の兆さへ見えた。友人は驚いて再び筆墨を與へた所が始めて気分はもとの如くに恢復したと云ふ話さへ傳はつて居る。それ故に彼の交友中最も親密なるは即ち書籍であつた。彼に一人の老僕あり『閉ワされたるク箱ル』の文庫を守つて居た、教育も乏しい男であつたがペトラルカの感化を受け、よくその意を體し書物を尊ぶ事、生ける者を扱ふ様で、主人の不在中もその文庫を神殿の如く守り、書籍を送り來られると之に對し、恰も主人の親友に對する如く、その著者名を呼んで歡迎し、大切に胸に抱いて庫に藏めると云ふ有様であつた。さればこの老僕の死んだ時、ペトラルカは心から悲しみ嘆いたと云はれる。「書籍を牢獄に繋ぐべからず、常に之と對話を爲すべきなり。」とは彼の言葉である。彼は古典を愛し従つてラテン語を尙んだ故、ダンテが人民語で「神曲」を書いたのを卑しみ、又自作の詩歌の中、若い時に人民語で書かれたものが民間に流行するのを悲しんだ。即ち彼は讀書を民衆に期したのでなく少數の知識者



に期したのである。彼のラテン研究は獨り古典のみに止まらずチャイラアサー教父たちにも及び、就中聖アウグスチヌスの懺悔録の如き彼の常に愛讀したものであつた。かくて彼は純正に宗教的ではあつたが決して現世の教會的ではなかつた。現にアヴィニヨンの宮廷生活の腐敗を痛嘆して之を地獄とさへ呼んで居た。

之を要するに、ペトラルカはダンテよりも、より純粹にヒューマニスト人生學派に屬し、より専らラテンレヴァイヴァル復興に貢獻した人である。更にペトラルカに就いては、尙ほそのルネッサンス的な傾向を加へる特徴がある。それは彼が自分の名の榮譽ダローリアに燃えて居たと云ふ事である。このペトラルカの心は中古人にも現代人にも了解し難い心理状態である。即ち自己の思想、感情、行爲を現代は勿論、未來かけて永遠に傳へて自分の名聲をいつまでも輝かさうとする極めて強烈な願望である。この榮光はペトラルカには宛ら一箇の輝かしい女神の姿を以て現はれた。それ故彼は自己の制作に苦心慘愴し夜も眠らずに

考へる事あり、思想浮べば則ちその夜を徹して書きあげると云ふ風であつた。作品が出来上つてからも幾度か推敲を重ね、しかも遂に意に満たねば之を破棄する事も少なくなかつた。かの「アフリカ」の創作に就いてもその事あり、又短(1) ソンネ詩或は小(2) カンツォーネ歌の中には焼き捨てられたものは數知れぬ程多かつたと傳へられる。而してかゝる榮光の心は實にルネッサンスに於ける人たちに共通なる一特徴を成すものであつて、ペトラルカがその有名なる先例を立てたわけである。

フロレンスは既にダンテを産み、又ペトラルカを出した。しかも今や此處にデョヴァンニ・ボツカチオを産むに至つて更に前二者とは異なつた一箇の天才を提供する事となつた。この人の父はフロレンス附近(3) チェルタルド出身のフロレンス商人であつてパリに於て若いフランス婦人との間に儲けたのがデョヴァンニであつた。母は産後間もなく歿したので、父はデョヴァンニを連れてフロレンスに歸つた。デョヴァンニ稍長するに及んで、父

(1) Sonnette. (4) Certaldo  
(2) Canzoniere.  
(3) Giovanni Boccaccio (1313—1375)



は之を商人に仕立てるべく當時イタリアの世界的文化の中心地であつたナポリに遣はした(一三二七年)。この市及びその附近の美しい風景と、そこに盛であつた世界人的な生活とは巴里女の血を受けた若いデョヴァンニを唆つて一層感情的にならしめた。由來ナポリはフランスの寓話詩が喜ばれ、プロヴァンスの吟遊詩人が持て囃され、東方の物語やアラビアの小説が讀まれ異教的な空氣の豊かな土地柄であつた。ヴァーヅルが崇拜され希臘の植民地の憶ひ出があり、希臘語が話されて居る。又富有なナポリの市民は古代の大理石の柱や像を羅馬の遺跡遺物のうちから購ひ歸つて町を飾る風があつた。かゝる環境にあつて若い感情的な青年が影響を受けない筈はない。デョヴァンニはこの町で商人の業を習ふ代りに詩人や文學者と足繁く往來し、後には國王ロバートの庶子マリア・ダキノーと云ふ貴婦人と戀に落ちる様になつた。彼が歌に詩に物語に、<sup>(1)</sup>フキアマッタとして對象にして居るのは即ちその婦人である。このフキアマッタは恰もダンテのベアトリチエ、ペトラルカのローラに於けると同様にボッカチオの理想の愛となつたのである。かゝる有様であつたから、彼の父は四年目に彼を呼び返して眞面目な定業生活に這らせた。その後かの一三四八年のベスト大流行の時には再びナポリに行つて居て、フロレンスに在らず、流行後再び故郷に歸つて書記組合の一員となり、その鋭敏と才幹と辯舌と、巧みな交際振とを認められて、市の政治、外交に參與するに至つた。而してこゝにいふ外交とは即ち諸國への使節となつたことであつて、彼にとつては同時に人生主義研究旅行であつたのである。ペトラルカと相知り師友の親しき交を結ぶに至つたのもこの外國出張の時の事である。老熟せるペトラルカはボツカチオの年甲斐もなき虚飾と世間氣とを戒め、又時にはその反動として反對の方向に極端に馳せんとするのを諫め止めもした。晩年に及んでからはボツカチオは父の残したチェルタルドのさゝやかな屋敷に歸り質素に靜かにその日を暮した。そのころ彼は讀書にいそしむだ。それでフロレンス

(1) Fablian.  
 (2) King Robert.  
 (3) Maria d'Aquino.

(4) Fiametta.

理想の愛と

(1) Notario.



市から頼まれて聖ステファノ院で「神曲」の講義をしたのは、その死に先立つ一年前の事であつた。彼は一三七五年十二月、その邸に於て六十二歳を以て歿した。

彼は中年以後になつて、青年時代の傾向から轉じて、眞面目なる學問に向ひ、その結果、一三六四年にはダンテの評傳を書き、晩年には上述の如きダンテの註釋をも行ふやうになつた。しかし彼を世界的に有名にしたのは言ふまでもなくかの十日物語(デカメロン)であつて、これは彼の中年、即ち一三四年のベスト流行の年から一三五年頃までの間に於ける作であると思はれる。その材料の源泉は、既に彼のナポリ滞在に於ける接觸から察せられる如く、古今東西に亘り、古印度、ペルシア、希臘、羅馬、中古のイタリア、フランス等に於ける物語、逸話、或はフロレンスや旅行先での見聞等が主なるものであつた。随つてこの物語の舞臺は、當時十字軍後の擴大した世界に相應する廣さに亘つて居る。人物から言へば、皇帝に國王、僧正に樞

(1) St. Stephano.  
(2) Decameron.

機官(チナル)、スルタンに東方美人、專制主(ダスポット)に市の役人、城主に富豪、農民に居酒屋の主人、毛織商に水汲男、畫家に左官屋、風流な優男に男を賣る伊達男、醫者に法律家、學生に寫字生、修道院の僧に尼、健氣な田舎女に強慾な遊女、質朴な百姓の女房に見榮坊な貴婦人、憂鬱な信心女に大道の果物賣の女、如何はしい桂庵婆に下女と言ふ様に十四世紀に於ける一切の社會階級の生活を描き出して居る。最も屢、現はれるのは輕佻浮薄な戀の男女を始とし、嘘吐き、詐欺師、墮落した僧尼等で、その他苟くも風俗上いかゞはしきもの可笑しきものに於てはあらゆる型が描き出されて居るのである。之をダンテに比すれば、「神曲」は過去及び現在に於ける様々の人生を永遠なる未來にかけて觀察し、或る者は黄泉の底に置き、或る他の者は淨めの山へ攀ちらしめ、更に、或る者は天堂の世界に昇らしめ、一切世界の人生を最後の裁判でさばくものである。その人物の生きた時代は單なる現世ではなく遠い過去に屬するものであり、又たその人物の活動した舞臺は現在感じ



得るこの世、即ちイタリアとかフランスとかではなく、廣く人生のある限りの世界に廣がつて居る。しかるに一方ボツカチオはその十日物語デカメロンに於て、肉の眼で視、肉の耳で聽きうる肉感的人物をして華やかに浮き々と活躍せしめて、讀む人の心を喜ばせ、魂を奪はずんば止まない。この物語には、ダンテの神祕的な雄渾、悲痛さは勿論、見られず、ペトラルカの哲學的な靜思默想もない。全篇殆んど生活の享樂、快活、洒落、機智、滑稽に充ち満ちて居る。されば近時の文學史家が、ダンテの「神曲」に對照して、この十日物語を「人曲ヒューマン・コメディ」と名づけたのも當然である。或る研究家がその百話を種類別にして居るは面白い。これによると三分の一は醜き罪惡、口にすべからざる猥褻、次の三分の一は輕佻なる情事、それから六分の一は稍眞面目なる、稍高尚なる傾向のもの、最後の六分の一は散漫なる饒舌、無邪氣なるものである。これによつても明らかな如く、この物語は道德上から云へば頗る不愉快なものである。しかし風俗史上、文學史上から言へば極め

て重要なものなのである。そしてイタリア文學に於てダンテがまづその鼻祖となり、詩歌に於てはペトラルカが多大の貢獻をした如く、ボツカチオは當にイタリア散文の祖となるべきであつた。随つてその諸外國に及ぼした影響の廣大さは決して神曲に劣るものではない。

ボツカチオはその生存中、日常生活を描いた作品、或は人民語で書かれた著作は純粹な文學者の名聲を博し得じと云ふ者から、その學問上の著作は凡てラテン語を以て書き綴つた。しかし彼はこのラテン文學に於ては到底ペトラルカに及ぶ事はできなかつた。たゞそれ等のラテン文學から、あらゆる知識を集めて之を材料として、そのイタリア語の散文に利用したのは彼の偉大な所であつた。

この機會に私は當時の社會に於ける婦人の地位に就いて一言を費さうと思ふ。抑もイタリアの都市は近代西洋に於て婦人が社交界に出で、男子に伍して活動した最初の場所である。既に十三世紀に於て婦人は社交界の一



勢力であつた。これには聖フランシスカン教團の力が與つて居り、當時早くも學問あり創作をする婦人を見るのである。ペトラルカがポーニアで勉學して居た頃、即ち十四世紀の上三分の一期に、その地の法律學の教授ヂョヴァンニ・ダンドレアと言ふ人にノヴェラと呼ぶ美しい娘があり、よく父の専門學に通じ、時として父に代つて講義をした事も珍らしくなかつたと言ふ。又この世紀の半ばすぎにシエナの聖カタリナ(一三四七—八〇)と呼ぶ婦人はかの疫病の翌年に生れ、年十五で道に入り清らかな宗教生活を送り、一三七四年の二回目のペスト流行の時にはフロレンスにて、身を以て慈悲博愛を行つて有名である。又法皇のアヴィニヨンから羅馬への還幸にも盡力した。この還幸は彼女の生存中に實現した。そして彼女は年尚ほ若い内に永眠した。彼女は此の故を以て一しほ人民の崇敬を一身に集め、死後聖に列せられた。しかし彼女の精神的勢力を高めたものは彼女の物した著作にもある。即ち「(5) デラ・デイウイナ・プロウイデツア神の攝理に就いて」(一三七八年)と言ふ對話の著あり、

(1) St. Franciscan Order.  
(2) Giovanni d'Andrea.  
(3) Novella d'Andrea.

(4) St. Catharina of Siena.  
(5) "Della. Divina Provienza."

又約四百餘りの書簡があつて法皇、樞機官、カーデナル親戚、人民等に與へられて居る。是等は凡てイタリア語で書かれ、一面ではイタリア人民の言はんと欲した感情を披瀝し、他面ではその文學に貢獻し、ヒユリマニズム人生主義に淺からぬ感化を及ぼした。かゝる例に見れば當時の社會に於ける婦人の地位は略推し得られるであらう。當時聖母マリアの崇拜の盛であつた事も婦人の地位の高まりつゝあるを物語るものである。かの十日物語を語る十人の主人公中、七人までは實に婦人なのである。



### 第三章 ルネッサンス中期(カトローチエント)千四百年代

#### 第七節 (イカトローチエント)千四百年代の到来、希臘古典の復興

千三百年代(トレチエント)に於て復興したものは概してラテンの古典であり、希臘古典は概ねラテンの眼を通じて眺められたに過ぎず、世人は希臘古典は本質上ラテンのそれから區別されるべきであると言ふ事を知らなかつた。勿論希臘古典の本文を読む事が學問の徹底の爲に必要な事は、早く十三世紀の新知識たる英國の學僧(2)ロージャー・ベーコン(1)不可思議博士の認知唱道する所であつたが、ペトラルカやボツカチオ等も晩年に於てその必要を認め、ボツカチオの如きは一人の南イタリアの住人である希臘人を招き希臘語を習ひ始めた程であつた。しかし眞の希臘語及び希臘文學の復興はそれから以後の事である。

(1) Quattrocento.  
(2) Roger Bacon, Dr Mirabili



然らばその希臘古典の復興は如何にして始まつたか？ それは、世界の變動が、これを誘つたのである。言葉を換へていへば、かの十字軍の衰退と共にフランク武士の支配から脱して復活したビザンツ帝國及びその君臨者たるパレオロギー家が、今や小アジアを根據として、十字軍とは反對に東方から押寄せて來たオスマンリトルコ侵略の波を防ぎきれず、剩へヨーロッパ側まで洗ひざらされたから、已むを得ず十字軍の本國たるフランス人(即ち西ヨーロッパ人のことである)に頼り、これと交通同盟し、以て如上の窮境から脱れんとするに至り、その結果ビザンツ人の西方接近を促進したからである。

最初の運動はまづヴェネチア人の媒介に依つて西方の助を得んとした。それは當時この市が他のいづれの西方都市よりも多く東方貿易の衝に當つて居たからである。それで皇帝ヨハン五世は自ら西方に到り、ウルバン五世に援助を求めた。この時皇帝は、長い間、ヴェネチアに滞留し、宛らこ

(1) Palaeologi.  
(2) Osmanli Turk.  
(3) Johann V.

(4) Urban V.

の東方貿易市の資本家の人質となつたかの觀があつた。しかし實質上の援助はこの帝の在世中には得られなかつた。その子マヌエル二世の代となり、亦熱心に西方に援を求め、就中、ルクサンブルグ・ボヘミアのシギスムンドの義侠に訴へる事屢であつた。この君主は當時ハンガリーの國王であつて後にはやがて西方の皇帝の位に登るべき人である。この際西方では法皇の認可と獎勵ともあつて十字軍熱が煽られた。それでシギスムンドは諸國を勸進し、フランスの騎士凡そ一萬人を始とし、イギリス、ドイツその他西歐の武士を募り得たから、勇ましくドナウ河畔を南下した。その結果は即ち有名な河の南にあるニコポリスに於ける決戦(一三九六)となつた。十字軍大敗して退き、西歐諸國始めて擧つて驚愕した。その後間もなくマヌエル二世親ら西方に向ひ、ヴェネチアより上陸して(一四〇〇年)再度の十字軍を求め、一旦パリに到り大いに歓迎され、又英國王とも會見したが、遂に實質上何等の援助も得られずに止んでしまつた。

(1) Manuel II.  
(2) Sigismund of Luxemburg-Bohemia.  
(3) Nicopolis.



今一つ東西接近を進めた事情がある。それは教會の問題である。初め前記のヨハン五世が法皇に援助を求めた時、その条件の一つとして希臘教會を羅馬教會に合併せうとの議さへ新に伴ひ起つて、これが爾來懸案となつた。而して當時西方に於ては羅馬に對してアヴィニヨンが分立して居る。所謂グレート・シズムの時代であつた。それで當時の大問題はこの分派を收めて、法皇を一に統一する事、並に羅馬教會にビザンツ教會を聯合せしむる事、及び異端の防滅といふ三案に集中したのであつた。従つてこの目的のため、十五世紀の前半に於て約五十年間、しばしば會議が催されて所謂宗教會議時代が實現するに至つた。その中、最も有名なのはコンスタンツの會議(一四一四—一六年)であり、これによつて法皇の御位は統一されて羅馬に於て唯一となり、羅馬は舊の如く、一切の西方に君臨する事となつた。又東西兩教會の聯合の問題に就いてはビザンツから幾多の使節や宗教家や學者が屢々西方に來つて參與する事となつた。一四三九年のフロレンスに於

(1) Great Schism.  
(2) Constang.

ける會議には實にヨハン八世さへ來り會した。

して見れば、トルコの西侵によるビザンツ帝國の窮狀、隨て希臘人の西方へ往來移住又は遊歴の傾向、西方に於ける宗教會議の流行等がイタリアに於ける知識慾の勃興と相俟つて、そこに於ける希臘古典の復興を促進する動機となつたのであつた。

この機會に私はヴェネチアのルネッサンスに於ける位置を一言しておく必要を感じる。抑もヴェネチアは無論中古の市の一つであるが、その起原の古さを羅馬法皇の政治上權力の創立と競ひ得るほどの舊國である。他の多くのイタリア都市とは頗る趣を異にし、海國として遠い海上並に東方に領地と權力とを擴げ、就中、ビザンツ及びサラセンとの關係が最も深かつた。今日ヴェネチアに遊ぶ人たちに取りて統領宮と共に觀光の中心對象となつて居るサン・マルコの大伽藍(中古の西ヨーロッパに建てられた最も華麗なるビザンツ式)を看ても、またシェーキスピアの物した有名なる悲劇「オ



セロ」(共和國に仕へた有名な將軍で、その出身はムーア即ちサラセン人であるオセロを主人公とす)に考へても、如上の關係が思ひ合はされる。しかし只だマメリュークのエジプト横領、殊にはオスマンリトルコの西侵以來、ヴェネチアは漸次海上の活動を窘められ、イタリア大陸に向つてその力を轉じた傾向が見られる。この市は概してかの法皇派、皇帝派の争の渦中から遠ざかつて中立し、國中に黨争及び謀叛は少なかつた。又如何なる外交關係に於ても非常に沈靜、慎重で、概ね中立を保ち、たとへ偶、外國と同盟する事があつても、たゞ一時の目的のため短期間これと結ぶに止まり、しかもたゞ能ふ限り有利な條件に於てこれをなすのが常であつた。畢竟、この市はイタリア諸市の中で、最近の用語を使つていはゞ「光榮ある孤立」の立場にあつたのである。而してその利害關係も亦た十九世紀のイギリスの如く、ひろく當時の全世界に繋がるが故に、自他の國情認識の必要上、早く諸外國及び自國に關する事情を調査し、これを一まとめにし一種の統

(1) the Mamelukes.  
(2) Splendid isolation.

計的知識が作り上げられて居た。是等の統計は既述の如きフロレンスのそれと相並んで近代に於ける統計の最初である。そしてかゝる統計を有する事は國家の性質の進歩を物語るものである。是等の統計によれば一四二二年、ヴェネチアの總人口一九〇、〇〇〇とある。又その翌年に統領モチエニゴは、その臨終の床に數名の元老を招き次の如き統計を口授した。

支拂濟國債 四、〇〇〇、〇〇〇 デュカ  
未拂國債 六、〇〇〇、〇〇〇 デュカ  
外國貿易總額 一〇、〇〇〇、〇〇〇 デュカ

(内、四〇%は純益)

船舶 (2) 小型船 三、〇〇〇 隻 乗員、一七、〇〇〇 人  
(3) 大型船 三、〇〇〇 隻 乗員、八、〇〇〇 人  
(4) 軍船 四五隻 乗員、一一、〇〇〇 人  
造船工 一六、〇〇〇 人

(1) Doge Mocenigo. (4) Galere.  
(2) Navigli  
(3) Navi



家屋

價格

七〇〇〇、〇〇〇デユカ

借料

五〇〇、〇〇〇デユカ

國家通常歳入

一、二〇〇、〇〇〇デユカ

かくの如くして十五世紀の前半に於てヴェネチアは既に物質上イタリア第一の位置にあつたのである。この市は廣く外國文物を攝取して、實利實益的の知識と生活とを増進し、東西の物質的文明の交換を促すの功勞があつたけれども、精神的文化の貢獻者としては到底フロレンスに及び得なかつた。例へば外國の學者に對してもフロレンス程に之を尊敬もせず、保護もせず、たゞそれ等學者の往來を援助促進したといふ程度に止まつた。従つて東方の學者達の西方に来るや、その多くはこの地に上陸するを常としたけれども、永くこの地に住まはず、いつかは他地に向つて去るの風があつた。かくてヴェネチアそのものは學問の中心とはなり得なかつた。この點では、寧ろヴェネチアの領内に收めらるゝことになつたパドワの方が遙かに盛であつた。こゝには夙に大學があつて有名となつた。尙ほまた藝術の方面についてもヴェネチアはフロレンス、その他の有名なイタリアの文化市よりも遅れて居て、最初は著はれず、かの藝術史上有名なヴェネチア派と稱する繪畫の流風が出たのは大體に於て次の世紀即ち千五百年代<sup>チンケチエント</sup>に至つてのことであつた。

所詮、ヴェネチアはルネッサンス時代のイタリアに對して、猶ほ紀元前一、二世紀ヘレニズムの西漸時代のイタリアに對するプテオリ(ポゾリ)の如き文物輸入の大玄關口の役割を演じた、而も富強に於ては同日の談でなく、西方の世界で一、二を争ふ大市であつたから、その東西媒介の働は非常であつたのである。

さて上來私は世界の變動、教會の要求、交通の關係を一瞥したから、ここに再びルネッサンス思潮の本流を辿らなければならぬ。一三九六年、かのニコポリスの戰のあつた年に、マヌエル・クリソラス(一三五〇—一四一

(1) Mannel Chrysoloras. (1350—1415)



五が西方に向ひ、他の同胞人と同じくヴェネチアに上陸した。これが即ち幾多の有力な西方學者達の西遊の始である。彼の使命は皇帝の勅によつて西方の援助を求むるに在つたが、これは果し得ず、のみならず西方に約二十年間近くも飄零して遂にコンスタンツ宗教大會議に赴き、こゝで死する運命を有つて居る。この悲むべき運命によつて彼は他の使命をつくすことが出来た。それは希臘學問の輸入である。彼はフロレンスに招聘されて言語及び文學を講じた。彼の講筵に侍したのは、少青年子弟のみでなかつた。老人、商人、上流社會の人、政治家等までも出席した。随つて彼のフロレンス滞在三年の結果は人生主義ヒューマニズムに一箇の新らしい道程を開いたのである。かくして希臘古典の本文が種々多くラテンに翻譯され、希臘語の演説をさへ行ふ者があり、後には單に南方カンパニアで希臘植民地方の遺物を探るだけに満足せず、親しくその本國に遊んで遺跡を踏査し遺物を探訪する人も多くなつて來た。「プラトラー・アリストテレス比較論」を成して名聲を高

めたジョージ・オプトレビズンドも同じ頃來た人である。彼は初めヴェネチアに來りプラトラーの法律對話篇をラテン譯して時の統領ドゥッヂユに捧げ、哲學教師に任せられたが、上述の如くこの市では餘り學者を好遇しなかつた爲め後にはこの市を見捨て、他に去るに至つた。ジョージ・ゼミストス・プレトーンは前に述べた一四三九年のフロレンスの會議に際して西方に來つたプラトラー派の老儒である。もと、スバルタの人、フロレンス會議に列し、その學識の豊富リッパを以て鳴つた。(ブレイトンの名は實にこの意から出て居る)。時のフロレンスの執政コシモ・ディ・メデイチはこの學者のためにフロレンスのサン・マルコに於て學園アカデミアを開き、ゼミストスはこゝでプラトラーの唯心論を講じたのであつた。從來基督教會の哲學は古典の中にて形式を重んじるアリストテレスを唯一の教權とし來たものである。しかるにゼミストスは之を超越してプラトラーを研究目的とし、之を基督教以上に高きものなりと教へた。即ちこのプラトラーに基督教を合一せしめ一種の神祕的哲學的な新宗教

(1) George of Trebizond (Trapezunt). (4) Cosimo de' Medici.  
 (2) George Gemistos Plethon of Sparta. (5) San Marco.  
 (3) Plethos. (6) Academia.



體系を構想し、個人の個性的精神的自覺を促したもので、その人生主義の學風に與へた影響、刺戟は大なるものがあつた。ジョージ・オブ・トレビズンドが既記の「プラトロー・アリストテレス比較論」を發表し、プラトローを貶してアリストテレスを賞揚したのは實にこの機會に於てであつた。かくて兩者の論争が起つたが、この論争に對し、宛然裁判官の位置にも立つべき更<sup>(1)</sup>に他の一亡命家が現はれて兩論につき批判した。ニケーアの司教ベッサリオン即ちこれである。この人も亦フロレンス會議の參列者の一人であつた。學識才幹並び高く、コンスタンチノール陥落後は斷然歸東の念を絶ちて羅馬教會に入り、昇進して遂に樞機員<sup>(2)</sup>にまで進んだ。彼は前述の論争起るや、一四六九年「プラトローを譏るものに對して」なる書を羅馬で著はし、古代の二大哲學者を賞揚し、兩者に對し公平なる立場を示した。しかしその何れを採るか<sup>(3)</sup>と云へばプラトローを採るべしと説き、プラトローを貶した學者達に反對したのであつた。

(1) Bessarion, Archbishop of Nicaea.  
(2) Adversus culminatores platonis.

以上舉げた如きビザンツ出身の學者達が多く招聘されたのはフロレンスを筆頭とし、羅馬及びパドワである。又時にはヴェローナ、フェラーラ、ペルーチア、バヴィア、ボローニア等にも招かれた。而して彼等は會議等の如き公の會合のある時には伴はれて參加するのがその常であつた。而して彼等の尤も頻繁に出入したフロレンスが希臘古典復興の最も盛であつたことはいふまでもない。「この市では幼い男の子すら正しい美しい希臘語を語り、世人は宛らアテネに來た思がした。」とはポリチアノーの語る所である。そしてこのポリチアノーはラテン、希臘を始め全古典文學を我物とし、自在に之をあやつり得た人で、ピコ・デラ・ミランドラをして「若しかゝる學者が多數居つたならば吾々は少しも古代を羨む必要はない。」とまで嘆せしめた程の人であつた。

以上述べ來つた所、之を要するに、茲に一個の新しい時代といふ意味に於て千四百年代が到來したといふことが看取されるであらう。何故なら、

(1) Verona.  
(2) Ferrara.  
(3) Peruzia.

(4) Poliziano. (1454-94)  
(5) Pico della Mirandola. (1463-93)



この十五世紀に入つてビザンツ人の西方に流れ込む潮流は滔々として進み、恰も古代羅馬の社會に對してボエニ戦争後、希臘人が多く入り込んだのに似て居、而してその影響はきはめて大きく、從來ラテン復興のみによつて居た<sup>ヒュムニズム</sup>人生主義の社會は始めて何人でもみな希臘語の原本を讀み、希臘の精神をその全部に於て味ひ、殊に親しくプラト―哲學の思想を體驗することになり、隨てその學風は始めて廣大にもなり、深刻にもなり、從來よりも頓みに著しく個性的内省的批判的傾向を加へたのであつて、これでこそやがてイタリアのルネッサンスの發展が完成さるべきであつたからである。

#### 第八節 個人主義の發現 專制主時代<sup>デスポット</sup>

再び中古生活の過ぎ越し方を顧れば、イタリアの統一を維持すべき國際的勢力はまづ神聖羅馬帝國の元首である皇帝であり、次いで羅馬加特力教會の教皇、即ち法皇であつた。しかるに前者の實權は十三世紀中葉に全

(1) Panic War.  
(2) Despot.

く倒れ、後者も亦たその跡を逐うて十四世紀の初頭以來事實上無能力者の列に入り、又新しく起つた、いはゞ第三の勢力たるフランス人も十四世紀殊にナポリ國王ロバート(一三四三歿)以後には内外の葛藤の爲にその勢威を失墜して行つた。かくの如く世界的統一の城壁が<sup>つぎ</sup>に崩壊していつたその隙におのがじ、頭を擡げて、ますゝ勢を高めたのが即ちイタリアの諸市であつて、彼等は各自の事情に應じてほどゝに自由に活動する餘地を得たのであつた。

かゝる一般の趨勢の下に、多かれ少かれ獨立したイタリアの諸市に於て、既に見ておいた通り、長い間の黨争の激烈と階級の反目とに惱まされた結果、市民たちは漸く國內の安堵と平和な生活とを熱望する様になつた。この自然な社會的要求はルネッサンスの開發に伴ふ個人主義の勃興と相まつて、こゝに有力なる個人の奮起を誘ひ起す事になつた。而してこれ等の人物は各自の都市國家に於てよく黨争を絶ち、階級を制し、市民を指導し或



は利用し、外患を防ぎ或は國際平和を維ぎ、結局、かのフリードリッヒ二世等の專制政治の先例に倣つて自ら政權を壟斷して、所謂國家(Stato)を樹立した。かくして、早くも十四世紀のイタリア半島のところへに於いて他國に見るべからざる天才偉人の個人的努力と現代的國家生活との範が示されたのである。これ希臘時代の僭主(タイラント)にも當るべき者で、イタリアでは專制主(Despot)と呼ばれるもの、出現であつて、この風十五世紀に入つて一層盛となつた。私はこの新奇異常なる流行政治家の一般的共通性を概瞥しておかうと思ふ。何となれば彼等は同時に人生運動に缺くべからざる保護者であつたからである。

先づ彼が執らなければならなかつた政策の秘訣は何であつたか。それは他でない、租税を成るべく從來通りの制限に保ち、就中、地租及び財産税を一定の臺帳に基いて正規に徴收して決して増税せず、彼の必要とする收入の増加は主として國家の擴大、交通の増進、社會の繁昌によつて計るに

(1) lo Stato.

あつた。換言せば財産の沒收、消費税、交通税、關稅等が増收の主要財源たるべきであつた。當時の政治に於ける一切の標準は人民の公安にあり、苟もこの公安のためにするならば、非常手段といへども一般人民の承認する所となつた。かくの如くして專制主は自分の國家の財政を豊かにし、餘裕ある財力に據つて自己の朝廷(ロイヤル・カウシヤ)を張つた。當時朝廷と國家とは同意語であつた。かゝる權力樹立の下にあつては、國內の特權は廢され、黨争は絶たれ、一切の被治人民は平等となる傾向があつた。それ故に結果に於ては專制主義の政治が民主主義のそれであるといふ趣を生じたのである。

然らば專制主(Despot)その人の出所如何。彼はもと血統、傳來、憲法の上に於て、何等十分正當な權利を具備したものでなく、たゞ内外の危機に乗じて、自家固有の實力を利用し、非常手段により、專制主(Despot)といふ非常地位を克ち得たものである。それ故に彼の恃む所は彼自身の一身が持つて居る實際の力量である。彼は一切の方法と勢力を盡くして個性を發揮し、國內に於ける



唯一特殊の人物となつた。随つて彼はその國內に於ては全くの孤獨であり、對等に交はるべき親友も有たない。一朝、彼に何等かの乗すべき隙あらんか、何時、何人でも彼を倒し得るのである。況んや内に敵黨、外に敵國あつて、しかも亡命者はこの敵國を頼つて復仇の機を窺つて居る時に於てをや。專制主はかくて己が友人、親戚すら尙且つ依頼し難く、時には妻子兄弟さへ裏切る事あり、又、彼の死後、相續人たる嫡子が不肖ならばその叔父、兄弟は直ちに容易にこれを廢立する。故に專制主の家には不祥事は頻頻として起り、當時の諺に「君主は毒殺或は刺殺の運命を受くべきなり」とさへ言はれた。「彼はその身の危険を防ぐべく堅固な館を構へ、外國から護衛兵を雇ふ。而してその恐怖と寂寞とに包まれた生活を護り慰さめる爲に諸國から種々の才藝ある人物を數多招聘するのが常であつた。多智多能なる朝紳、<sup>(1)</sup>點猪にして掛引に長ずる傭兵隊長、<sup>(2)</sup>運勢を占ふカルディアン、古典的な修辭に秀づる學者、築城土木に従事する技師、宮室寺觀を飾る藝

(1) Cortegiano.  
(2) Condottiere.  
(3) Chaldean.

術家等は即ちこれである。この人物招聘は、之をアルプス嶺北の君主がとかく騎士や吟遊詩人などを招聘してその城中を賑はして居るのに比し、著しく異なつた標準によるもので、南北の文化發展の相違もトせられて面白い。

因つて私は是等專制主を出身如何によつて類別してみよう。先づ擧ぐべきは封建領主から起つた者である。フェラーラのエステ家及びウルビノの城主フェデリゴ・ダ・モンテフェルトロ等はこれである。二は皇帝の代官から成り上つた人々である。これにはヴェローナのスカラ家及びミラノのヴィスコンティ家がある。このヴィスコンティ家のジャン・ガレアツォはフランス王ジャン二世の娘イサベラと結婚し、後にミラノ公となつた人であつて、かの詩人ペトラルカはこの時の結婚式に列しこれを飾つた一人である。この君主の時代にミラノの大伽藍、バヴァリアの修道院、宮殿等が建てられたのである。第三はもと軍長及びポデスタの職にあつた者である。

(1) The Este of Ferrara.  
(2) Urbino.  
(3) Federigo da Montefeltro.  
(4) Imperial vicars.  
(5) Scala.  
(6) Visconti.  
(7) Gian Galeazzo Visconti.  
(8) Isabella.  
(9) Certosa e palazzo of Pavia.  
(10) Capitans.  
(11) Podesta.



パドワのカラレツシ家、<sup>(1)</sup> マントワのゴンツァギイ家、<sup>(2)</sup> パルマのコレツヂ家<sup>(3)</sup>がこれであつた。第四は備兵隊長出身の者である。その最も有名なるはスフォルツァ家である。この家はもとローマニア地方から起り兄弟一族が多くて皆な勇武であつたから、備兵隊長の家として有名となり、中にもフランチエスコ・スフォルツァはヴィスコンテイ家に仕へ、その聲となり遂にミラノ公となつた。第五は法皇の甥主義<sup>(4)</sup>によつて位置を得たもので、シキストゥス四世の保護によるフォルリのリアリオの如きがその例である。最後に數へるべきは富豪出身のものである。即ちボロニアのベンティフォグリ、ペルーヂアのバグリオニ等の如きはこれに屬する者である。以上六種の類別を指摘することが出来る。

そしてイタリアに於けるルネッサンスの發展と充實とにとつて最も忘るべからざる専制主は實に第六種から出身してゐるフロレンスのメディチ家であつた。

第九節 啓蒙的専制主としてのメディチ家

メディチ家は元來フロレンスの富豪である。然るに夙に下層社會に同情しそのチャンピオンとなつた事は既にかのチオンビの亂に於て略述した如くであり、それ以來隱然民主派の首領となつて居た。十四世紀の終から十五世紀の初にかけて、この家の代表者はヨハンネスといひ有力な人物であつたから、家の勢力隆々として高まつた。この人一四二九年に死す、之を受けたのがその子コシモ(一四二九—一四六四)であつて愈々大望を抱き、この家のフロレンス支配を創立するのである。

しかしコシモ時代のメディチ家とても最初の數年間は決して安固でなかつた。問題は上に述べておいた貴族對人民の抗爭に係る富豪間の權力争である。時は一四三三年貴族派の首領リナルド・アルビッチはこの年の市長を自派の手に丸め得たのを機としてクーデターを斷行した。即ちまづコシ

(1) Carraresi of Padua.  
 (2) Gonzaghi of Mantua.  
 (3) Correggi of Parma.  
 (4) Sforza of Milano.  
 (5) Stxtus IV.  
 (6) Riario of Forli.  
 (7) Popolo grasso.  
 (8) Bentivogli of Bologna.  
 (9) Baglioni of Perugia.  
 (10) Medici of Florence.

(1) Rionaldo Albizzi.



モを欺き召して市役所の牢獄につなぎ、然る後、<sup>(1)</sup> パーラメント<sup>(1)</sup>及びバリアの方法によつてコシモを誅せんとした。

この方法はイタリア共和國でよく慣用された政治革命の手段である。當時フロレンスで行つた形式によると、パーラメントは市役所前の廣場(ピアッツァ)に召集された。場の周囲は兵力を以て固められて居る。市民集る。しかし演壇(リングエラ)の附近には黨人が集り他人を近づかしめない。演壇の上から役人は聲高らかに叫んでいふ、市民諸君よ、諸君はすべて選舉權を有する者、その總數の三分の二がこゝに集つたと信するやと、演壇の直下から聲が起つて之に應じていふ、然り々々、確かに定數以上ありと。壇上から再びいふ、諸君は國家改革のためバリアを任命するを欲するや。壇下から乃ち然り々々と答ふ。忽ち二百名のバリアが組織される、その多くは黨人である。バリアは正當なる裁判の手續なしに直ちに罪人を死刑に處するを得べきである。

(1) a parlamento e a balia.

コシモの生命は風前の燈であつたが、幸に彼の人望が盛であつて貴族派攻撃の運動が起らんとし且つ彼の金力も強かつたので、纔かに危きを免れた。彼は十年間パドワへ放逐されることになつた。

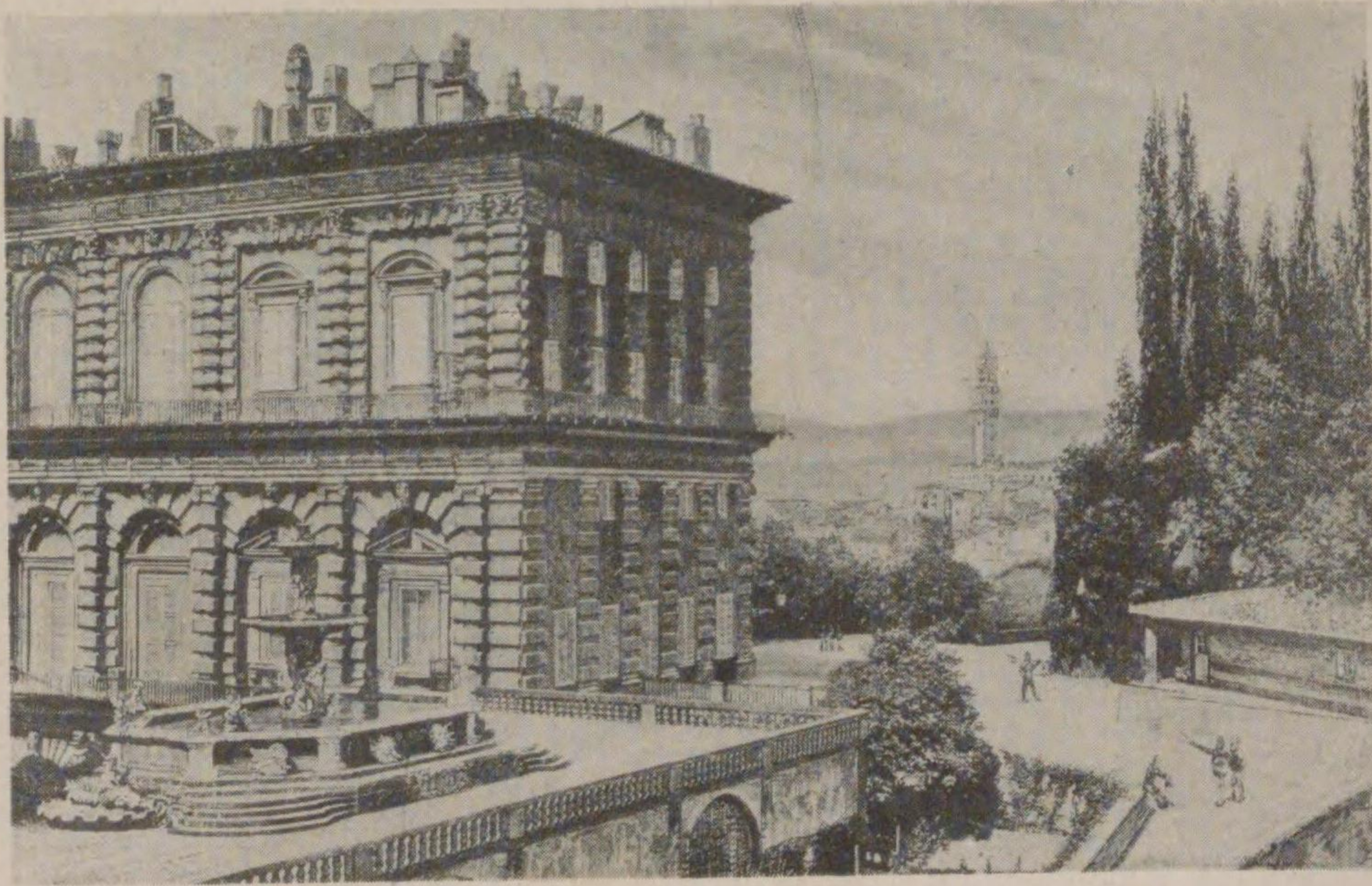
かくてコシモは外國に居ること未だ一年ならない内に明くれば一四三四年本國では反動起りて逆にパーラメント<sup>(1)</sup>及びバリアが行はれ、此度は呼びかへされてその年の市長に選ばれた。爾來三十年間彼はフロレンスの事實上の君主となつた。しかしその間、永く續いて市長であつたわけではなく、只だかの一三三八年の宗教會議に當りビザンツの皇帝を迎へるために再び市長になつたばかりであつた。後にミラノのヴェイコンテイ家男統斷絶後の相續問題から生じた紛争の結果の外交事件に、<sup>(2)</sup> フロレンスを代表してヴェネチアに赴いた時には單に共和國の頭と稱するに止まつた。彼は名を避けて實を取るの政治家であつて、内治にも外交にも相當な實質的効果を收めた。外はミラノ公國の傭兵隊長<sup>(2)</sup> フランチェスコ・フォルツァと夙

(1) Capo della Republica.  
(2) Francesco Sforza.

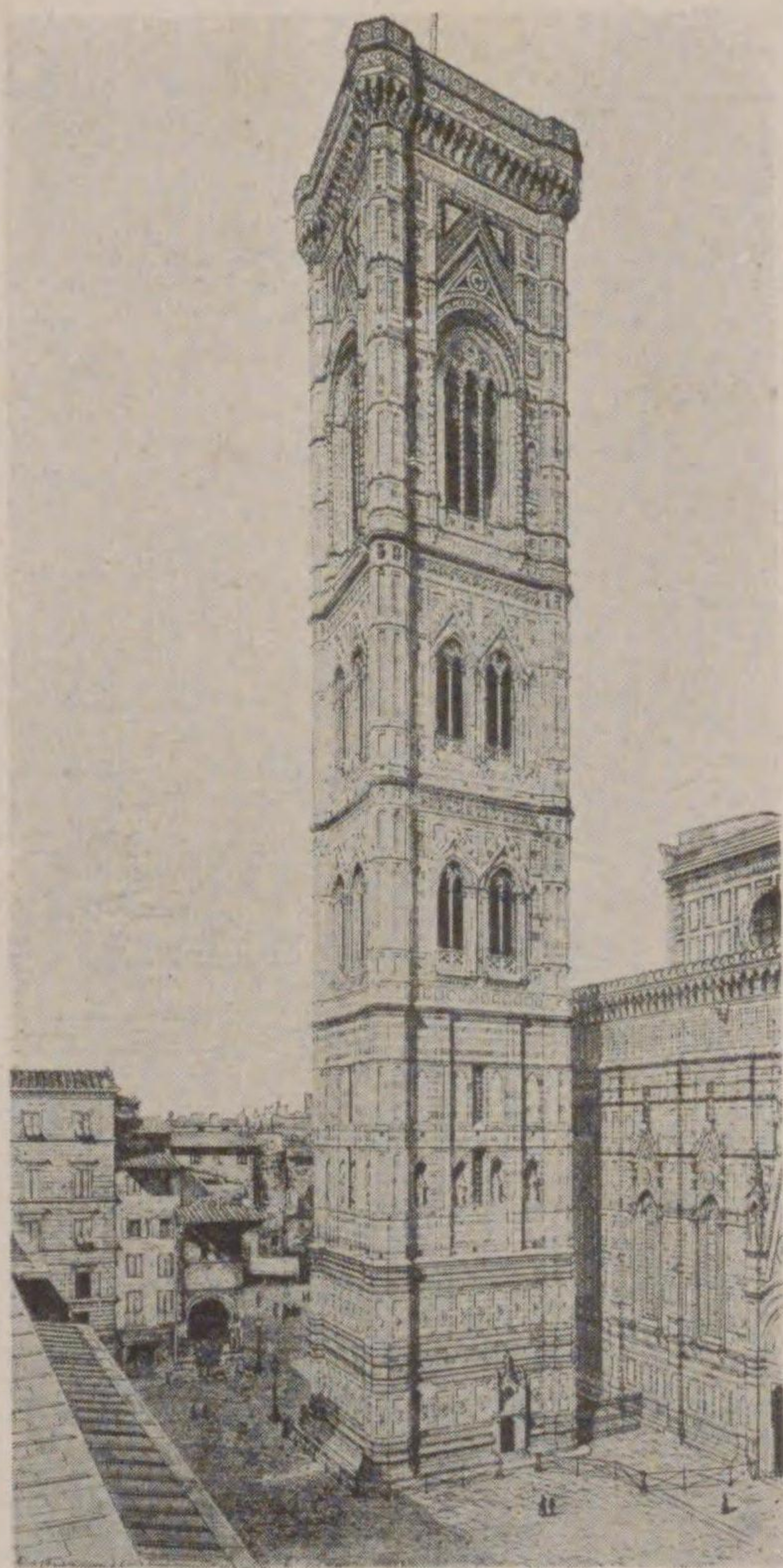


に同盟し、遂にこの冒險的英雄のミラノ相續の大望を助成し、この親密關係を基礎として彼の晩年から孫ロレンツォの時代の中年まで二十五年間の國際平和を確め得たのである。次に彼の内治の方針は大約次の三つであつた。即ち第一には自ら謙抑して、表面の權威あり、公けの責任ある位置にはなるべく立たず、邸宅衣服その他の人目を惹くものにも華美を慎んで市民の嫉妬を避けた事である。たとへば彼が市長となつたのは上記の如く只だ必要に迫られた時二回就任したのみであるし、又住宅を建築するに當つても、ブルネレスコの派手やかな設計を却けてミケロッツォの質實控目なる設計をわざと採用し之を市中に建てた。今日のリカルディ館はそれである。之を同時代のコシモと威勢を争ふたルカ・ピッティが建てたピッティ館に比して對照が面白い。この方は當主驕奢に流れ、ブルネレスコの設計に則り華麗なものを而も河向ふの高臺<sup>ポッジョ</sup>に建てたのであるから威風堂々として居る、これは今日有名な繪畫陳列館となつて居るものである。第二にはコ

(1) Palazzo Ricardi.  
(2) Palazzo Pitti.



ピッティ館



花のサンタ・マリア殿堂の鐘樓



シモが階級の差別を出来るだけ平均に近からしめ、課税その他に於てなるべく一般市民及びメデイチ派を保護懐柔したことが注目され、更に第三には種々の手段を運らして共和國の公職をメデイチ派の手に收める事に努力したことが顯著である。コシモはかゝる方針の下に政策を行ひ、事實上一人の獨裁政治を創りあげ、遂には「<sup>(1)</sup>國の父」とさへ呼ばれる様になつたのである。

コシモがかゝる地位に立ち得たのは一方彼の人物の優れたのにもよるが、他方メデイチ家の大なる金力にも依るものである事を忘れてはならない。彼が初めアルビツチ派のクーデターの時辛うじて誅戮を免かれて十年間の放逐を課せられたのは、反對派がその間にメデイチ家が全く零落して了ふだらうと豫想した故であつた。しかるに彼はバドワへ放逐後間もなく幸にヴェネチアの周旋により、その地に移り、此處の友人達から經濟上の援助を受けて居り、しかも一年ならずして上述の如く歸國を許されて居るので

(1) Pator Patriae.



あるから、メデイチ家の金力はその放逐にも係らず毫も失墜する事なくして済んだ。しかのみならず、その後コシモは政權を確保すると共に一家の經營よろしきを得て豊かなる金力を作り、更に之を國際間の一威力にまで進展させ、愈々己が勢力を固くしたのである。具體的にいへば、彼は他の有力な五六の家と組合つてメデイチ會社を經營し、パリ、倫敦、ブルージュ等に支店を置き、世界到る處と取引し一大經濟網を張り、以て法皇をも多くの國王や政府をも支配するかの如き觀さへあつた。他面に於てこのメデイチ家の金力が惜しげなく文化上の施設に用ひられ、以ていやが上にその人望勢力を強固にしたことも等しく刮目すべきであつた。コシモのこの學藝上の趣味は政治的野心よりも早くから涵養され且つ發達して居た。といふのは彼は幼少の頃からイタリア第一の文化の間に育ち、人生主義的教育を受け、友人もその方面に多かつた。それ故に彼がその財をよくこの方面の保護獎勵のために散じたのは單に政治上の目的にあつたばかりでな

(1) Bruges.

く、彼が人間としての純粹な文化愛から發する處も少なくなかつたわけである。彼は自分の會社の支店、又は代理店の手によつて東はコンスタンチノープルから西は西方の諸國に至る間で、書籍、古文書、貨幣、寶玉、陶器、彫刻、繪畫等の學藝品や美術品を熱心に蒐集した。抑もコシモが租税支拂、慈善事業、公共建築等にのみ費した金額だけでも四十萬フロリンに上つたと言はれる。そしてこの額は實に上述のヴィスコンティ相續の紛擾から起つた六年間の戰爭に費した金額に相當するものであつた。しかもこれは、それ以外の諸方面に於てコシモの使用した一切の費用に比すれば僅かの一部分に過ぎなかつたのである。彼は美術工藝品の支拂のみでも四萬フロリンを有したと言はれる。若し國家の費用、機密費のため、彼が私に出した金額、他の會社や、學者、藝術家或は饗宴等のために投じた額をも計上すれば驚くべき莫大な額に上つたであらう。しかも一四二九年彼が父から受けた遺産は僅かに二十萬フロリンに過ぎなかつたのである。これを



以てしても彼の儲けた所得高と、公共の爲に投じた金額とが如何に大きなものであるものであつたかを察する事ができるのである。

コシモの子ピエロは多病であつた爲に公の席に出でず、ピエロの子ロレンツォ及びジュリアノ兄弟が代つてこれに當つた。この二子の母ルクレチアはフロレンスの名族トルナボニ家の出、賢明にしてよくその子女を教育した人であつて、上記の二人の兄弟が年長じて公事に従ふに及んではよくこれを指導して誤る事なからしめた。ピエロとルクレチアの間には七人の子女があつたが、内三人は早世し男女二人宛四人の子が成長した。一四六九年十二月ピエロはこの四子及び妻を残して五十二歳を以て歿し長子ロレンツォ、後を嗣いだ。ロレンツォは弱冠にして早くも父の代理となり、屢外國に使し、又は賓客の接待に任じ、少しも使命を辱かしめなかつた。又コシモの晩年からメデイチに對して野心を起して來たかの豪族ピッチ家はコシモが死んでから露骨となり平派に對して岡派といふ館の位置による

- (1) Piero de' Medici.
- (2) Lorenzo.
- (3) Giuliano.
- (4) Lucrezia. (+1482)
- (5) Tornabuoni.



ダンテ



ロレンツォ・イル・マグニフィコ



コシモ・デイ・メデイチ



名目の對立さへ現はれ、こゝにビエロ暗殺の陰謀がめぐらされ、いよいよ事を發することになつた。この危機に當つてロレンツォの炯眼よく事を未然に察し、敏活なる行動を起して父の遭難を事前に喰止め、進んでピッチ家の一派を平定した(一四六六年)。

ロレンツォは容貌風采に於ては頗る揚らなかつたが、才氣濶達で若いに拘らず長者の風あり、日の出の勢であるメデイチ家の若様として、母の注意は更なり、當時鬱然として起りつゝあるルネッサンスの天才から十分なる教育を受け學問詩歌藝術の道は勿論のこと、身體の運動も如何なる同輩以上に秀で、殊に乗馬に長じて居た。弟のデュリアノは風貌兄より幾分かまさつて居たが決して美しい方ではなく、兄よりも力強く、運動をよくした。しかし兄よりも人間が單純であつて直情徑行の點多く才氣と濶達とに於ては兄に一步を譲らざるを得なかつた。彼等兄弟の境遇は祖父及び父のそれに比して大いに異なり、家は今や王侯同様の地位に立ち、世はルネッ



サンスの花が咲き誇りつゝあり、内外共に誘惑の最も多い時であつた。しかも彼等兄弟が、その腐敗に汚されなかつたのは、實に父祖以來の一家の家訓と賢明な母の真心こめた注意と、兄弟の天分とによるものであつた。父ビエロの死せる時(一四六九年二月)、ロレンツォ年漸く満二十歳を越えたばかりで、その半年以前に母の厚き心配りによりクラリチエ・オルシニなる良配遇を得て居た。從來メデイチ家はフロレンス以外の家とは結婚した事がなかつた。然るに今やクラリチエは羅馬最高の貴族の一であるオルシニ家から迎へられたのである。即ちこれもまたメデイチ家の位置の向上發展を物語る一端となるものである。

しかし高明の家、鬼これを窺ふとか。既にビエロの時ピッチの陰謀があつたやうに、このロレンツォ兄弟の時に再びメデイチ家に對する暗殺が計劃された。これはパッチの陰謀(一四七八)とて一層有名である。パッチも亦たフロレンスの銀行家で、昔はコシモの同志で、メデイチ家とも姻戚の間

(1) Clarice Orsini.

柄であつたが、今はロレンツォの時に至つて漸く不利となつて居る。この際羅馬の政治財政の問題を始め他の個人問題が加つてこの陰謀を燃きつけて廣大ならしめた。このものは時代の代表的事件であるから、その梗概を物語らう。

時の法皇はゼノアの漁師であるリアリオ家から出身したシクストゥス四世であつた。この法皇も當時の歴代の風潮である政治を好み、因てその甥二人を重用して政治運動に従事せしめ、こゝにルネッサンスに於ける法皇の甥政策主義史の第一頁を開いた人である。就中その一人なるイモラ伯のデロラモ・リアリオは有名である。このリアリオ家の政治的野心は必然上中央及び北伊へ向けられた。それでまづイモラを買収して上記の甥を之に封ずることになつた。メデイチ家は之を牽制妨害すべく故意にこれに必要な金策を拒んだ。そこでリアリオ家は止むなくパッチ家の銀行から金を借りて所用を辨じ、政治上に於ても之と結託するに至つた。又フロレンスの大

(1) Riario  
(2) Sixtus IV.  
(3) Nepotism.(4) Girolamo Riario, of Imola.  
(5) Pazzi.



司教であつた樞機員<sup>(1)</sup>ピエロ・リアリオの歿後、フロレンスの貴族<sup>(2)</sup>フランチェスコ・サルヴィアッティなる者は、その後を襲つて大司教に任命されたが、ロレンツォ及びフロレンス市民から忌まれ、一時ビザの大司教に轉じたが、又もやこゝからも排斥せられて羅馬に移つた。このサルヴィアッティは羅馬に到るや、自然ふかくロレンツォを怨み復仇を期し、この地でリアリオ家及びバッチ家と結んだ。この結託が中心となつて、メディチ家の優勢を妬む者、或はこれに私怨を抱く者を之に引き入れることになつたのである。しかして彼等は更に腕つ節の人として法皇の傭兵隊長<sup>(3)</sup>バティスタ・ダ・モンテセッコをも語つた。この軍人が事件失敗後獄中で自白した所によれば、當時彼等一味の計畫の背後に法皇その人があつて或る關係のあつた事は疑はれない。かくて陰謀者等は事の實行を一四七八年の復活祭<sup>(イースター)</sup>に期しその日の宴會の席上と内定したが、當日ロレンツォは出席したけれども、弟デューリアノが病氣のため不參したので俄に延期し、次の日曜日、御堂<sup>(ドーム)</sup>に於ける彌

(1) Cardinal piero Riario.  
(2) Francesco Salviati  
(3) Battista da Montesecco.

撒<sup>カ</sup>の際兄弟二人とも揃うて居る時と決した。

抑も教會の内で壯嚴な儀式の最中で參詣人を暗殺する、しかもその下手人中に一人の大司教が加はつて居るが如きは、神明を冒瀆するも甚しき所行で、今日から見て實に異常な事件と考へらるゝのであるが、當時勃興した思想によれば、それ相當の理由があつたのである。一體、專制君主暗殺は十五世紀の流行であつた。これには古典思想の復興が一部は興つて居るといふのは古代希臘人の間で僭主暗殺<sup>(タイラント)</sup>を正當とする思想がある。この思潮を人生主義者流の一部が自由に社會に供給したから、政界で實行を尙ぶ連中の間では、羅馬のシーザルを刺したブルトゥスや、希臘のピシストラトス家をやつ附けた<sup>(2)</sup>ハルモディウス及び<sup>(3)</sup>アリストゲイトンは何よりの仁人志士の模範とされて來た。しかして專制主は常によく身邊を護衛されて居る故、その護衛のゆるむ機會は教會に於ける神聖なる儀式に若くはない。加之、當時ボローニャから出て來た人生主義者<sup>(4)</sup>コラ・モンタノなる者は遍歴し

(1) Brutus.  
(2) Harmodius.  
(3) Aristgeiton.  
(4) Cola Montano.



て青年に教へ明かに僭主暗殺は正當なりと説いた。この説に動かされて現にミラノ公を怨む三人の青年は聖アンブロシウスの神靈に誓つて、遂にサンステファノ參詣中を機として君主を暗殺するに至つた(一四七六年)。この公はガレアツォ・マリア・スフォルツァとてかのミラノの僭奪者フランチェスコ・スフォルツァの長子で現にその跡目を継ぎ、而も最も悪い意味のタイラントであつたから、暗殺者側からいへば一層暗殺の理由があつたのである。曾てはダンテの「神曲」の判きによれば黄泉の國の最下層に貶されて居たブルトゥスは、今や自由を護れる人として賞讃され、その手段は正當視されることになり、凡そ僭主暗殺にはその手段も場所も選ぶ要なしとまで思はれる様になつて來、現に上記の如き實例さへ最近に行はれた。さればメデイチ家の兄弟暗殺が御堂の内ドイモで彌撒ミサの最中に行はれるべく計畫されたとして左程に驚くには足りないのである。

偕、事は當日の彌撒ミサに於て、市の司教が聖體ホステイを奉上する瞬間と打合され、

(1) St. Ambrosius.  
(2) San Stephano.

いよ／＼その危機が來た。然るにこの瞬間、手づからロレンツォを刺すべき役割を承はつて居たバタイスタは宗教心に打たれて躊躇して進み得なかつた。而も今は一瞬の猶豫も許されないから、一味徒黨の間から二人の僧侶が代つてロレンツォに躍りかゝつた。然し劍に慣れなかつた爲め僅かにその頸を傷けたのみであつた。ロレンツォ乃ち身の危難を知り、敏く上衣をひるがへして左手に巻きて敵の刺し込む劍を防ぎながら、由來スポーツで鍊えた身體であるから、ひらりとカイアの御堂ドイモの裏口から身を以て免れた。この間に大司教サルヴィアッティは弟デュリアノを滅多突に刺した後から調べたところによると、十九ヶ所の創を蒙らして目的を達したが、その餘り却つて自らの膝を突き、可なりの重傷を負ふた程であつた。この兄弟暗殺——一人に成功し他の一人を逸した——を合圖として、パツチの陰謀派は人民の蜂起を煽動し廻つたが、彼等の豫期して居たほどの反響もなく、大勢は現政府を支持したから、謀叛人は捕へられて誅せられた、大司



教等皆なその内にある。かくて陰謀は全く不成功に終つた。

そればかりでなく却つて反動が起つて同情はメデイチ家に集り、フロレンスに於けるロレンツォの勢力は益々固くなるに至つた。法皇シキストゥス四世これを見て樂まず、因て大司教殺害の罪を數へて、ナポリの後援の下にフロレンスを攻めることになつた。かくてコシモ以來二十五年間、平和を享受して來たフロレンスも今や外國との戦亂に苦しむ事となり一時は危機に瀕したが、ロレンツォ自ら身を挺してナポリに赴き、巧みなる外交によつてこれと和した爲、フロレンスは辛うじて事なきを得た。

而して内に於ては一四八〇年、ロレンツォは國內の憲法を改正し七十人會を組織して國政を議せしむる事とした。これはかの羅馬の 아우グストゥス時代の元老院の制度に酷似したものであつた。元來フロレンスの公職は凡て一年と言ふ短期主義であるに反し、この議員は終身とし且つ自己補充をする。即ち代議政體の精神に反するものである。最初はメデイチ家の一

(1) Settanta.

派の者が大多數を占めて居たから、家の代表者たる中心人物が有力なる限り、この七十人會議による政治はメデイチ家にとつて安全なわけであつた。つまり、バッチ陰謀失敗後の反動の風潮に乗じて、ロレンツォの賢明な政策は内治外交ともに成功して、よくメデイチ家の政權を維持したのである。抑もロレンツォはコシモの如き財政家でなく、その家の富はコシモの時程に豊かでなく、公私を混淆して公金を私の目的に使用したといふ非難さへ蒙つた。しかし彼は巧妙堪能な外交家、且つ政治家であつて努めてよくイタリア列國間の均勢を保持した。これには他方法皇シキストゥス四世の死及びインノセント八世(チポー家)の即位(一四八四年)が與つて力があつたのは言ふまでもない。かくしてロレンツォは造次にも顛沛にも、よくイタリア内外、大小の事情に細心の注意を拂つて居、又居なければならなかつた爲め、閑かに浮世を樂しむ暇は極めて少なかつた。しかし彼の若い時から政治上の努力は、彼の實は享年四十四歳を一期とすべき長からぬ生涯な

(1) Innocent VIII.



がら、裕にその晩年に酬みられ、少くとも前述のシクストゥスの歿後の八年間幸福な平和を享け、彼をして心静かに好むがまゝにヒューマニズムに耽り、所謂ロレンツォ・イル・マグニフィコ時代を完成して往生を遂げしめた。このヒューマニズムにつきては節を改めて説かう。只だこの時期がメディチ家に取りて如何に芽出度くあつたかは、シクストゥスの時と引きかへて、羅馬と結ばれた親睦さに現はれてゐることを注意しておかう。

まづロレンツォの娘の一人マダレナは法皇の一子フランチェスコ・チボリーに嫁ぎ、長子ピエロはオルシニ家の女を娶つたことである。その上に一つの殊に注意すべき關係が結ばれた。それは次男デ・ゾヴァンニが樞機員に任ぜられたことである。この子當年甫めて十三であつた、餘りに年少であつたが爲め、公の発表は延期され、ロレンツォが既に死の床に悩むで居る一四九二年の早春、當時尙ほ十六歳の小公子はいよいよハイラルキの高位階の徽章である紅帽を戴くために羅馬へと出發した。發するに臨み、ロレ

(1) il Magnifico. (the Magnificent)  
 (2) Madalena.  
 (3) Cibo.

ンツォの喜び一方ならず、愛子を側近く招きて病める父の最後の祝福を與へて之を送つた。かくてこの年法皇朝に現はれた小供上りのカーヂナル・デ・ゾヴァンニこそ二十一年後に聖ピエトロの御位を履んでレオ十世となるべき幸運を荷うて居る。

(1) Cardinal Giovanni de' Medici. (LeoX)



## 第四章

### 千四百年代の隆盛

デイ。

#### メデイチの時代

#### 第十節

##### フロレンスの生活と詩人ロレンツォ

ボツカチオ以後のフロレンスの人生主義ヒューマニズムの發展を大觀するに、これが貢獻者として三つの者が指摘されるべきである、即ちその市民、修道院及び市役所である。

この意味に於ける市民の代表者としてはまづニコロ・デイ・ニコリ(1)（一三六三—一四三七）が光つて居る。彼はその家の富を散じて蒐集に熱中し、居宅を宛ら博物館及び圖書館と化し、後にはコシモ・メデイチの保護を受け、愈々蒐集を完全にし遂に一切をあげてコシモに遺讓しその保護に委すに至つた。コシモよくその遺言を守り、遺産の典籍を利用してサン・マルコ(2)に於て始め

(1) Niccolo de' Niccoli (1363—1437)

(2) San Marco



て公衆圖書館を開き(一四四四)今日のロレンティアン圖書館の基を爲す事を得た。尙ほニコロの晩年の頃に生立ち、メデイチ家の支配時代に名を得た人にヴェスバジアーノ・ダ・ビステイツチあり、亦以て市民を代表するに足る。彼は圖書發行者であつた。多數の寫字生を使ひ、以て多くの寫本を世に提供した。時にはその寫字生の數四十五名に上つたと言はれる。かくてその職業柄、自然當時の名流の人々に接して居たから、平生の見聞はまとめられて「十五世紀名流言行録」の著作となつた。

フロレンスには多くの修道院存し、僧侶の中にも學識高き者少なからず、因つて修道院はフロレンス第二の大學と化すると言ふ有様であつた。

又市役所の事務所はカンチエリリアと呼ばれ、そこにカンチエリエと稱する役人が執務し國際間の外交文書を作成した。之を私は假に國務長官と譯しておかう。この職に任せられたものは凡て拉典文を以て文書を綴り、その修辭は古典の範例に倣ひて堂々たるものであつた。この有名な古典的

(1) Laurentian Library.

(2) Vespasiano da Bisticci. (1421—98)

(3) "Vite d' uomini illustri del Secolo XV."

(4) Cancelleria.

役人の系列には最初にコルツチオ・サルターテイ(一四〇六歿)があり、後にマキアヴェリ(一五二七歿)がある。この間約一世紀以上に互るのであるが、當時フロレンスの市役所カンチエリリアの長官職には歴代相ついで常に人生主義の學者がこれに任じて各自得意の文筆を揮ひて國家の意見を發表し以て國際間に重きをなした。而してフロレンスが外交上に雄飛するにつれて愈々そのカンチエリエの書いた文章の勢力は一層増したわけである。コルツチオ・サルターテイはペトラルカ及びボツカチオの崇拜家であつて文章に長じて居た。フロレンスの敵國たるミラノの君主ジャン・ガレアツォ・ヴィスコンティはサルターテイの文章を畏敬すること甚しく「サルターテイの揮へる一管の筆は、フロレンスの銳兵一千騎が與へる以上の損害を余に與へるものである」と嘆じたと言ふ。

メデイチ家のコシモが學藝の保護者であり、彼がゼミスト・プレエトンのために學藝院アカデミアを設けた事は私が既に述べた所である。彼はその後プラ

(1) Coluccio Salutati.

(2) Macchiavelli. (1466—1527)

(3) Gian Galeazzo Visconti. (1347—1402)



トニズム研究の爲めに、その二大別荘の一たるカレッヂーを開放して學者の學藝院アカデミアに供し、自分もこれに加はつた。又從來から存するプラトリーの譯書の不十分な事を知つて遂に或る一人の醫者の息子の天才を認めて、之を保護養成してこの不備を補はんとした。即ちマルシリオ・フィチノである。コシモはこの青年にフロレンスとカレッヂーとに於て各寓居を給し、一切の世事を抛つて専ら希臘古典の研究に従事せしめ、將來完全なるプラトリー譯述を成さしめんとしたのである。コシモが死に臨んだ時は、フィチノが「デ・スンモ・ポーノ」の翻譯の第一期を完成し得た時であつた。コシモは親しくその死の床にフィチノを招き、その持參した譯文を見て大いに喜んで瞑目した。さればフィチノもコシモの恩を感じ「余に二人の父あり、フィチノ・メデコ(醫師)は余を生み、コシモ・デイ・メデイチは余に生命を與へた」と語つて深く感謝の念を表して居る。

ロレンツォはその祖父コシモ及び父ピエロより主として政治經濟の常識

- (1) Careggi. (4) Ficino Medico.  
 (2) Marsiglio Ficino. (1433—1499)  
 (3) "De Summo Bono."

を受け、母から主に文藝の才を嗣ぎ、政治家たると同時に學藝保護者(メセナ)となり、且つ彼自ら一箇の詩人として人生主義の群星中に一光彩を放つたのである。彼の性質には両面があつた。極めて眞面目なる半面と、頗る華やかなる半面とである。既に述べた如く彼はクラリチエ・オルシニなる羅馬の名族出身の一淑女に於て、よき内助の人を得て居た。彼の家庭は當時の社會にあつては純潔なるものであつた。しかも彼はやはりルネッサンス人であつて常に他の女性との何等かの關係を絶たなかつた。それ等は、或ものは普通の戀愛であり、或ものは純粹なプラトニックな崇拜によるものであつた。かくて彼の一身上の傳記には、時代の象徴として意義あり又興味淺からぬものがある。

私はこのルネッサンス人を考察するの機會に、當時の風俗についてまづ一瞥を下して置かうと思ふ。

ルネッサンスに於ける上流社會では結婚及び性關係は嚴肅なものではな

(1) Mecenas. (Mecenate)



かつた。勿論中には品行方正な模範的な人もありはしたが、大概は多かれ少かれ放恣な風があつた。人生主義者等は精神の自由にとつて結婚は一つの束縛であると考へ、或は少くともこれを無用なりとした。従つて彼等の品行はおのづから自由になつて居た。それで我々の知る有名な藝術家の多くは結婚をして居ないのである。ブルネレスコ、ドナテロ、ボテイチェリ、ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロ等はすべてみなさうであつた。而して他面に於て人生主義者たちは概して私生兒を有ち、宗教の職に従ふものも、實に法皇さへも多くはさうであつて、社會も敢てこの風をも、その産物をも排斥せず、實に私生兒と雖も實力に應じて出世しうるのが當時の風潮であつた。かのアヴィニヨンの法皇の宮廷の腐敗は既にペトラルカを痛嘆せしめたものであるが、十五世紀の羅馬の風俗の墮落は更に一層甚しかつた。私生兒を有する法皇は珍らしくなく、しかしてその多數を有する法皇ほど甥主義ネポティズムの必要も多くなると同時に政治運動の便宜が多くなるわ

けである。吾々はチボ家出身のインノセント八世(一四八四—九二)や、ボルデア家出身のアレキサンデル六世(一四九二—一五〇三)に於てその最好適例を見るのである。又フランス國王チャールス八世の軍がイタリアを遠征するや(一四九四—五)性病は大いに流行し、イタリア人は獨り俗人のみでなく上流の僧侶にまでこの所謂フランス病なるものが傳染した。君主の中でエステ家のアルフォンソ一世や法皇の實子ローマーニア公(2)チエザレ・ボルデア、宗教家では後の法皇ジュリオ二世(一五〇三—一三)たるべき(3)ジュリアノ・デラ・ロヴェレ等はみなこの病にかゝつて居た。さればこそサヴォナローラがアレキザンドルの下にある羅馬を攻撃した説教の中に「品行方正に生活せんと欲する者は何人たりとも、羅馬に行く勿れ、宗教家と交はる勿れ」と言ふ激しい語句さへ用ひられたるなれ。當時修道院の生活も亦最も腐敗したものの一である。僧尼の關係は全く亂れ、僧侶は屢々俗人を誘拐した。それが爲め市では警鐘を打ち鳴らして、市中より修道僧を放逐する事もしばし

(1) Alfonso I of Este.

(2) Cesare Borgia, Duke of Romagna. (1507)

(3) Giuliano della Rovere. (Julio II)



ばあつた程である。ルネッサンス人の紳士の標準は、自由、多様、調和、順應にあつた。バルダツサレ・カステイグリオーネの著書「朝(2)紳(1)」にはこの紳士の理想をよく描き示して居る。これによれば身體と精神との能力のよく均整する事、關心や傾向が可成多様である事、萬事に判断を與へる能力のある事、讀書、畫話、音樂等何にでも相當の才藝を有する事などがそれである。つまり、是等諸徳をかね備へることが當時の紳士の理想とされたのである。一體、ルネッサンス人は中古人に反して一切に開放的である。彼は人間自らを一個の自然物と考へ、この自然物が自然に行ふ事や自然に考へた事を一切そのまゝに自然の事物として打ち明けて話す風がある。これは當時の手紙や物語に於てよく見られる所のものである。しかして自然を尊ぶ事は婦人も決して男子に負けては居なかつた。ロレンツォの母が彼の嫁を選ばんとして羅馬に行き、クラリチェに就て細かに探りこれを視察して夫ピエロに報じた手紙はよくそれを示して居る。即ち

(1) Baldassare Castiglione.  
(2) "Il Cortigiane."

「去る金曜日の午前、私はオルシニ夫人に會つた。その令嬢は年は凡そ十六歳、羅馬風の装をし布を被つて居た。極めて麗はしく、柄も大きく、色も白い。しかし被衣のために思ふ様には見えなかつた。……昨日また嬢を見た。羅馬風の狭い衣服で被衣かきもなく、我々と對話したから、その間に十分に眺める事ができた。嬢は脊丈は頃合に大きく、上に述べた通り色白く、言動きはめて雅びやかである。且つ又頗る溫和しく、吾々の風に馴れるのも早からう。毛髪は房々として豊かであるが、金褐色ブロンズではなく、しかし稍薄赤いやうである。一體羅馬には金褐色ブロンズの髪の娘は餘り見當らない。又彼女の頸は細くて恰好よく、非常に瘠せて、否餘りに纖やかであるといふ方がよい。胸や乳の邊は全く着物に包まれて居たから私には見えなかつたが、恰好はよいやうに思はれた」。

かく何事も見たまゝ、聞いたまゝ、又考へたまゝに表現するのが當時の社會



の流行であつたから、やさしい性の人でありながら、才色、社交、學藝、思想に於て或は時としては實際の活動力に於て大いに優れ、却て男子を驚嘆せしめた人達も少なくなかつた。かの有名なマントワの哲學者であり教育家であつたダ・フェルトレに一人の女弟子チエチリア・ゴンザガといふがあつて、極めて巧妙に希臘語を話した。又フロレンスの國務長官バルトロメオ・スカラの女アレサンドラは希臘、拉典何れに於ても立派なる文章を綴つた。ヴェネチアから、カサンドラ・フェデレと言ふ婦人が出て、その學問は當代無雙と稱せられた。ポリテイアノの如きは彼女をミュージズ、シビラ、ピテイア、アスパジア或はサツフォー等あらゆる古典の尊むべき女性になぞらへて讚歎したほどで、ひろく當時の名士の多數と文通して有名であつた。それで或る時はナポリ女王の招聘を受けたが、ヴェネチアの統領はそれでは國の誇を失ふとの故を以てこれを謝絶した事さへあつた。是等の婦人達の外にも人生主義な女性は枚擧に遑もない程である。又轉じて活動力

- |                       |                                            |
|-----------------------|--------------------------------------------|
| (1) Da Feltre.        | (4) Cassandra Fedele.                      |
| (2) Cecilia Gonzaga.  | (5) Priziano.                              |
| (3) Alessandra Scala. | (6) Muse, Sibylla, Pithia, Aspasia, Sapho. |

に於てすぐれた女性を挙げれば、まづ指をカタリナスフォルツァに屈すべきであらう。彼女はガレアツツオ・マリア・スフォルツァの私生兒であり、フォルリ市のチロラモリアリオの妻となつた。フォルリの叛亂に際して夫の倒れた後を受け、自ら事に當り、計つてその子供達を城中に止まらしめてこれを利用し遂に城と國とを恢復した婦人である。更に眼を一層くだけた方面に向ければ、我々は其處に多數のコルテデアナと呼べる、濃艶な婦人の群れの居るのに氣がつく。殊に羅馬のルネッサンス生活が發展を極めた時最も盛であつた。彼女等の中には世界的に有名な者さへあり、名畫の中に肖像として寫し出されて居る者も少なくない。たとへば羅馬の社交界で持囃された女にインペリアといふのがあつて、その肖像はラファエロのパルナッソスの詩園の中にその肖顔を畫かれて居るが如きはそれである。抑もルネッサンスには淫靡な畫風が盛に起り、最も神聖嚴肅なるべき筈の教會や僧尼の修道院或は是等に屬する殿堂に於てすら、かゝる表現の傾向の濃

- |                               |                 |
|-------------------------------|-----------------|
| (1) Caterina Sforza.          | (4) Cortegiana. |
| (2) Galeazzo Maria Sforza.    | (5) Imperia.    |
| (3) Giralamo Riario of Forli. | (6) Parnassos.  |



厚なるのが見受けられる。しかしそれには高尚な修飾や巧妙な方法が用ひられた。それは古典からであつた。即ち古代世界の神話を利用して淫猥を美化したのである。それ故に同一の作品も見方によつては確かに美しき名畫であるが、他の見方を以てすれば一種の淫畫に外ならないものが少なくなかつたのである。

かく一般の風俗を見ておいて、私は吾々の主人公ロレンツォのルネッサンス生活に立ち返つて見る。抑もこの天才を年若くして早くも裕に一個の情の詩人に仕立てた動機の一つはルクレティアと呼ぶ同じき名の二人の婦人の愛であつた。その一人はルクレティア・ゴンディ夫人である、彼女はその夫の旅行中の二年半の間よく空閑を守つた。年齢尙ほ未だ二十歳に足らぬロレンツォは當時の婦人に對する義侠心を表明する風習に倣つて、このルクレティアに服従を捧げ、それを表彰すべく彼女のために一大舞踏會を催したのであつた。他の一人はルクレティア・ドナティと言ふ。時は一四六

(1) Lucretia Gondi.  
(2) Lucretia Donati.

七年、或る家の騎藝競技會(1)トルナメントに招待された席上で落合ふたとき、この淑女に向ひ「おん身の手持てる葦の花束を賜はれかし。さらば余はおん身のために今日のこの催しと同じ騎藝競技會を催さん。」とて、その花束を貰ひ受けることが出来た。しかしてこの約束を果すべく翌々年の春二月初、ピアッツァ・サンタ・クロッチェに於て盛大な騎藝競技會を開いたのである。その模様は詩に謳はれ(3)ルカ・プルチの「ロレンツォ・デイ・メディチの騎藝競技會」と題とする詩記録にも傳へられて居る。一體、伊太利の演武會或は競技會は嶺北のもの趣を異にし、試合を行ふ者の武勇や技倆の競争よりも、寧ろ觀衆の娛樂を主要目的として居た。従つてこの時の競技會にもロレンツォ兄弟を首とし多數のフロレンス市民の青年が參加し、きはめて華麗なる行列を練つて會場へ乗り込んだのであつた。就中、メディチ兄弟の服装は何れも華美絢爛を極め、人目を驚かせた。即ち、ロレンツォの跨がるはナポリ王フェランテから贈られたシチリアの名馬、眞珠を繡るつ

(1) Giostra. (tournament)  
(2) Piazza Santa Croce.  
(3) Luca Pulci: "La Giostra del Lorenzo de' Medici."  
(4) Ferrante.



けた紅白の天鵞絨の鞍衣を着けて居る。彼の帽子も天鵞絨で作られ、それに多くの輝く眞珠があしらはれ、上に金絲つむぎの羽毛三本を立て、この羽毛にも多くのルビー、ダイヤモンドを鏤め、その中央には價五百デユカの眞珠が光つて居る。手に携へた盾にも、その名をイル・リープロと呼ばれる價格二千デユカを越えるダイヤモンドが輝いて居る。着衣は半鎧である。その肩章は紅白の絹もて一文字に附けられ、その上に十字に交叉した一つの衿飾スカフが垂れて居る。この衿飾の上には薔薇と厚い眞珠とで文字が繡つてあり「時こそ來れ」と鮮かに讀まれる。ロレンツォ自身が後にこの競技會に就いて記する所によれば「この競技會のため余は約一萬グルデン(3)を費した。余は弱年、未熟であつたに拘らず、試合の結果一等賞を與へられ、一個の兜を授けられた、これは銀を浮き出しにし、上には軍神マルスを戴いたものである」と言ふ。この時にロレンツォは既に未來の妻たるべきクラリチエとの約婚、否、代理結婚さへも済んで居た時であつたから、この競技會

(1) "Il Libro."  
 (2) "Le temps revilent."  
 (3) Guelden.

成功の報に對しクラリチエから祝賀の手紙がロレンツォに送られて居る。かゝる競技會を始とし、その他、これに類する武戲や祝典は、當時の詩人墨客が争つて謳ふ所であり、従つてこれを催したロレンツォ自身が詩人としての感情を養ひ、これを發表する機會を作る事になつた。かくして彼の短詩ソネットや唱カンツォネール歌が出来たのである。

詩人としてロレンツォの偉大は彼の感情の高潔と詩才の豊富とによつて自ら率先してよくフロレンスの民衆を制して野卑亂暴や嚴酷極端に馳せしめなかつた點にある。彼の詩は品位あり古典的で宗教的で晴れやかで人生的なものであつて、これによつて市民の心を和げ民衆をして相與に踊り樂みて而も亂に至らしめなかつた。彼は音樂を奨励した。彼みづから熱心にカルネヴァルの祭に参加し、親友ポリチアノと共に民衆に藝術的精神を吹きこみ、この祭を古代の祝典に倣ひて美化したから、市民舉つて響の聲に應ずるが如くに起つてフロレンスの祭禮をアテーネのそれの如くにした。

(1) Canzoniere.



乙女の歌に「彼女の白妙の衣の上に、輝くみぐしは流れたり、雪つもりしく高根の峰に、眞晝の陽のこがねの光をこぼすがごと」<sup>パツカス</sup>。又た酒神の凱旋歌に「乙女うるはし、戀人うれし。長へにしろしめせ、バツカスの御世を。踊れやうたへ輝く日の間、こよなき快樂に迎へよ愛を、來ん時をな恐れそ、乙女うるはし、戀人うれし。何思ふべき今日より先きを」の如くであつて、之を中古の民謡の克己嚴肅にして禁慾的なるに比べ、またロレンツォの死後一時起るべき反動期に於てサヴォナロラの謳はしめた舊約物語的な厭世的恐怖的な宗教歌に較べて全然選を異にして居る。思ふにロレンツォの詩は君子の禮樂を以て國を治むるの數なるべし。

この頃の生活の富裕、繁昌さは、宛然ヴェネチア對フロレンスの競争時代の如くであつた。一四七二年に數名のヴェネチア人が一箇の冊子を作成しロレンツォ等に與へて、その内でフロレンスを貶し自分の國自慢をした事があつた。これに對してフロレンス人ベネデット・デイは「年代記」<sup>クロネカ</sup>を著

(1) Benedetto Dei.  
(2) Cronaca.

して應酬した。このベネデットはフロレンス舊家の出身、國事及び通商の經驗に富み、曾て東方を旅行した事もあつた。この著によると、こゝにも亦た當時の統計と見らるべきものがある。今、これを掲げて大勢をトシて見よう。

羊毛商店	二七〇軒	支店	コンスタンチノール、 <sup>(1)</sup> ペラ、 <sup>(2)</sup> アドリア
絹 商店	八三軒		ノーブル、 <sup>(3)</sup> ブルーサ、及びトルコ全土
銀 行	八三軒		
織物商店	三二軒		
冶金店	八四軒		
石材及び大理石店	五四軒		
寶石商店	四四軒		
金、銀及び蠟の細工店	三〇軒		

(1) Pera.  
(2) Adrianople.  
(3) Brussa.



藥劑師及び藥店 六六軒

牛肉店 七〇軒

鳥獸肉店

八軒これらの店でサン・デョヴァンニの名醸白葡萄酒が賣られる。金絲紡織はピザの征服者たるデノ・カポーニの手により一四二二年にフロレンスに移されて行はるゝやうになつた。

一四六九年に於けるフロレンスの商會の外國支店數

フランス國內に 二四

ナポリ國內に 三七

トルコ國內に 五〇以上、而してこのトルコ關係はヴェネチアの方に悪くなつて行くと反比例にフロレンスの方に善くなつて行く傾向がある。

二割以上の利子は一四二〇年に禁止された。

(以上一四七二年に調製)

當時宴會は頻々と行はれ、しかも贅澤を極めたものであつたが、日常生活は概ね質素であつた。ロレンツォの家庭も亦質實であり、彼の羅馬の愛婿<sup>(1)</sup>フランチェシエツト・チボの聳入(一四八八年六月)に當つても極めて質素にとり行はれたので有名である。

フロレンスの郊外は野菜、果實のよい耕作が行はれ、その他の園藝もよく改良され、收穫も多かつた。そして是等のものゝ經營の中心は、市の附近に散在する所の別墅<sup>(2)</sup>であつた。今日も尚、アルノ河の流域方面、或はフイエゾーレ<sup>(3)</sup>方面、或は赤葡萄酒で有名なキアンティ<sup>(4)</sup>方面等に歴々その跡を見る事ができる。メデイチ家の別墅<sup>(5)</sup>はコシモの時にフイエゾーレとカレツチとにあり、カレツチの方が好んで用ひられて居た。ロレンツォは是等と並べて新たにボヂオ・アカヂャノ<sup>(6)</sup>を營み、これを好んで用ひた。この別墅<sup>(7)</sup>はピストア街道<sup>(8)</sup>オンブローネの流れるあたり、綠蔭深く土地豊かなる所にある。オンブローネはアルノに注ぐ支流である。ロレンツォの詩<sup>(9)</sup>「オンブ

(1) Franceschett Cibo.	(4) Fiesole.	(7) Pistoia.
(2) Villa.	(5) Chianti.	(8) Ombrone.
(3) Arno.	(6) Poggio a Cajano.	(9) "Ombra."



ラ」は此處に田園生活を唱つたものである。オンブラとは別墅ヴィラを通るオンブローネが抱く川中島の名で、ロレンツォはこれを女精ニッパに見立て、詠つて居るのである。

かくの如くしてフロレンス市民の生活は市中と別墅ヴィラとの二つに分れる事となつた。即ち客あれば別墅ヴィラに招じ、その土地から出来る産物を以て饗應し、且つ當時ルネッサンスの精神上娛樂となつて居る音楽や即興詩等ロワイヤルを以て慰めるのである。それ故にフロレンスの社交は快活であり、同時に知識的であつた。法皇、國王、君主、詩人、學者、藝術家等の各方面の名士は數多くかゝる別墅ヴィラを訪れたのであつた。勿論別墅生活にも暗黒面がなかつたわけではない。就中、賭博の如きは頻りに行はれた。しかも尙ほこのフロレンスの生活は、これを十五世紀末及び十六世紀初に於ける羅馬の社會のそれと比べれば、腐敗の程度はさほど甚しいものでなかつたと言へるのである。

(9) improviso.

ロレンツォの精神的發展を促したものは實に彼の周圍を取り巻いて居た師友である。彼の家庭教師は人生主義者たるウルビノのゲンティレ・デイ・ベッキであつた。又その外にレオン・バタイスタ・アルベルティ(1)或はクリストフ・ロランデイノ(2)、ルイヂ・ブルチ(3)、マルシリオ・ファイチノ(4)、アンヂェロ・ポリテイ(5)、ピコ・デラ・ミランドラ等がある。アルベルティ博學多才にして一切の學藝技術に通達した人で、この人物相應に「(6)世界人」と題する名著あり。ランデイノは「カムドゥル」の談論を出して有名である。ブルチは既に述べたかの騎藝競技會(7)の詩を唱つた詩人であり、ポリチアノはロレンツォの親友であり、矢張り「騎藝競技會」なる詩篇があつてロレンツォの弟ヂュリアノのそれに就いて謳つて居る。この詩は未完であるが、畫家ポテイチェリ(8)の作品に暗示を與へたものとして名高い。ファイチノ及びミランドラに就いては、私は更にやゝ詳しくこれを説かねばならないから、後に述べる。

以上擧げた人々は凡てメデイチ家の光明であり、ロレンツォの精神を高

(1) Gentile de, Becchi of Urbino.  
 (2) Leon Battista Alberti.(1405-72)  
 (3) Cristoforo Landino.(1424-1504)  
 (4) Luigi Pulci. (1432-87)  
 (5) Marsilio Ficino. (1433-99)  
 (6) Angelo Poliziano. (1454-94)  
 (7) Pico della Mirandola.(1463-94)  
 (8) "l'uomo universale."  
 (9) "Disputationes Camuldulenses."  
 (10) Botticelli. (1444-1510)



めるのに與つて力のあつた人々であるが、就中フィチノによるプラトニズムの感化は最も著しいものであつて、ロレンツォはこれにより若い時から早く哲學的思索に傾いたのである。彼が長じて後常に語つて「プラト一の哲學の知識なくては善良なる市民たり得ず、又基督教の奧義も理解し難い」と言つたのはこの邊の消息を語るものである。彼は屢、別墅ヴィラに到りそこで師友賓客を集めて學藝の會談を開くか、或はペトラルカのウォークリューズに於けるが如く靜かに默想に耽るのが常であつた。一方又彼の時代は有名な美術家がフロレンスに於て鬱として輩出した時代である。かくの如くしてルネッサンスの大家にして、親しくロレンツォに保護されるか、さうでなくとも多少ともロレンツォの時代と何等かの關係あつてその恩恵に浴しないものはないのである。

ロレンツォは時人から尊ばれて「偉大」と稱せられた。おもふに世界の學藝史上に於けるロレンツォの位置は、彼が十五世紀に於ける一流の詩人

(1) Il Magnifico.

であり、またその有力な學藝保護者であることにあつた。これを古典の人物に比べれば、或る意味に於て一種のヴァイルヅルであり、同時に確實に一個のメセナスであつたのである。然り而してこの學藝の寄與者が同時に當時第一流の文化的共和政治の事實上の元首であつたから、彼は更に一個のアウグストゥスといふ儼めしい冠をも加へうるわけであつた。「偉大」の稱は偶然でない。

ロレンツォが晩年に惱まされたのは痛風であつた。一四九二年春には病漸く篤く、その子デョヴァンニを樞機員カーディナルとして羅馬へ送り出した後十日目に、彼は平生から愛するカレッツヂの別墅ヴィラに退き、此處で臨終の用意をした。彼はこゝでその親友の中、ポリチアノとピコの二人を招いて訣別し、之に告げて「余は未だ圖書館を完成し得ざるを憾とす」といふ、それはビブリオテカ・ロレンティアーナのことである。或る時は同じ死の床で説教者サヴォナローラと親しく懇談した。これは當時既にフロレンスで説教してルネッサ

(1) Savonarola.



ンスから生じた弊害たる放逸主義(1)に痛棒を加へつゝあるドミニカン派の律僧である。この會見に就いては、ロレンツォから説教者を招いたともいはれ、否、サヴォナローラ自らがロレンツォを訪れたともいはれる、何れとも分明し難い。而して會談の内容も一切祕密であつた。それがため種々紛たる臆説が行はれた。ともかく、この會見後六週日してポリティアノが記した所によれば、臨終の人ロレンツォはサヴォナローラに懺悔し、その赦と祈禱を受け、説教者の立去つた後間もなく安らかに永眠したと言はれる。恐らくこれは事實に近いであらう。

### 第十一節 フラトニズム

かくロレンツォ時代を概瞥して來た私は同時代の思想について一層突つ込むでみるべき機會に達した。それで直ちに當代の最も進歩した思想は如何なるものであつたかといふ問題に入つてみたい。この意味に於て、まづ

(1) Libertinism.  
(2) Dominican Order.

フラトニズムの流風につき、次にその代表者としてかのフィチノ及びピコ・デラ・ミランダにつきてこゝで説かうと思ふ。

上に名だけ擧げておいたランデイノの名著(1)「ディスプタチオーネス・カムルドレンセス」「カムルドルの談論」は本問題のいはゞ先驅を成すべきものである。この書中の主人公は當時既に老熟した碩學として、多才多藝の聞えの高いアルベルテイであつて之を中心として多くの學者が一四六八年の夏アペナイン山中カムルドル派の修道院に避暑會合して談論を闘はしたのが、この書の骨子である。討論の問題は實行生活と觀念生活と何れがよいかについてであつた。對話は四日間に互つた。若い、まだ二十歳にもならぬロレンツォも會衆の中に加はつて居た。年少氣鋭な彼は自然積極的な生活、即ち行の生活主張の急先鋒であつた。アルベルテイは之を制して徐ろに觀念生活を奨めた。この討論は如何になつたか。最後の日にアルベルテイは彼の觀念論をまとめて説いた、而して會衆の多數が之に賛成を表した。こ

(1) "Disputationes Camuldulenses."



れに由つて之を觀れば當時プラトニズムの感化の既に強大なることが知られる。かのフィチノは實にこの時の會衆の一人としてこの席に連つて居たのである。

私はこの機會に於て當時のプラトニズムに就いて一瞥して見よう。中世に盛であつた、かのスコラチズムの考へ方は、ペトラルカが極めて明白に排斥して以來、その抽象的概念哲學の無味乾燥さ、重苦しさのために、人生主義者から嫌はれ、これに代つて歓迎されたのはプラトニズム及び新プラトニズムであつた。これは高尚な觀念に満たされた事、その人生を美はしく生かさせた事、その表現の美しい事等によつて、まさしく人生主義者達の傾向に投じた。彼等がかくしてプラトニズムに依頼したのは、それによつて人生から縁遠い抽象的思索體系を作らんがためではなくて、人間及び人間の精神的、藝術的な慾求に對して考察する事を主要な目的としたのであつた。かゝる目的をもつて彼等は幾多の對話や論文を著はしたから、

その結果ルネッサンスは何等の哲學體系を作り得べくもなく、たゞ多數の人物と作品とが雜然と輩出したばかりであつた。而して當時の傾向として、人間を單に論理的遊戯を行ひ教理を作り出す機械的装置とは考へず、多方面に關係を有する本體と見、且つ是等の關心は凡て、努めて高尚にする事に集中するものであると考へた。かくてこの傾向の思想家は、中古人の如く人間を或る一部分に局限された狭きものと見る事に反對し、尙ほ一層廣い見地に立ち、多様な趣味を持ち得るものとし、かゝる全人生を一箇の藝術品として形成し上げんとする慾求を有して居た。それ故に彼等はプラト一の氣高い觀照や新プラトニズム派の神祕的な構想を喜び、是等の古代の哲學者は人間の品位を認識するものであるとして之を崇敬した。されば彼等、少くともその或る一部の人々の如きはプラト一を殆んど神の如く宗教的に尊ぶ様になつた。フロレンスでも毎年十一月七日をプラト一の誕生及び寂滅の日として祭典を行つた。フィチノの如きも信心深い基督教信者



であつたに拘らず、プラトリーの像を神像の如くに禮拜し、ポリテイアノもプラトリーを、一切哲學者中の父、神の如き衆智の創立者、この世に於ける眞の宣託者であると崇めた。しからばプラトニズムと基督教との關係は如何であつたらうか。既述の如くゼミストス・プレートンはプラトニズムを基督教以上に高く考へて、これを説いたが、人生主義者等はこれに反してプラトニズムを基督教の先驅者と考へ、最も基督教をより深く究明把握するに貢献するものであると説くのである。かの十五世紀の半ばに活動した大プラトニカーと言はれたニコラウス・フォン・クレーザの如き又た等しく有名である同時代の希臘人ベッサリオンの如きは皆かゝる説を持して居たのであつた。

偕、私は再びかのカムルドゥル修道院の討論會の會衆中に交つて居たフイチノの所に歸らねばならない。彼當時齡三十四歳、未だこの論議の中心人物とはなり得なかつたが、その後漸次年を経るに従ひ、その哲學的思想

- (1) Platoniker.  
 (2) Nicolaus von Cusa. (1401—64)  
 (3) Bessarion.



ノチイフ・オリシルマ



リエグアキマ



コスレナルマ



は完成に近づいて行つたのである。彼四十歳となるや宗教の籍に入り、説教壇に立つ事となつた。彼は、その人が善良である限りは地上に於て説教者ほど高尚な職はないと確信して居り、又プラトニズムが基督教と一致するのを喜び神に感謝して居た。彼の考によれば、宗教と哲學とは姉妹の如く、眞の哲學は純な宗教に他ならない、神の信仰は最高であつて人間の知識よりも高いのであるが、しかし理性を以て事物を證明せられたいと希ふ要求に對して、神はプラトニズムを攝理してこの要求を充たさうとして居る。即ちプラトニズムによつて基督教の信仰に導くべき様にしたのでと答へるのである。フィチノはゼミストスとは異なり、プラトニズムを基督教に於て高まらしめようと努力したのであるが、而もその結果却て實際的な基督教が無視され蹂躪される危険のある事を豫感しては居なかつた様である。思ふに、彼は世上の教會に對しては、あくまでも信心深く、その禮拜を怠らなかつたが、その思想に於ては、一方基督教と、他方當時人生主義



により力強く勃興して來た古代異教との中間に位置すべきである。そしてこれは實に當時代の風潮であつた。それ故に彼は頗る占星學にも傾き、神祕的となり、一四八九年にはフィチノは魔法使であるとして法皇インノセント八世に訴へられた事さへあつた。彼は自分の實際生活を律するに、この基督教とプラトニズムとの合一觀を以て基本とした。之によれば政治の精神と神の法との一致は最も本質的な必然的なことである。この條件が満さるゝ限りは、如何なる政體でも優良であると結論し、此處に一世紀半以前の、かのダンテの「モナルキア論」を想起し、これに共鳴し、當時忘れ勝であつたこの論文をイタリア文に移して、社會の用に供せしめたのである。因に言ふ、ダンテはこの千四百年代カトロチエントに於て大いに復活し、その「神曲」は一四八一年フロレンスに於てランデイノの註釋附出版が出る事となつた。そしてこの出版は實に「神曲」の劃時的出版であつた。抑も印刷術は一四六五年以來イタリアに移入されたものであるが、最初は餘り喜ばれず却つて膽

(1) Innocent VIII

寫本が尙ほ愛せられて居た。その後二三十年経つて始めて印刷本が世に迎へられるやうになつて、黑白の技術はいよゝゝその勢力を發揮し、茲にダンテの流行を促がす事となつたわけである。フロレンス市がこの追放客死の詩人を追慕して市民權に復し、洗禮堂にその月桂冠像を安置するに至つたのも、この十五世紀の後半、ロレンツォの時代に於てであつた。

ピコ・デラ・ミランドラがフロレンスに來つて、初めてメデイチ家に現はれたのはロレンツォの晩年、一四八四年、年漸く二十一歳の時であつた。彼は北伊のミランドラ伯爵家に生れ、容姿秀麗、才氣煥發、忽ちアルノー河畔交際場裡の寵兒となつた。ポルティエアノ曾てこの人物の心身共に優秀なるのを讚して「天はあらゆる賜物をこの人に降した」と語つた。彼は當時、尙ほ年若かつたから、社交を楽しみ、浪漫的な冒險も試み、或は青年客氣にまかせて論理の遊戯を挑んだ様な事もあつた。たとへば一四八六年、羅馬に於て九百箇條の論題テマを發表して論戰を挑んだ如き就中有名である。こ



の時羅馬の神學者等は正面より討論する能はず、裏面から密かに策を弄し、法皇インノセント八世をしてピコピコの論題を異端なりと宣せしめ、ピコはこれが爲め一時迫害を蒙つた程であつた。しかし二十七歳以後は早くも清淨な眞面目な隠者の如き生活に入り、短かい一生ではあつたが、その使命を全うすべき哲學研究に従つたのである。彼は始め十四歳の時ボローニアに學び、次にパリに遊び、到る處博聞強記人に絶し一度耳に入つた事は忘れる事なしとて名聲を博した程であつた。而して一度哲學の研究に従ふや、心を専らにしてプラトニズムを究めた。この研究中に彼は學問の源泉が一方は東方にある事を曉り、その學問にいそしみ、一人のユダヤ人から猶太教ユダヤ教の淵叢たる猶太傳説カバラを購ひ、これを讀んで頗る自ら發明する所多く、希臘の學問も、基督教の信仰も凡てこの猶太傳説を以て説明し得べしとなし、遂に次の如き考を得るに至つた。即ち凡そ哲學は認識に對するやまれざる要求から眞理を求めらるもので此處に哲學の大きな價值が現はれる。神學は

(1) Cabala.

我々に前提に於て一箇の信仰を持ち來らさんと欲する。その信仰とは、哲學的思索が欣求する所の眞理は最初から眞理の表象に體現されて居る、と信じる事である。しかしながら人間が神と合一したいと言ふこの憧憬の目的地には、たゞ宗教なるものがあつて内的體驗と内的知見との助力を以てこれに到達せしむるのみである。然して彼はこの考を次の如く要約してその友人アルド・マヌチオアルド・マヌチオに與へた手紙の中に記して居る。「哲學は眞理を求め、神學はこれを見出す、しかして宗教はこれを有ち得る。」*Philosophia veritatem quaerit, theologia invenit, religio possidet.*」と。又更に彼の宗教哲學的の著書「ヘプタプルス」に於ては次の如く説いて居る。即ち「自然が神の恩寵の何よりの始まりである如く、哲學も亦宗教の始まりであると思はれる。それ故に苟くも純粹の哲學である限り、吾々を宗教から背かしめ得るが如き哲學は存在しない。」と。彼は宗教が漸次發展して行つた結果、種々の相異なる形となるのを見て、是等相互の間を調和して一箇の諧調に持ち來らせ

(1) Aldo Manucio.  
(2) Heptaplus.



ようと欲した。これは彼以前に樞機員ニコラウス・クザヌスが考へた如く、個々の宗教の形の上に一箇の或るより高いものが立つ筈であると考へたからである。彼は猶太傳說即ちユダヤの神祕の教の中に、基督教の三位一體の祕密も、神の人格化も、人間の原罪も、存在するのを見てこれに驚嘆した。彼はモーゼも、プラトリーも、基督も、凡て密接に相近似するものとした。かくてピコは猶太傳說をも承認した故に東方流行の魔術を斥ける事は出来なかつたが、しかもその卓拔な常識により、占星學をば斷然排斥し、以て人間の理性の權威を救ふ事ができた。占星術は當時、尙ほ多くの人生主義者等の信する所で、專制主を始め、法皇と雖も大事が起れば屢々これに問ふて決したものであつた。かのフィチノもこれを免かれ得なかつたが、ピコのみはさうでない、彼は毅然として占星の背理を指摘し、この術が人間を一切の不道德や不幸に導くものであるとて、これを攻撃した。曰く「占星學者は、彼等自身の言ふ所によれば、地から天を仰ぎ見るとの事である

(1) Cardinal Nicolaus Cusanus.

が、實は常に眼を天から地に向けて居るものである。苟も肉眼で見得る物の、その背後に潜んだ不可見のものを認知しようとするには、これを成し遂げうるのは占星術でない、たゞ精神的の認識のみである」と。而してピコ自らの確信によれば「今日の哲學體系が相互に異なるのは、單に人間に尤も主要なるものを解釋する事の相異から來るのみである。我々の思索が絶對的に服従しなければならぬ最高のものは、活動能力を具へた愛である。」と言ふにあつた。さればピコにとつては人間の自己認識が一切の思索と行爲との中心點であつた。これは彼の「人間の神性に關する講演」に於て見る事ができる。これによつて彼は人間の品格とその權威とを力説高調した。人間は世界の中心にあり、隨つて自由意志、善惡、眞僞、美醜に對する責任は凡て人間そのものにある、神は人間をかくの如くに創造したのである、と言ふのが彼の説く所であつた。このピコが指し示した思索の傾向は、若し順調に發展したならば、眞の學問に幸する所極めて大なるべき筈

(1) Oration on the Dignity of Man.



であつたが、惜しむべし、ルネッサンスの將來は人生主義者の不道德、專制主の貪慾、就中教會改革の反動のために妨害されて遂にこの輝やかしい希望の光は終に發揚されずに蔽ひかくさるべきである。ピコ享年僅かに三十一歳、實に惜むべき天才であつた。ピコの肖像はウフイチ館に残つて居る。又ニコロ・フロレンティノの刻むだ若きピコを現はした金屬牌も今日残つて居る。その裏に三つのグラティアを現はし、周圍に美、愛、快樂と書いてある。

### 第十二節 藝術

私は千三百年代については學問上の事のみを述べて、その美術にまで説き及ぼさなかつた。それは當事の美術の進歩が學問のそれに比して遙かに遅れて居た故である。しかるに千四百年代に至つて、美術は俄然頭角を現はし來つた。即ち茲に一節を設けてこれに充てる所以である。

- (1) Counterreformation. (4) Pulchritudo, Amor, Voluptas.  
 (2) Uffici.  
 (3) Nicolo Frolentino.

偕、中古の美術は宗教と結合して一つとなつて居た。否、寧ろ學問に於けるスコラティシズムと同様に宗教の御用を務めると言ふ有様であつた。かくして中古の美術は、たゞ人間の内界に存する盲目的な信仰満足に使はれるに止まつた。この要求は建築及び彫刻に現はれ、繪畫はこれ等の下に從屬的位置におかれた。そして最も重んぜられたのは建築であつた。彫刻でさへもこの建築に結びついて粧飾としての用を爲す程度であつた。美術の眼が目覺め、外界の自然に眼を注ぎこれに倣はんとし始めたのは漸く十二世紀頃からであつたが、しかも尙ほ宗教の支配からは脱しきれなかつた。この世紀に於ける建築は羅馬風教會建築に於て卓越してゐたから、これを更により一層廣大崇高なものに改造せんと試がなされるに至つた。即ち、當時漸く勃興し來つた都市はこれらの建築の向上に於て自己の富裕偉大さを表現せうと努力し、その結果、アルプス嶺北にて先づ勃興したのがゴシック式建築である。中にも北方フランスは最も有力なゴシック式建築の發

- (1) Romanic.  
 (2) Gothic.



生地として考へられて居る。かくて十三世紀にはゴシック時代が出現したので、イタリアの教會建築も多かれ少かれこの流風の影響を蒙つた。併したゞ一つの例外を除いては餘り強いゴシック式の姿はイタリアには見られないのである。たゞ一つの例外とはミラノの大寺院<sup>カテドラル</sup>である。同市の支配者ウイスコンテイ家が之を建てんとするに當り、その様式について種々議論が行はれた末、遂にゴシック式と決した。この建築著手は一三八六年で、即ちフロレンスのドーモより九十年ばかり遅れて居る。かくて出来上つたのは、嶺北のものそのまゝの、強い本式のゴシック式で、しかも世界最大のゴシックの一である。このミラノの大寺院を除いては、十三、四世紀のイタリアの教會建築はゴシック式に對して極めて控目で、自ら制限を加へ、この北方風が指圖するまゝにはならず、イタリア固有のものを爲して居る。たとへばフロレンスのドーモを見よ、元來はゴシック式によつて居るが、決してこれに拘泥せず、頗る自由な様式をとり、イタリア風ゴシックの代

表とされて居る。そしてかゝる流風のものがやがて十五世紀に於て一轉してルネッサンス式となるべきであつた。即ち、それはその頃になつては、も早や單に神の在はします所ばかりに苦心するよりも、寧ろ市役所とか宮殿とか、つまり俗人の住宅の發展と古典の建築風の研究とに努める事になつて來たからである。

美術家が自己の作品を自己の個性の發現として自覺しこれに自己の姓名を記して一個人の個性を永遠に残すと言ふ如き、風は、十三世紀までには殆ど見られず、全く十五世紀の頃から始まつた事である。一體、當時までの繪畫や彫刻の現はした姿は凡て固苦しいもので、多くビザンツ風の影響が認められる。チオットーの師で近代繪畫の祖と稱せられるチマブエ<sup>(1)</sup>(一二四〇—一三〇二)に於て尙ほ然りである。所がそれがチオットー<sup>(2)</sup>(一二六六—一三三七)になると著しく作者の個性の發現があり、現はされた姿は頗る自然に近くなつて來て居る。チオットーはダンテの友人で、その肖像を描い

(1) Giotto. (Angiolo di Bondone)  
(2) Cimabue. (Giovanni Gualteri)



て居る。このデオットーの流風は長く千三百年代即ち十四世紀を支配し、その感化はたゞに繪畫だけでなく建築彫刻にも及んだ。即ち、建築に於てはアンドレア・ピザノ(一二七〇—一三四九)が出て居る。これはピザから出身したピザ派と稱せらるゝ、美術家の流をうけた人で且つデオットーの高弟でもある。自然の形體と自然の色彩はかくして表現されて來た、しかし裸體は未だ研究されなかつた。昔、羅馬時代の基督教徒は裸體を厭ふ事はなかつたが、中世の教會の時代となつてからは裸體は全く見られなくなり、藝術の表現はすべて一定の硬い姿に固執するやうになつた。それ故デオットーの流儀と雖も且つ姿の變化に乏しい憾みがある。所が十五世紀に入り古典の研究が進むにつれて人體の自然が研究され、その種々な姿、たとへば必ずしも大人に限らず小兒が、對象となり、又宗教的なものに限らず俗なものも、自由に寫される様になつた。十五世紀に於てデオットーの畫風を大成したとも言ふべき宗教畫家フラアンヂェリコは未だ裸體畫そのものを

(1) Andrea Pisano.  
(2) Fra Angelico.

こそ畫かなかつたれ、彼の畫いた人體は極めて自然となり、當代に於ける寫實主義の風潮を示し眞にデオットー大成の名に背かなかつた。(倫敦に現存する彼の作「十字架より卸される基督」には勿論裸體の基督が畫かれて居る。)

然らば千四百年代の美術を開いたのは果して何人であつたらうか。曰く、繪畫に於てマザツチオ、彫刻に於てギベルティ(一三七八—一四五五)建築彫刻に於てブルネレスコ(一三七七—一四四六)である。又かのアルベルティ(一四〇四—一七二)は一切の美術に於ける堪能者であつて、一切に於て盡く中古風を排斥し、専心、古代風のみを崇拜した人で建築に於ても古羅馬風の復活を計つた。フロレンスのバラツツォ・ルツェライ、リミニの聖フランチェスコ、マントヴァの聖アンドレアなどは彼の古典精神を永久に傳へて居る。さればこの點に於て、彼は當にブラマンテの先驅者たるべきである。而してこのルネッサンス式の完成者ブラマンテ(一四四四—一五一四)に至つては

(1) "Kreuzabnahme."  
(2) Masaccio.  
(3) Ghiberti. (1378—1455)

(4) Filippo Brunellesco. (1377—1446)  
(5) Bramante.



かの聖ペトロの再建に當り、在來のものを徹底的に残さなかつたから、彼をブラマンテムを呼ぶよりもむしろ「破壊者」と名づくべしといはれて居る。又ミラノの大病院<sup>オスベダーレ・マッダレ</sup>を建築したアントニオ・フィラレーテ(一四一〇—一四七〇)はその建築に關する著書に於て、一切のゴシックに反對してこれを野蠻なりと排斥し、目のあたり古代建築を見る毎にわれ甦<sup>3</sup>がへれりの感を受けると説いて居るのである。

千四百年代に於ける藝術家の修業は、大體に於て尙ほ親方と徒弟の關係の時代で、美術の氣分よりも工藝の氣分、創作氣分よりも職業氣分の方が強かつた。即ち多くの天才は大抵初め、金細工人の工場に入つて修業したものである。ブルネレスコ、ギベルティ、ルカ・デラ・ロビア、ヴェロキオ、ボッティチェリ等皆さうである。彼等は各々教會堂に用ふる十字架や燭臺、或は祭典、宴會等に用ふる工藝品、時には紋章や看板等のものに至るまでに於て、その模型造りや彫刻、鑄金彩色等を行つたのであつた。それ故に

(1) "Bramantem, seu potius Ruinantem." (4) Luca della Robbia  
 (2) Antonio Filarète. (5) Verrocchio.  
 (3) rinascere. (6) Botticelli. (1444—1510)

當時の美術家達はその技術が一種に限られず多くの種類に互つて居たわけである。千四百年代の中葉頃から漸く美術家氣分が現れて來たが、しかも尙ほその作品は極めて入念に長い年月と多大の勞力を費して仕上げられたものが少なくなかつた。ギベルティがかの有名な洗禮堂の門扉の一に二十一年を費し、第二の扉には更に長い月日を費したのはその例である。まことに「その仕事に神の如き」人々が多かつたのである。

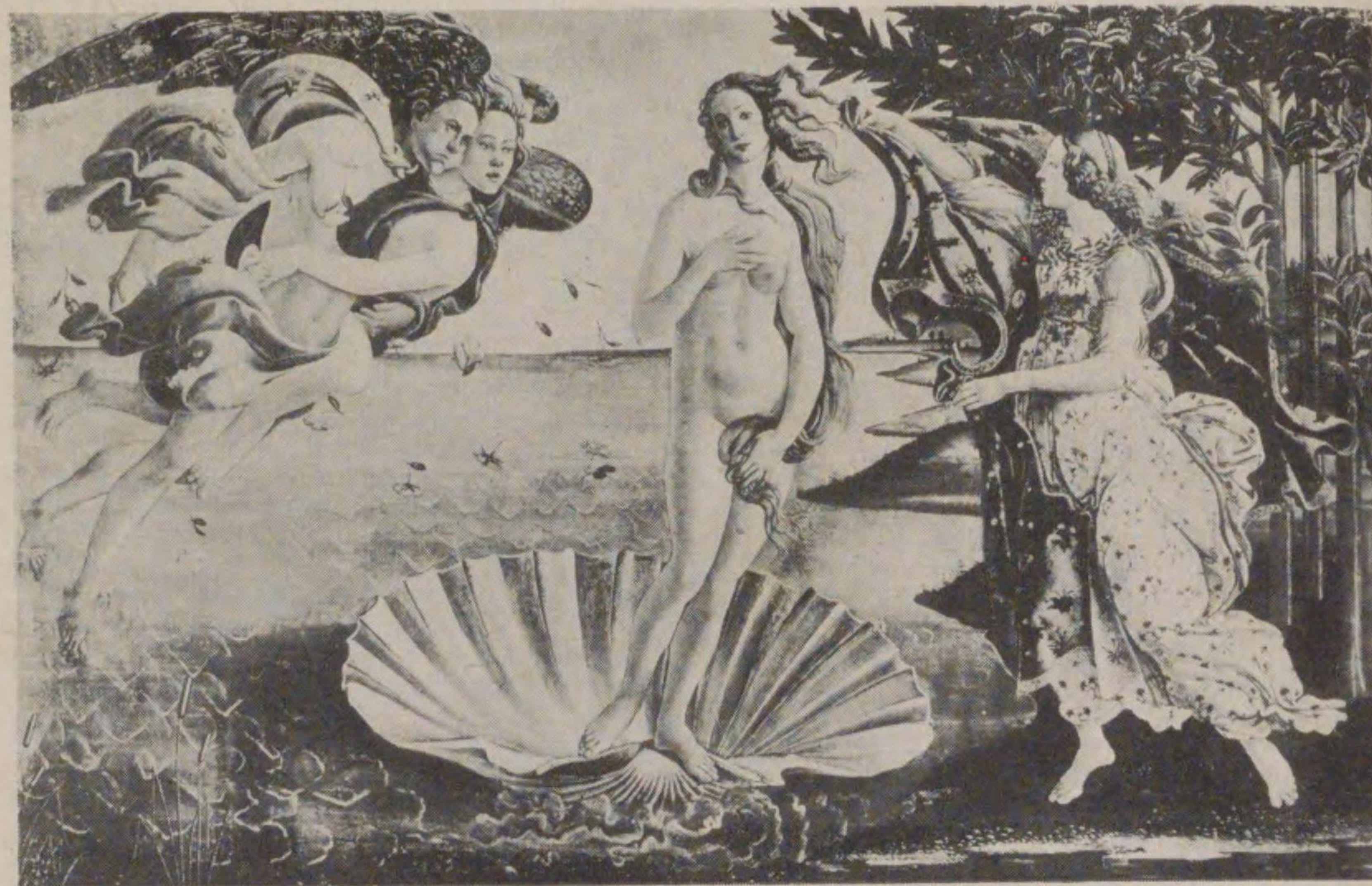
千四百年代の繪畫を一瞥しよう。まづその嚮導者たる位置に立つべきマザッチオにはフロレンスなるカルミノーメの寺院の「アダムとエヴァの追放」及び「基督と税關吏」なる傑作があり、フィエゼレの上人フラ・アンヂエリコ(一三八七—一四五五)にはその人が名稱自證まことに清らかな律僧であつただけに幾多の敬虔な宗教畫が多く、中にもフロレンスではサン・マルコの「受胎告知」の名作がある。次に飛んでボッティチェリ(一四四四—一五一〇)を挙げたい。彼はブラマンテと同時代である。凡そ美術は同時に文學と

(1) "Divino in quella Professione."  
 (2) Carminome.  
 (3) "Annunzazione."



密接な相互關係を有して居る。古典文學の復興、或はダンテの「神曲」やボツカチオの「十日物語」等の國民文學が十五世紀に於て新らしく擡頭して著しく美術家たちを刺戟した。この點から見れば、千四百年代の美術家中、ボツテイチェリは最も文學から精神的感化を受けた者の一人であらう。彼は恐らく同時代人中、最も詩歌にいそしみ、その影響を多分に蒙つた天才の一人であるに違ひない。その繪には技巧手法の外に言ふべからざる精神の目覺めがあり、魂の囁きが聞かれる。彼はダンテの崇拜者であり、その「神曲」を研究して、マリアの昇天や使徒聖者たちを筆にした。又人の頼を受けてボツカチオの物語に材を取つて描いた事もあつた。そして他の美術家同様彼も亦メデイチ家の保護を蒙つた。その傑作「ヴィナスの誕生」は、既にふれておいたことであるが、詩人ポリティアノの詩篇「騎藝競技會」中の佳人シモネッタを謳つて居るところから暗示を受けたものであつた。彼は古代の題目を大規模に描いた最初の畫家である。そして、彼は後羅馬で

(1) Simonetta.



作リエチテッポ スナイヴの誕生



作リエチテッポ 春



も働いて居るが、彼の多くの作品は概ねメデイチ家の隆盛時代に産み出されたもので、「ヴァイナスの誕生」<sup>(1)</sup>「春」<sup>(2)</sup>及び「パラス」<sup>(3)</sup>等が數へられる。彼はその晩年に至つてサヴォナローラの感化を受けて神祕的になり「基督降誕」(倫敦國立畫館藏)が生れる様になつた。

以上極めて簡単にマザツチオ、フラアンヂェリコ、ボツタイチェリの三人に就いて述べたのであるが、この三人を以て千四百年代<sup>カトロチエント</sup>の繪畫、殊にその發展を代表するものと見て大過なからう。有體にいへば十五世紀は如何に進歩してもまだ繪畫の時代でなかつた。當時繪畫は次に述べようとする彫刻に一籌を輸して居たのである。

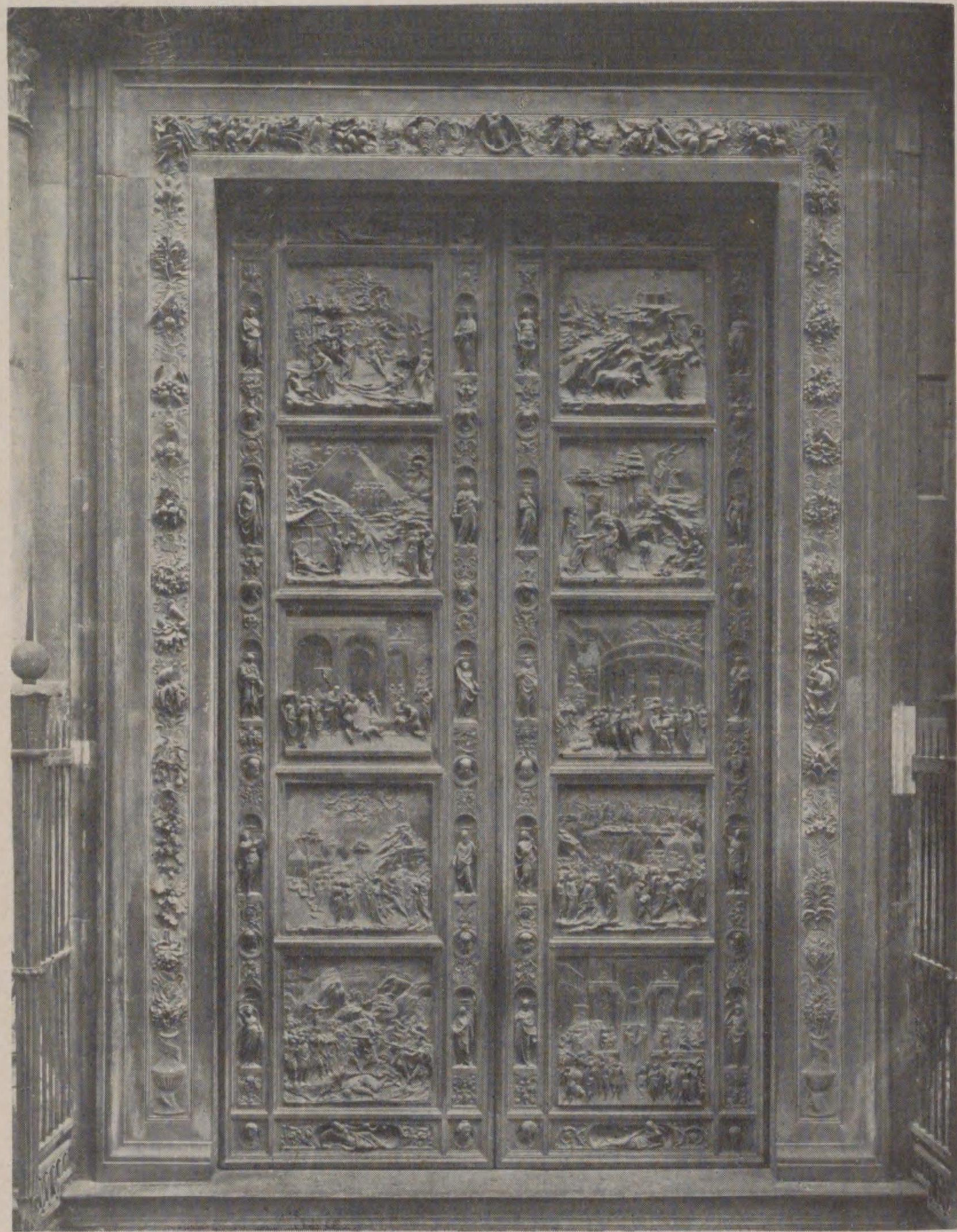
さて彫刻についてある。まづ逸すべからざるはかのフロレンスのサン・デオヴァンニ洗禮堂<sup>バチイステロ</sup>の門扉の製作である。この門扉は南、北、東の三門より成る。最初、南の門は早くもかのアンドレア・ピザノが鑄た青銅の浮彫を以て飾られた。これはデオットーの構圖によるもので、この門扉にはめ

(1) Primavera. (Spring)  
(2) Pallas.  
(3) Natività.



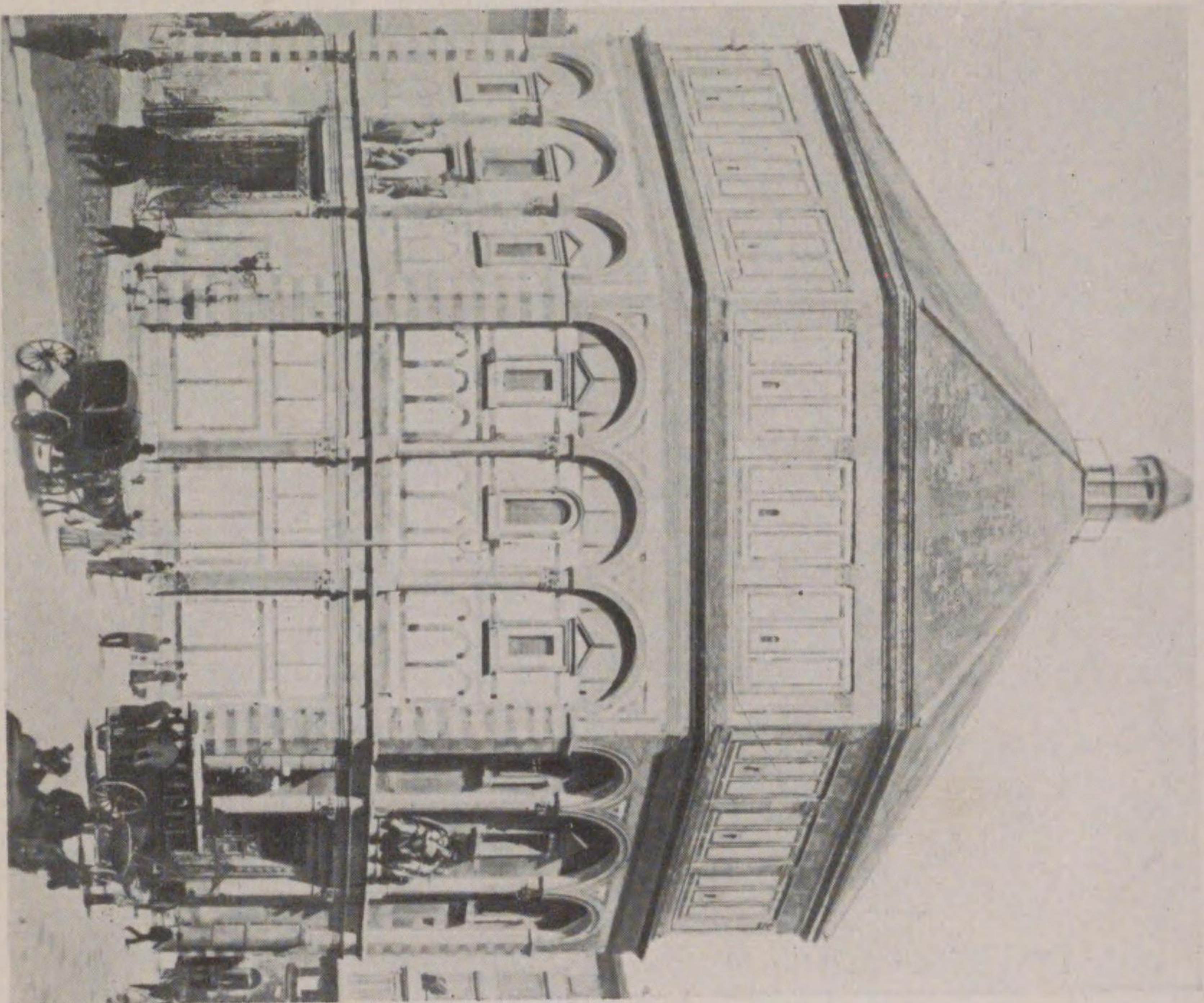
込まれた鏡板の一には洗禮者聖ヨハネ(サン・デオヴァンニ)の生涯が寫してあり、その美しさは彫刻でもあり、又は繪でもあると言ひ得る程である。その後一世紀経つてこれに相對する他の門扉は、その設計は同じくピザーノに依るものなるが、その中にはめ込まれた浮彫畫はギベルティの手によつて作られて彼獨得の美を現はしたものである。次に北側の門のために第二の扉を作る時には懸賞を以て募り、六人の専門家がこれに應じたが、その中にギベルティとブルネレスコとあり、共に他より遙かに拔んで居たが、決定は遂にギベルティに下される事となつたのである。その時の兩者の構圖は今日尙バルデエロの博物館に於てこれを見る事ができる。ギベルティは後、更に残りの東門に對して第三の扉を製作した。これミケランジェロの所謂「天堂の門」と賞め稱へたもので、ギベルティとしては第二番目の門扉である。左右兩扉各五枚の浮彫畫板から成る、すべての畫題材はこれを舊約の物語に取つて居る。一見全體の調子は優秀な繪畫を見るの感じがす

(1) Bargello.

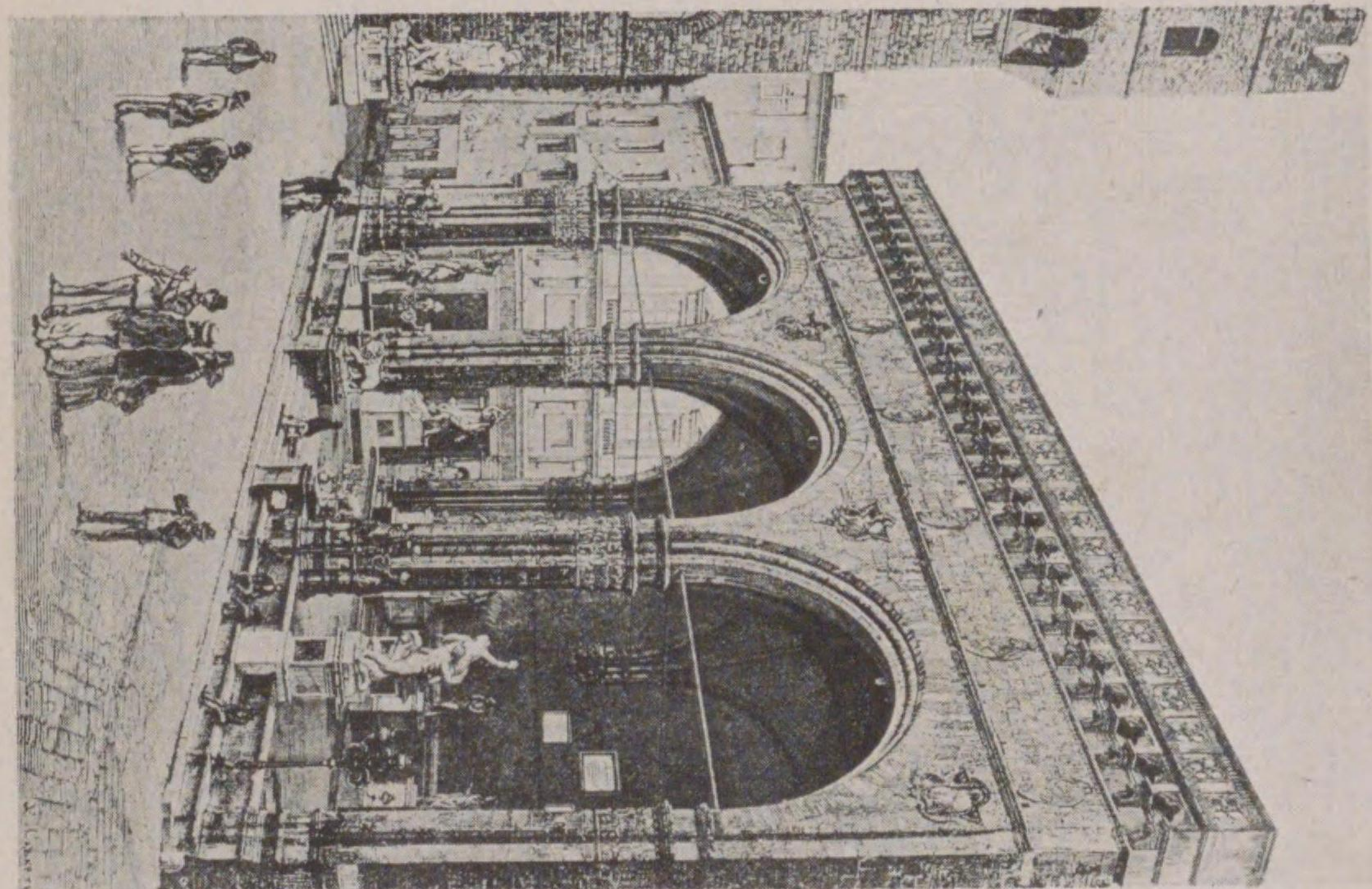


作イテルベギ 扉門東の堂禮洗 スンレロフ





堂議洗のニシテヂキヂンサ



館イチンラ・イテ・アギコロ



る。一枚々々を熟視すれば、そのうちに風景の遠近、人物の風貌、衣裳の襞等において尙ほ更ら一幅の好繪圖を眺めるの感が深い。試みにその中の「ソロモンとシバの女王との會見の圖」を見れば誰しもこれを首肯するであらう。

眼を轉じて建築をみると、十四世紀を通じ十五世紀の初に至るまで尙ほ堂院(2)や庵室等(3)の宗教的建築に集中され、唯それ等が次第に廣大となつて行つたに過ぎなかつた。所が一三七六年にフロレンスの市役所に向き合つた所にロッヂア・デラ・シニョリア(4)（後にロッギア・デイ・ランチイ）が建てられた。これは屋根で覆はれては居るが、廣々と廣場(1)へ向つて開かれた廊建築であつて、市役所及び廣場の美觀をそへるものである。さしあたりの目的はこゝで市の役人が人民に演説を行ふ所である。即ち此處に始めて純然たる俗の新建築が作られたわけである。フロレンス市民は、つまりこれにより共和國の威嚴を示さんとし、その設備頗る大仕掛であつたが、建築の全體の傾

(1) Solomon and Queen of Sheba. (3) Cloister.  
(2) Basilica. (4) Loggia della Signoria. (Loggia de' Lanzi)



向に於ても、或は部分々々の造作に於ても少しの獨創も認められず、從來通りのゴシック式を用ひて居た。而して市の威嚴と誇を示すには寧ろこの建築よりも、既に之より先一二九六年以來建築中であるかの花のサンタ・マリア院ド・モの大バジリカの方が相應しいものであつた。この建築にはカンビオ(1)（二二三二—一三一〇）次にチャットー等以後數世代に互る技術家が力を致して居るもので、様式は依然としてゴシックによつて居た。最初は全體の設計が確定せず、著手以來七十二年經て本堂が大部分出來上るに至つて、始めて全體の設計が成つた（一三六七年）。そしてこの本堂は一三七八年に完成したが、しかもその内陣の出來上つたのは十五世紀になつてからであつた。かくして愈々最後に本堂の上に圓屋根を作ると言ふ問題が起つて來た。そこで、一四一七年から同二十年にかけてこれが懸賞募集を行ひ、その結果當選したのがブルネレスコであつた。彼はさきにかの洗禮堂パテイス・テロの門扉についてギベルティと競争して採用されなかつた人である。この失敗に感憤して

(1) Cambio.

彼は一人の親友ドナテロと相携へて一四〇三年以來羅馬に在り、市中及び郊外カンチニアの古代建築或はその遺跡を踏査、測定、考究して居た。その間、彼をして最も感せしめたのは實に羅馬建築の偉大なる遺物パンテオンであつた、即ち無支柱の大圓蓋建築であつた。かくて一四〇七年に歸國して後は、彼は根本的に建築の研究に没頭する様になつた。元來彼は數學に精通し、重き物品を揚げる機械等を發明した事もあり、又透視の法をも熱心に研究して居た。かくて建築に關するあらゆる方面の研究を行ひ、多年苦心攻究の結果、茲に圓屋根建築の懸賞に應募當選し、いよいよその大任を引き受ける事になつたのである。彼は從來のゴシック式を全く脱して、支柱なしに自由に浮かして圓蓋カンプを作らうと考へたのである。彼は引き受けてから更に多年慘憺たる苦心を重ねた結果、一四三四年漸く完成を見るに至つた。即ちこれは恰も既述のコシモ・デイ・メデイチが遂に政權を固めた初年のことである。今日尙ほ世界の觀光客を驚嘆せしむる花のサンタ・マリア大寺の圓蓋である。

(1) Donatello. (1386—1466)  
(2) Pantheon.  
(3) Cupola.



一四三五年、アルベルテイは「<sup>(1)</sup>繪畫論」を著すや、これをブルネレスコに捧げ、彼をドナテロと二人並び賞揚して曰く「余が長い亡命の後歸郷して見ると、幾多の天才、殊に卿<sup>(2)</sup>フィリッポ及び我等の友ドナテロ等があらゆる名譽ある事物に堪能にして、決して古人にも劣らない一箇の精神に充滿して居るのを知つた。……建築家<sup>(3)</sup>フィリッポは材木の組臺なしに大建築を作つた。この建築の影は當にトスカナの人民を蔽ふべく、これこの世には信じ得ざる、且つ古人も知られなかつた大事業である。」と。この圓蓋建築の成功を出發點として、ブルネレスコ及び彼の一派は更に研究を進めて、一個の中央建築の様式を考案するに至つた。而してこれは後年更に發達してブラマンテ及びミケランジェロの聖ペトロ寺院の圓蓋となるべきものである。かくの如き大成は實にブルネレスコの天才と、古典時代の殘した模範との二大要素の結合に、更に富と思想と趣味とに於て進歩統一したフロレンス文化が加はり、これら三大要素が相協力して作り出したものなので

(1) Trattato della Pittura.  
(2) Filippo.  
(3) Toscana.

(4) Bramante.

ある。ブルネレスコ直後、彼の新様式は一世の風潮を成しミケロッツォーやアルベルテイ等を出し、宗教建築以外に幾多の<sup>(1)</sup>殿館が建造される事となり、茲に復古式様式が完成せらるゝに至るのである。私はこの意味に於て當時建築の天才たちがフロレンスで作り出した優秀なバラツォー四つをあげておく。ブルネレスコのピツティ館、ミケロッツォーのメデイチ館、リカルデイ館、アルベルテイのルチェライ館、クロナカのストロッツチ館。私は此處にアルベルテイがブルネレスコと相並べた他の天才ドナテロに就いて一言しなければならぬ。ドナテロ(一三八六—一四六六)はかのギベルティがその作品に長日月を費して制作したのに對し、極めて多くの、又種々なる作品を殘した人である。又ギベルティが<sup>(3)</sup>自然主義をとりながら尙ほ千三百年代の<sup>(2)</sup>デオットーやピザノの風から脱けきれなかつたのに反し、ドナテロはそれより更に一步を進めて<sup>(3)</sup>自然主義の大成の域にまで踏み込んで居るのである。彼の數多い作品には、各々甚しい差等がある。この差等

(1) Palazzo.  
(2) Renaissance Style.  
(3) Naturalism.



は製作年代に於ても題材に於ても、掴み方に於ても顯著に認められる。

今、私は時代に於て彼の作を四つに區分して各特徴を説明して見よう。

第一期は一四〇五—三三に亙る間、<sup>モニユメンタル</sup>紀念像時代とも言ふべく、今日バルジエロ博物館に在る聖デヨーデの大理石像<sup>(1)</sup>（オルサン・ミケレには青銅像もある。）はこの時代の作である。中古風の武装せるこの聖者が馬に騎し將に發せんとする所、ミケランジェロがこれを見て「進め！」と叫んだとの話を成るほど、肯かしめるものであつて、この聖者特有の青春、純眞、武勇、敢爲の氣が溢れ、全體に尙ほ傳統的の風を存してこれを破らず、しかも一種自然の生命を與へんとして作者が苦心努力したあとをも窺ひ得るものである。第二期は一四三三—四四に亙る間の古典時代とも名づけらるべき時である。この第二期と第一期との間の過渡期とも言ふべき時に彼の「<sup>アスンチア</sup>受胎告知」が創られて居る。今日フロレンスの聖クローチェの寺院にあるもの、尙ほゴシックの風を存するけれども、單純、鈞合、動作等の美に於て古典

(1) Orsan Michele.  
(2) St. Croce.

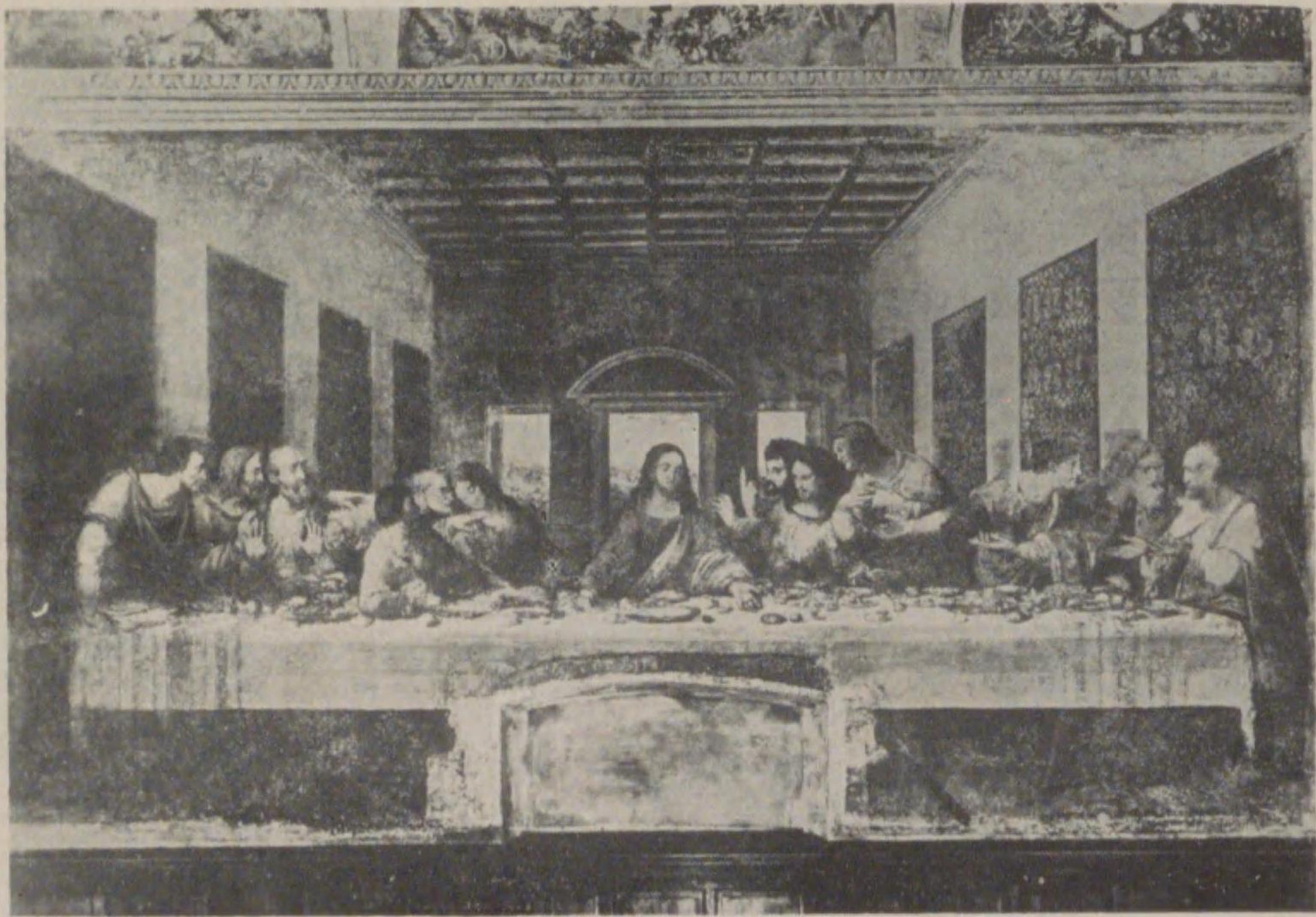
の風が著しく躍動するのを見る。天使の喜ばしき、しかし眞面目な敬虔な風貌、聖母が告知を受けて乙女心に驚き立去らんとし乍らも、熱心なる告知に動かされた容姿等は、從來の作家の、例へばフラ・アンジェリコ等の告知圖に比して餘程の自由さ、自然さが認められるのである。彼は早くから古代研究家であつたが一四三三年の羅馬訪問後は殊に古典風の作品が多い。即ち第二期の古典時代に入つたのである。コシモ・デイ・メデイチの爲に古代に範を取つた牌等<sup>メダル</sup>を作つたのもこの頃である。この期の作品として有名なものは、コシモの爲に作り、今日はフロレンスのバルヂェロ博物館に藏するダヴィデ像である。これはルネッサンスに於ける最初の青銅<sup>ブロンズ</sup>の裸體像でギベルティ等には見られない所であつて、種々の點で古典に範を取つたものとして注目すべきである。その姿勢全體は<sup>(1)</sup>プラキテリアンな古典風であるが、帽子や顔貌は現代式<sup>モダン</sup>であつて、宛然郊外<sup>カンパニア</sup>に多く見受けられる牧羊少年そのまゝである。この點では恐らく當時にフロレンスの少年をモデルにし

(1) Praxitelian.



て創作したのであらう。詳しく見れば、武器、脛當、巨人の胄等は古代風であるが、少年が冠れる田舎の帽子は全く現代風である。されば畢竟モデルは古代と現代と二つあつたらしく、これら二つを結合したもので、古今を兩々相對照して見ると一しは興味の深いのを覚える。この肖像が聖書のダヴィデであるのを語るのは僅かに左手に持つ石と右手の劍と巨人の首とのみである。このダヴィデ像の外に、同じく羅馬研究の産物として唱歌壇(1)がある。羅馬特有の題材たるキューピッドと躍る子供達の浮彫である。これを立つて眼の高さから眺めれば、愉しさがいき／＼と躍動してくるのを感じる。刻まれて居るのは全部小兒で、彼等は我を忘れて一心に快よい活動に浸つて居る。従つて單純で一筋で力が溢れて居る。この唱歌壇の浮彫は同時代の新進作家ルカ・デ・ロビア(一四〇〇—八二)と競つて作つたもので、今日も兩者は相對して飾られて居るがロビアの浮彫が小兒の中に青年を交へ且つ樂器を配したのに比べて、よい對照をなして居る。第三期は一四四

(1) Cantoria.

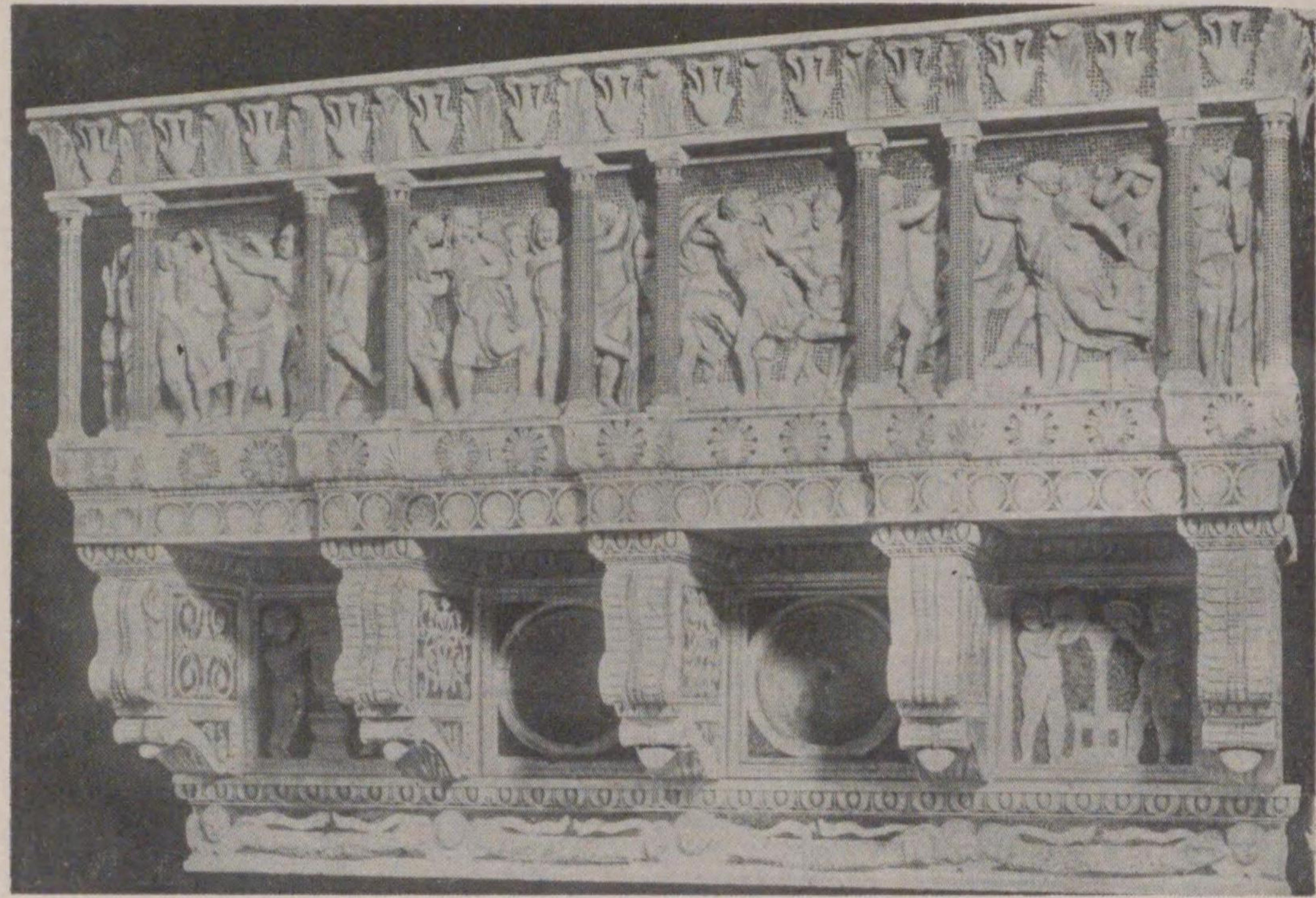


作. チンイヴ・ダ・ードルナオレ 餐晩の後最

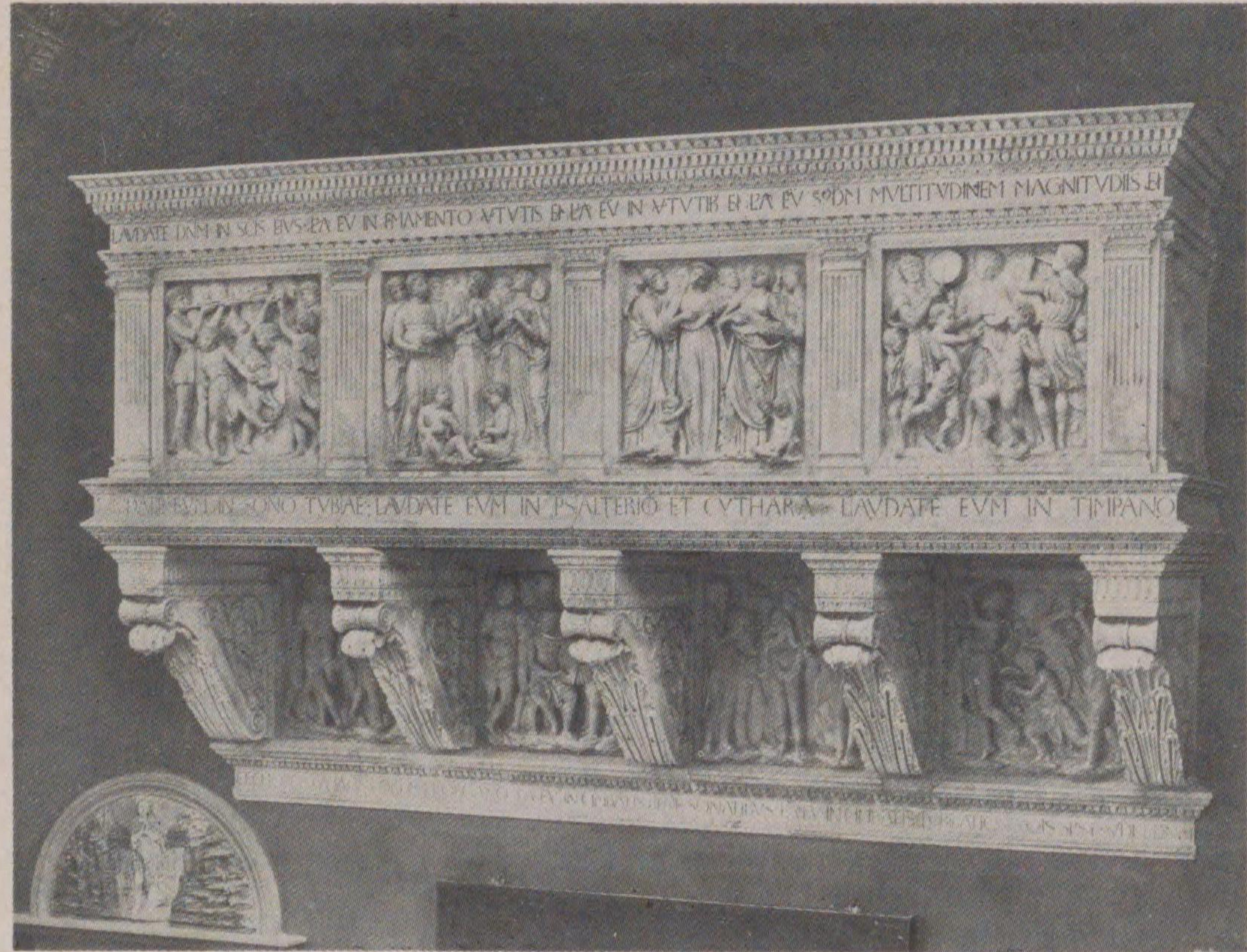


ダヴィデ ドナテロ作





作ロテナド 彫浮アリトンカ



作アピロ・ラデ・カル 彫浮アリトンカ



三—五三の十年間でパドワに<sup>(1)</sup>住んで居た時代である。彼がこの期間に齡六十の阪を越すのである。此處で<sup>(2)</sup>聖ペトロニオの青銅像と「<sup>(3)</sup>傭兵隊長ガタメラター」を作つた。而して彼の四十年間の研究たる古典主義はこの「ガタメラター」に於て最高頂點に達したのであつた。その大膽、その雄勁、當に羅馬皇帝<sup>(4)</sup>マルクス・アウレリウスの騎像以來の第一等の騎像と言ふべきである。作られた人物その人は一傭兵隊長<sup>(5)</sup>であつたが、美術としてはこの十五世紀中葉に作られたこの作は今日、尙ほ全世界の有する最良なる藝術品の一つである。彼の第四期は一四六六年の死に至るまでの晩年の時代で主としてフロレンスに住んで居た。聖ロレンツォ寺の「青銅説教壇」を作つたのはこの時代である。又彼が自然の醜きものを取り扱つたものには「<sup>(6)</sup>痴呆者」がある。

之を要するに、ドナテロは古典を模範としたが、これに盲従したのではなく、彼自らの道を取つたのである。この道は彼を導いて種々様な題目へ

(1) Padua.  
(2) St. Petronio.  
(3) Condttiere Gattamelata.

(4) Marcus Aurelius.  
(5) Zuccone.



と到らしめた。しかし一切の標準は自然主義ナチュラリズムにある。彼は社會階級のあらゆるものをモデルとし、従つて美のみでなく醜をも取扱つた。彼によつて彫刻は建築から全く解放され、獨立の地位を勝ち得るに至り、更に進んで他に對して影響をさへ及ぼす様になつた。即ちその後の美術家、殊に畫家は概ねドナテロの研究に心を注いで居るのである。ドナテロは人格高潔にして貪らず、コシモの尊敬する所であつた。當時ドナテロは自分の側に尙ほルカ・デラ・ロビア及びその甥アン・ドレ・デラ・ロビア(一四三五—一五二五)の如き名家を數へ得た。是等の一團の天才によつて、ルネッサンスの彫刻はアテーネに於けるフイディアス(2)の時代にも劣らざる古典美に達し、繪畫の進歩を凌いで、いはゞルネッサンス彫刻の古典時代を現出したのである。然らば是等すぐれた彫刻美を生み出したものは抑も何者であつたらうか。勿論それには個人の天才と、その保護奨勵が必須のものではあるが、今はこれらの特殊原因を別として、一般的歴史的原因を抽象すべしとせば、私

(1) Andrea della Robbia.  
(2) Phidias.

は躊躇するところなく次の三つの事を指摘しよう。曰く、異教主義ヘイガニズム、換言すれば古典古代クラシカル・アンティーク、曰く、基督教主義(2)、曰く、自然主義ナチュラリズム、これである。再びヒューマニズム全體について考へる。如上の彫刻に於てまづ完全に現はれたる三個の精神は矢張りヒューマニズム全體の傾向を指導する精神である。吾々は同じ精神が一層活躍して遂にルネッサンス最盛期を生み出すを見るであらう。

(4) Uomo universale.

### 第十三節 ウォーモ・ウニヴェルザール

ヒューマニズムは學藝に於ける一個の個性の發揮である、猶ほ政治上に於て專制主が個性の發揮であるが如し。當時の語にウォーモ・シンゴラーレ(3)ともウォーモ・ウニコともいふ、これは個人が享受したる教養がその最高度に到達して一個特殊の存在にあるものをいふ。而してかくの如き個性にして若し廣く一切の知識に通じ、一切の才藝に練達する者あらば、これをウ

(1) Paganism. (Classical Antiquity)  
(2) Christianity.  
(3) l'uomo singolare. (l'uomo unico)



オーモ・ウニヴェルザールと稱せられて最も尊敬せられた。ダンテはその先登第一の例であつたが、殊に千四百年代に入りていはゞ復活して、一層時代の羨望渴仰の的となつた。この時代は實にかくの如き大天才の出現少からず、以て後世を驚倒するに足る。その代表者はこの世紀の半ばには、既に「繪畫論」の著者として又たロレンツォの師友として指摘したアルベルティである。この世紀から千五百年代へかけては一層偉大なるはレオナルド！ダ・ヴィンチである。少しく各々につきて語らう。

レオネ・バティスタ・アルベルティはフロレンスの人、彼の家は亡命して居たから、彼は二十歳を過ぎてから始めて故郷に歸るを許されて、その間に非常に進歩して居たフロレンス文化で一しほ教養され、早く有名となつた。人となり身神共に健全にして、凡そ肉體を使用する技術にも又た一切の精神による學藝にも、殆んどその一切に堪能であつて、中にもその内の或るものに於ては優に専門の大家を成して居た。少しく彼の長所を指摘せ

(1) Leonardo da Vinci.

う。高跳しては直立する人を越える、弓を射ては堅甲を穿ち、貨幣を投げ上げて寺院殿館の屋根の頂點に達し、荒馬を制し乗馬に長じ、音樂は何等學ぶ所ないにも拘らず自ら作曲して専門家を驚かし、法律は貧困を冒して學び宗俗兩つながらに熟した。彼が古典に通じ之を理想としたのは勿論である。年二十四歳にして言語を暗んずる記憶力の減退を感じ、因て轉じて數學物理を學び之と共に一切の技術を習ひ、嘗に學者及び美術家としてのみならず、靴直しの術に至るまでの些末の技術家としても堪能であつた。建築繪畫塑術の如きは並行して秀で、よくその道の大家の壘を摩した。彼の建築の有名なものは既に擧げた通りである。機械工學についても發明がある、カメラ・オプスクラを組み立て山川風景星雲を寫したが如きである。文學に於てはラテン語で散文的詩歌、小説、卓上演説、弔辭、論文、講演、詩歌があり又た國語によりても多くの論文を草し以てイタリア文學及び國語の歴史上に一位置を占めて居る、この國語で書いた點に於て「修身齋家